

沖縄県文化財調査報告書第50集

# 稲福遺跡発掘調査報告書

(上御願地区)

1983年3月

沖縄県教育委員会

## 序

近年、諸開発事業の進展に伴い全国的に土地と結びついた埋蔵文化財の破壊が多くなってきています。

本県においても、とくに復帰後開発事業が激増し、地域を問わずいたるところで埋蔵文化財破壊の問題がひきおこされています。

県教育委員会といたしましても、地中深く埋もれている埋蔵文化財の保存を図るべくいろいろな施策を講じているところではありますが、現状では、開発に伴う事前調査に追われているというのが実情であります。

本報告に収めた稲福遺跡も大阪航空局の無線中継所改修工事により壊される可能性があるために事前調査を実施したものであります。

稲福遺跡は、大里村にある中世期の遺跡であり、当時の沖縄社会を考える上で貴重な文化財だとの評価が与えられていますが、それを立証するかのように今回の調査でも貴重な成果をもたらすことができました。

本書は、こうした調査の成果を記録したのですが、本書が広く活用され文化財保護の一助ともなれば幸いです。なお、発掘調査から資料整理にいたるまで地元の人びとをはじめ多くの関係者から御指導、御協力を賜りました。末尾ながら厚くお礼申し上げる次第であります。

昭和 58 年 3 月

沖縄県教育委員会

教育長 新 垣 雄 久



## 例 言

1. 本報告書は大阪航空局の依頼により昭和56年度から昭和57年度の2カ年にわたって継続調査された稲福遺跡（上御願地区）の発掘記録である。
2. 発掘調査作業は、昭和56年12月22日から翌昭和57年3月28日まで実施され、その後昭和58年3月まで整理作業、報告書編集を行なった。
3. 遺跡の発掘調査は沖縄県教育委員会が調査主体となり、地元の協力を得て実施した。なお、調査の組織については第I章に別掲してある。
4. 石質および玉類の同定については大城逸朗氏、獣骨の同定は川島由次氏、魚骨の同定は吉野哲夫氏、炭化米・麦の同定計測は佐藤敏也氏にそれぞれお願いした。記して謝意を表したい。
5. 本書の執筆は当真嗣一、大城慧、比嘉春美、金城亀信が行い、個々の分担については第I章に別掲してある。なお遺物の整理作業は比喜春美、大城明子、城間光子、城間千恵子各氏の手を煩わした。
6. 出土遺物は沖縄県教育委員会文化課資料室にて保管、展示されている。広くご活用願いたい。
7. 本書の編集は、当真が行なった。





# 目 次

## 序

第1章	はじめに	1
	第1節 調査にいたる経緯	1
	第2節 調査の組織及び成果の記録	1
第II章	遺跡の位置と歴史的環境	3
第III章	遺跡の概要	7
第IV章	調査の概要	10
第V章	調査の成果	13
	第1節 検出された遺構	13
	第2節 出土遺物	18
	1 輸入陶磁器	18
	2 中世須恵	39
	3 土製品	39
	4 骨製品	42
	5 玉 類	42
	6 鉄製品	45
	7 石製品	52
	8 青銅製品	56
	9 土 器	63
	10 炭化米・麦	112
	11 魚骨・獣骨	118

## 挿図目次

第1図	大里村の位置	
第2図	稲福遺跡の地形	4
第3図	上御願地区グリット配置図	5
第4図	稲福遺跡地形測量図	9
第5図	遺構全体図	12
第6図	第2号土壌	15

第7図	第4号土壙	16
第8図	青磁実測図 (劃花文碗・櫛目劃花文碗)	30
第9図	“ (篋削鎬蓮弁文碗・篋削蓮弁文碗)	31
第10図	“ (無文碗)	32
第11図	“ (鉢・皿)	33
第12図	“	34
第13図	“	35
第14図	白磁実測図	36
第15図	陶器実測図	38
第16図	須恵器実測図	40
第17図	“	41
第18図	玉・土製品・骨製品実測図	44
第19図	鉄製品実測図 (鉄鏃・刀子)	50
第20図	“ (鉄釘)	51
第21図	石製品実測図 (有孔石製品・砥石・磨石・敲石・石斧・凹石)	54
第22図	“ (石皿・敲石)	55
第23図	青銅製品 (古鏡・カンザシ・鞋・青銅製金具類)	61
第24図	古銭拓影	62
第25図	土器実測図 (壺形土器)	101
第26図	“ (壺形土器)	102
第27図	“ (壺形土器・鉢形土器)	103
第28図	“ (鉢形土器)	104
第29図	“ (鉢形土器)	105
第30図	“ (鉢形土器・碗形土器・手捏土器)	106
第31図	“ (不明土器・その他の土器・滑石混入土器)	107
第32図	“ (蓋・把手・底部)	108
第33図	“ (底部)	109
第34図	“ (底部・土製品)	110
第35図	“ (参考資料 久米島下地原洞穴遺跡採集の土器)	111





# 第 I 章 はじめに

## 第 1 節 調査にいたる経緯

後述するように今回調査の対象となった所は、大阪航空局が所管する施設内である。土地の所在地は大里村字大城稲福原 1645 番地及び 1646 番地。土地台帳では知念敏男氏（大里村字稲福 1775 番地）所有の土地となっている。

1980 年（昭和 55）、大阪航空局より、当該地域における既施設の改修工事を実施するにあたって、埋蔵文化財の有無について県文化課に対し事前の確認がなされた。当地は琉球大学考古学研究会が 1969 年から 1974 年にかけて 6 次にわたる発掘調査を実施して以来、広く知られている遺跡であり、グスク時代初期のグスクの様相や集落の形態を知る上で貴重な遺跡の一つとされている。こうしたことから、当該地における埋蔵文化財の存在は疑いのない所であった。したがって、大阪航空局に対してその旨の報告を行い文化財保護に協力していただくようお願いを行った。ところが当該施設の老朽化は著しく、施設の改修は必至であるという大阪航空局からの連絡を受け、県文化課としてはやむなく原因者と協議のもと「記録保存」を図ることになった。

発掘調査は 3 ケ月の予定で、工事に係る全域の全面発掘調査を行なうこととし、1981 年 12 月 22 日の表土剥ぎより発掘を開始した。

## 第 2 節 調査の組織及び成果の記録

### 1 調査の組織

調査の委託	運輸省大阪航空局
調査主体	沖縄県教育庁文化課
事務担当	当真嗣一
調査担当	当真嗣一・大城慧
外業・整理作業員	

島袋ヨシ子、普天間明子、普天間初江、大城シズ子、普天間敏子、城間ツル子、新垣豊盛、幸地ヨシ子、幸地初、玉城富子、小橋川幸子、呉屋苗子

糸数初子、島袋吉子、松田ヨシ子、宮平芳子、安里美枝、呉屋正一、小波津博子、津波古文子、玉城好美、田崎厚吉、知念初子、城間光子、城間千恵子、知念富士子、嘉手苺由美子、

なお、発掘調査にあたっては沖縄考古学会会長嵩元政秀氏、大阪市立大学教授紛川昭平氏をはじめとする多くの方々の御教示、御指導を得た。感謝申しあげたい。

## 2 成果の記録

本報告書は次のとおり分担して執筆した。編集は当真が行った。

第 I 章	当 真 嗣 一
第 II 章	”
第 III 章	”
第 IV 章	”
第 V 章	”
1	”
2—1	”
2—2	”
2—3	”
2—4	”
2—5	”
2—6	大 城 慧
2—7	”
2—8	”
2—9	金 城 亀 信 ・ 当 真 嗣 一
2—10	当 真 嗣 一
2—11	比 嘉 春 美

## 第Ⅱ章 遺跡の位置と歴史的環境

稲福遺跡は、沖縄県島尻郡大里村字稲福小字稲福原にあり、通称「上御願」・「稲福の殿」・「仲村御嶽」と呼ばれる3つの拝所に囲まれた地域とその周辺にまたがる、かなり広範囲にわたって存在するグスク時代の遺跡である。『全国遺跡地図47、沖縄県』（注1）では、No.9の47と登録されており、遺跡名は旧字名の稲福に因み、「稲福遺跡」と命名されている。

今回発掘を行った地点は、前記の「上御願」と呼ばれる拝所に隣接した東側の原野で、その行政上の位置は沖縄県島尻郡大里村字大城稲福原 1645 及び 1646 番地となっている。

稲福遺跡が所在する大里村は、県庁所在地である那覇の東南東約8kmにあり、島尻郡では北東側に位置している。村の四囲は、与那原町、佐敷町、玉城村、具志頭村、東風平町、南風原町などの町村に隣接して人口9,112人（昭和56年4月現在）、総面積およそ12.24平方kmの村である。周囲が海に囲まれた沖縄としてはめずらしくも海に隣接する地域を含まない内陸部に発達した村となっている。地形的には、村の東側に連なる丘陵地帯と中央部で不連続に認められる微高地、その両側をとりまく低平な平坦地形の三つのブロックに分けられる。

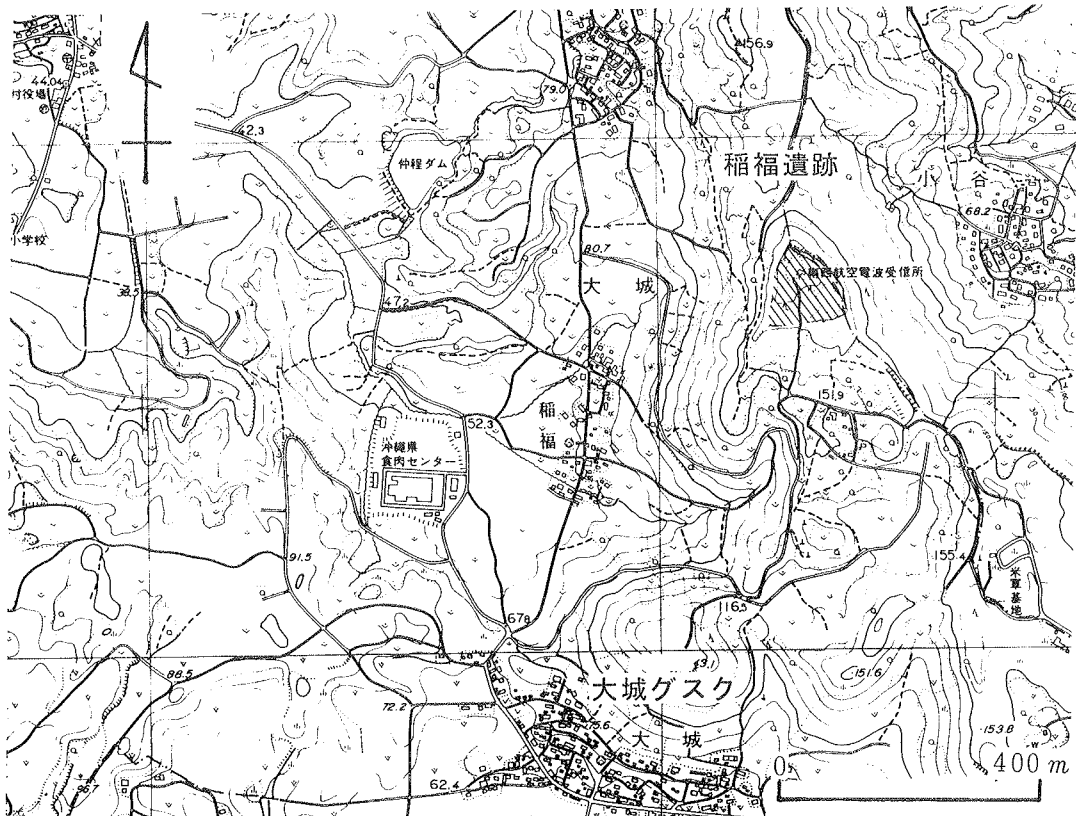
本村内の遺跡は、現在までの調査ではグスク時代以降の遺跡を多とし、古い時期のものとしては中期の1件のみが確認されているにすぎない。この原因は、本村の大部分がクチャと呼ばれる青色粘土層の耐水性の強い風化土壌によって覆われているためにこの地での開発が歴史的に大変遅れて出発したところにもとめられそうである。グスク時代以降の遺跡は3ブロック中の東に連なる石灰岩丘陵地帯に集中して見い出される。たとえば、丘陵の北端には、島添大里の大里グスクがあり、その南に真境名遺跡が立地し、そして稲福遺跡、大城グスクが南に連続して分布するという配置である。

今回調査の対象となった稲福遺跡の位置は、丘陵の頂部に近い一角であることに加えて標高165m～175mを測り、村内の低平な平坦部との比高約125mという高位のため、視界は広く、西に現稲福村落を足下に、遠く慶留間諸島を一望し、東には第一尚氏の祖尚思紹・尚巴志父子の築いたとされる佐敷グスクとその貿易港たる馬天港を眼下に見下ろしている。また連続する丘陵の北の先端には大里グ



スクが位置し、南には大城グスクが形成されているのである。遺跡の地形的特徴に眼を移すと、その平面形状は三角形を呈し、二方は崖に囲まれ、底辺たる南は緩傾斜を示しながらかつての稲福村落（太平洋戦争前の村落は、稲福遺跡の周辺の高位置にあったが、敗戦後は、下方の低平な平坦地へと移動した）である上稲福に続くのである。調査地点の「上御願」周辺は、北と西側に石灰岩の露頭岩が目立ち、すぐその後方は数メートルの断崖をつくっているのである。したがってこの一帯は、石塁は確認されていないものの天険の要害としての地の利を得、グスク様の地形的景観を呈している。古老のはなしではこの丘陵の頂部を「山グスク」と呼称しているようである。現在ここには、大阪航空局所属の無線中継所が設置され、無線塔や局舎が建っている。今回の調査対象は、無線塔や局舎が建っているところから一段下がった場所であった。調査の対象区域の面積は約1,232㎡のスロープの部分で、今回発掘された面積は、そのうちの1,000㎡であった。

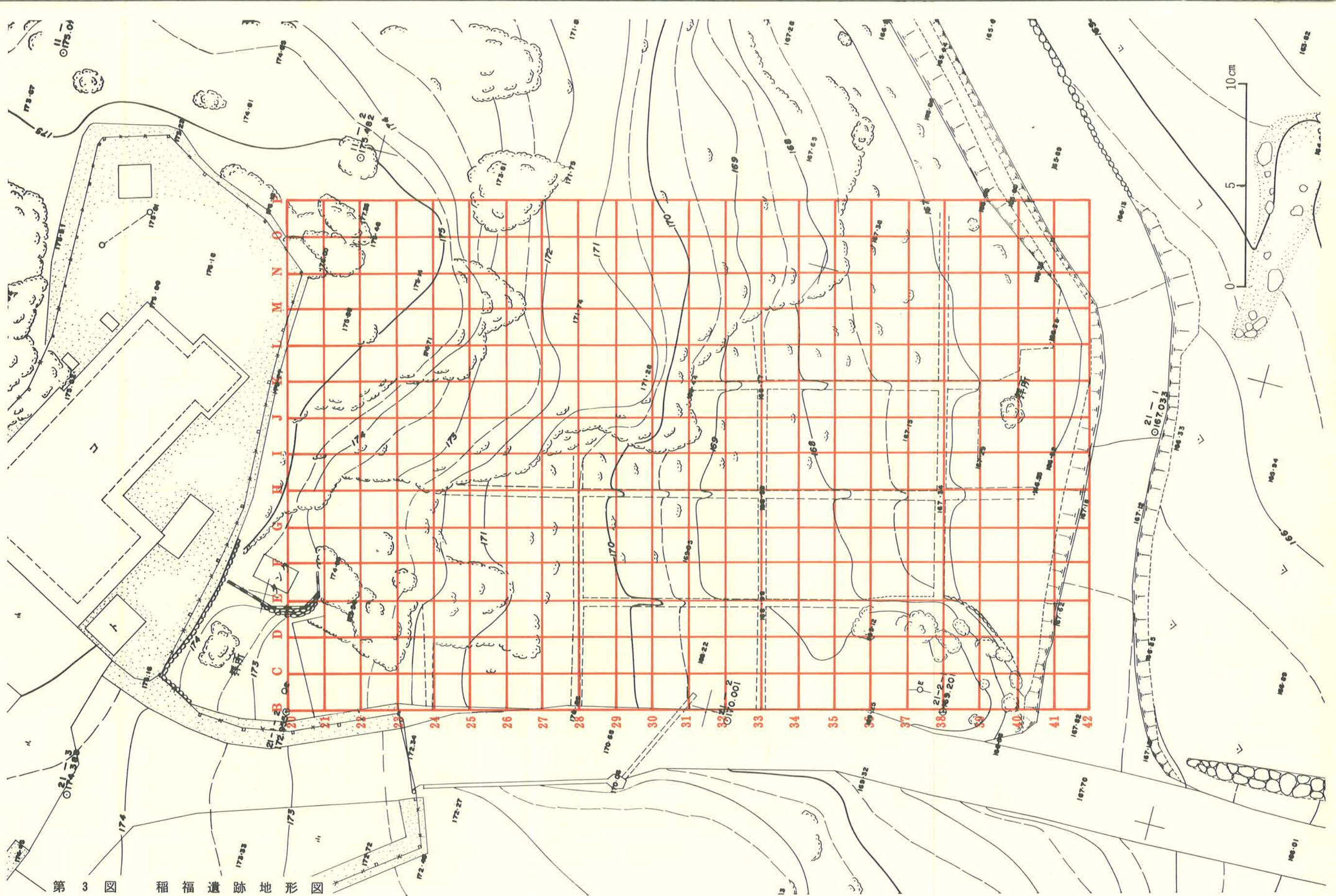
(当真嗣一)



第2図 遺跡の位置

(注1) 文化財保護委員会『全国遺跡地図47 沖縄県』 国土地理院発行





第 3 図 稲福遺跡地形図



### 第 III 章 遺跡の概要

稲福遺跡は、現在村びとたちによって信仰されている「上御願」・「稲福の殿」・「仲村御嶽」の三つの聖域に囲まれた地域で、旧稲福部落内に立地する遺跡である。これらの三つの拜所の周辺は、輸入陶磁器やグスク系土器の遺物を包蔵する遺跡となっており、かつて人間の居住域であったことが知られるのであるが、その性格については集落跡か祭祀跡かそれともグスク跡かあるいは、この三者を含む居住域なのかその実態はまだわかっていない。琉球大学考古学研究会は、本遺跡について精力的に発掘調査を行ってきたが、その成果の上に立っての分析だとして、次のような図式を提起している。すなわちそれは、稲福遺跡を構成する前述3つの場所を単位遺跡として把え、稲福村落の形成過程を「原史時代にA地点とC地点に居住していた2つの血縁的集団（上御願集団と仲村御嶽集団）＝血縁的小共同体が、遅くとも染付の登場期（14世紀）にはB地点（筆者注「稲福の殿」周辺）の地に移動結合し地縁的共同体を形成し稲福村落の原形ができた。」（注1）というわけである。この図式は一見、合理的な解釈であるようにみえるのだが『稲福村落第一次調査報告書』（第二次以降の発掘調査報告書は1983年現在未刊）を見る限り、考古資料の見方や取り扱い方に多くの疑問点があり、また遺跡の解釈としてもあまりに飛躍した論の展開がみられ、一般的な解釈とみなすわけにはいかないように思える（注2）。

今回調査した地域は稲福遺跡の中では二番目に高い平場であって、その左脇には「上御願」と呼ぶ拜所を擁し、さらにその上方に「山グスク」と呼ばれるひとときわ高い平場を控えている。山グスクと呼ばれる平場は、標高175mで、二方は崖に囲まれ自然の要塞をなしているのである。この断崖下には、上方からの投棄によって推積した遺物包含層が認められる。さて、この「山グスク」を含む広域の稲福遺跡の性格をどのように規定していけばよいのかという問題であるが、今回の調査を踏まえて概観すればおおよそ次のような推量が可能ではなかろうか。

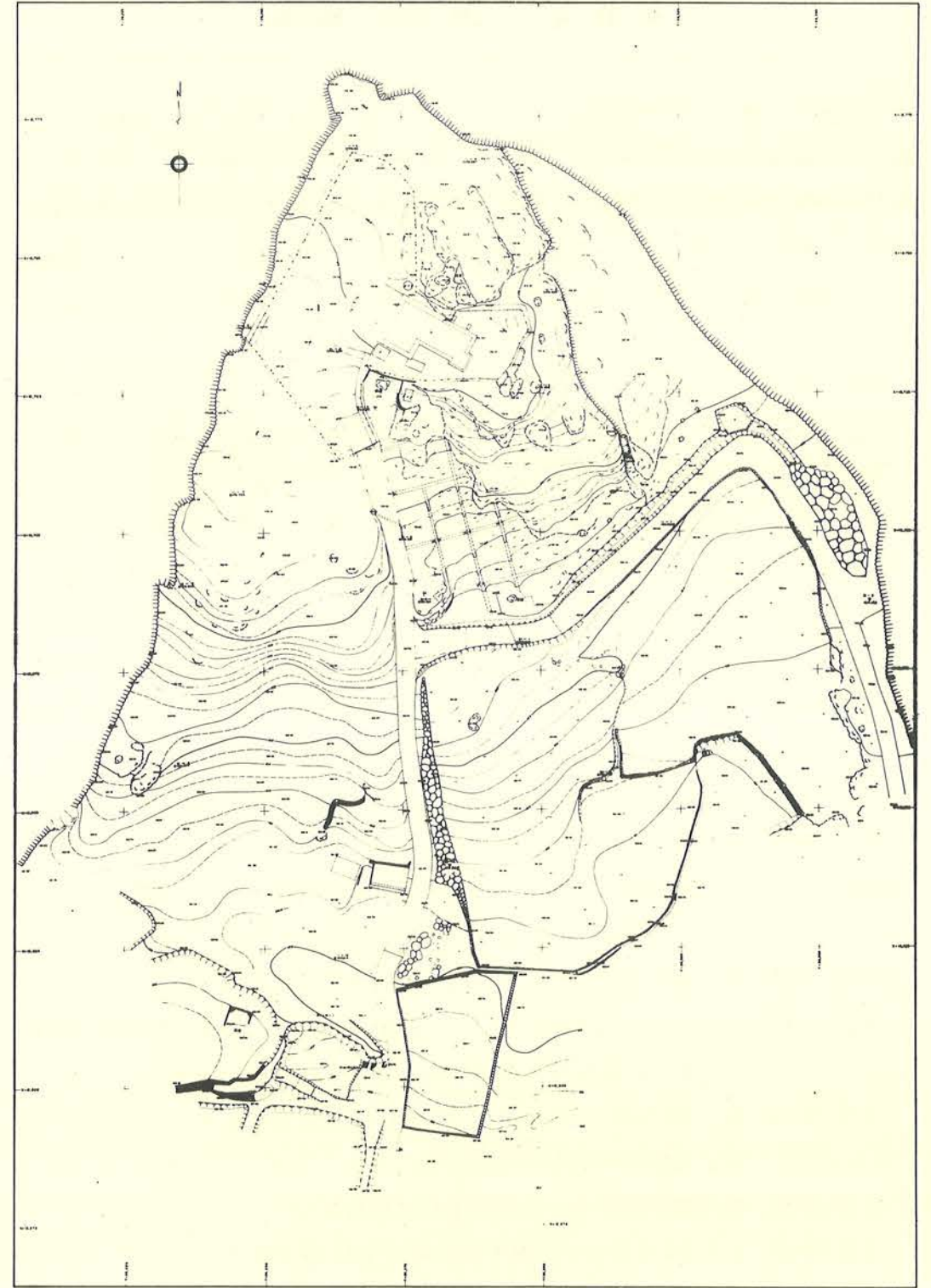
- 1 遺跡中最も高い平場にはグスク（＝領主とも呼ぶべき土豪の屋敷）があり、これに続く「上御願」周辺（今回調査を実施した地区）にはグスクと関係する施設が立地していたのではないかということ。

2 「上御願」を境にその下方に当時の集落が展開していたのではないか。そしてその集落の量的な発展によって遺跡は次第に下方へと拡散したのではないか。以上であるが、小面積の発掘でこれだけの広域遺跡の内容を知ることが容易なことではない。さらになお遺跡を残した人びとの共同体的諸関係と当時の社会を社会構成史的観点から把えていくためには、今後の資料的増加をまつ必要がある。資料的裏づけよりは論が先行してドグマに陥らないためにも、具体的に事物に即した学問的精緻さが必要だと思われるのである。

注1 琉球大学考古学研究会『稲福村落—稲福村落第一次調査報告書』  
1971年9月

注2 たとえばその一例として彼らが行った土器に含まれるテンパーの肉眼的観察による編年が、現在の沖縄考古学界で一般的な見方となっていないことを挙げる事が出来る。

(当真嗣一)



第4図 稲福遺跡地形図



## 第 IV 章 調査の概要

本地点は大里村字大城福原 1645、1646 番地に所在する。この地域は、大阪航空局の局舎であるコンクリート製平屋の建物から上御願と呼ばれる拝所に至る傾斜面の部分であり、面積にして約 1,232  $m^2$  である。発掘対象地は高い所で標高 175  $m$ 、低い所で標高 167  $m$  を測り、比高差 8  $m$  の傾斜地となっている。対象地のうち東側の約 400  $m^2$  程は石灰岩が露頭する岩山となっており、この発掘は不可能であった。したがって実際の発掘面積は約 800  $m^2$  であった。

発掘はグリッド方式により、グリッドの一単位は 2  $m \times 2 m$  である。グリッドの表記は東西線をアルファベット、南北線を算用数字を用いることにし、グリッド番号は北西隅の杭番号を採用した。

発掘地点は、地主によりかなりの量の客土がなされており、発掘はまずユンボによる客土の排土から行なわれた。以下、調査経過を調査日誌より抜粋して記す。

12 月 22 日 ユンボによる客土の排除開始、客土の量は 10 屯車の約 15 台分である。客土を排除した後、作業員を入れ本格的な調査にかかる。

12 月 24 日 D-24・25・26 の各グリッドに拳大の石灰岩塊が敷き詰められた状態で露出しはじめる。第 1 号礫群とする。

12 月 25 日 C-24 グリッドで古鏡が出土。クリスマスの日だが作業を続行。

12 月 28 日 御用納め、午前中作業を行う。

昭和 57 年 1 月 5 日 32 ラインから南側下方に順次発掘グリッドを拡大していく。

1 月 7 日 第 I 層の発掘を終えたグリッドでは第 II 層に移っていく。

1 月 11 日 しばらくの間降雨がないため、地面が乾燥し、遺構検出に手間取ったため、散水を行ないながら発掘を続ける。

1 月 12 日 E-27～E-28、F-27～F-28 の各グリッドにまたがって第 2 号礫群が出土しはじめる。

1 月 14 日 柱穴群が各グリッドで出土しはじめる。

1 月 19 日 C-35 グリッドの第 II 層から丸玉が 15 点出土。

1 月 22 日 O-38 第 II 層で鉄鏝が出土。

1 月 27 日 L-38 のグリッドに礫の集中する部分が見られるが、遺構かど

うかまだわからない。

- 1月29日 G-24、25、26、27の各グリッド完掘、ここでは遺物包含層が認められず。
- 2月2日 第1号、第2号礫群は完掘。
- 2月5日 M-40、41のグリッドで玉4点出土。
- 2月15日 柱穴群の検出作業を続行。
- 2月19日 遺構の検出多くなる。
- 2月22日 H-34グリッドの第Ⅲ層でガラス玉1個出土。
- 2月24日 柱穴群の検出多し
- 2月26日 この日までに掘りあげた遺構は柱穴108本、土壙4である。
- 3月1日 「上御願」と呼ぶ拝所裏側（拝所に伴う石列遺構）で20数枚の古銭がかたまって出土
- 3月3日 C-33、C-34の両グリッド間に露出した柱穴の中から140個の玉がまとまって検出。
- 3月5日 掘り出した土を水洗いして小さな遺物を検出。このようにして検出した玉は本日で約200個以上にのぼる。
- 3月8日 M-35グリッドの第Ⅲ層で鉄鏃が出土。
- 3月10日 M-36の杭からN-39の杭にかけて浅い溝状の落ち込みが露出したが、溝が浅く、遺構とはみなし難い。
- 3月15日 検出した遺構群の写真撮影開始。
- 3月16日 各遺構の実測作業開始
- 3月28日 写真撮影、遺構実測、精査をすべて終え、発掘作業の全日程を終了する。



第5図 遺構の露出状況



## 第 V 章 調査の成果

### 第 1 節 検出された遺構

調査の結果検出された遺構は、柱穴群 1、礫群 3、土壌 4、拝所に伴う石列 1 である。

前述したとおり、今回の調査対象地は傾斜地であり、遺跡の中心部とは見なし難い所であったが、露頭岩の間隙部を縫うように柱穴群・礫群・土壌等の遺構が残されていた。これら遺構群についての性格は現状では不明であるが、今後、今回調査対象外となった地域、特に局舎内への進入道路下や局舎周辺の平坦地にこの遺跡の中心部分が保存されている可能性があり、この地域の発掘調査が進めば遺跡総体としての性格がさらに鮮明にされていくものと思われる。

ところで遺構群は、第 I 層の表土層を除去した後、第 II 層の下部付近から露出しはじめたのであるが、被覆する層が薄いうえにいたるところに石灰岩の岩盤が目立ち、遺構そのものとしてはけっして保存のいい状態とはいえなかった。さらに本地域は、傾斜地という地形上の制約から数百年にわたる風雨の浸食を受けて遺構面がかなり低くなっていることが予想された。そのことは E-33、F-33 G-33 の各グリッドに掘り込まれた柱穴群が全て浅くなっているということからも推察されることである。

以下、検出された遺構をとりあげて説明を加えていくことにする。

#### 柱穴群

この柱穴群は北が 31 ラインに、東が H ラインに、南が 34 ラインに、西が局舎進入道路によってそれぞれ区切られており、この中に大小 160 本の柱穴群が掘り込まれている。柱穴が密集する東北東から東南東にかけてのへりにあたる所には L 字状に掘り込みが入り段を有している。おそらくこの L 字状掘り込みは、建物が建った所とその前庭部との境界をなす段であった可能性が強い。柱穴は小面積に密集しており、これらの配列から建物の平面プランをつかむことは困難であるが、柱穴群の配列、L 字状掘り込みの方向、地形的状況などを勘案すると北東—南西に長軸をもつ掘立建物跡を想定することができる。

柱穴群は局舎進入道路下にもぐっていることが予想されたが、今回は調査対象外であったために発掘は行なわなかった。柱穴の平面形は円形または不整

円形を呈し、径が 25～30 cm、深さ 40～50 cm のものが多かった。中には楔石を伴うものが若干含まれていた。

#### 第 1 号礫群

この礫群は、C-25、D-25、B-26、C-26、D-26、B-27、C-27、D-27 の各グリッドで検出された不整形の礫群である。人頭大の石灰岩塊の間に拳大、さらに親指大の礫群が密集しており、これらの礫群は人為的に敷き詰められたものと考えられる。地形的には約 15 度位の傾斜を示して地盤が安定してない場所に敷き詰められていることから土砂の流失を防ぐための施設かとも考えられるが判然としない。C-25 グリッド内の礫群下で鉄斧一個が出土した。

#### 第 2 号礫群

第 1 号礫群の南東約 2 m のところに隣接して検出されたもので、F-27、E-28、F-28、G-28 の各グリッド内にある。礫群の状況は第 1 号礫群に類似するが、礫の大きさは第 1 号礫群の礫に比べ比較的小さい。この礫群の北と東は岩盤が目立ち露頭岩地域となっている。

礫群の規模は、2 m × 3 m の不整長方形で、礫の層厚は約 5～7 cm であった。なお、第 1 号礫群、第 2 号礫群とも第 I 層下部付近から露出したものである。性格は不明である。

#### 第 3 号礫群

I-33 グリッドを中心に直径 1.5 m の不整円形状に礫を敷き詰めたものである。礫群の東側は露頭岩と接続し、西側は L 字状の落ち込み部に接している。礫群の礫は拳大のものが多くほぼ一定していた。性格不明である。

#### 第 1 号土壌

E-30 グリッドの東壁側で検出された不整楕円形の土壌である。主軸を N-66°-E の方向にとり、主軸長 1.25 m を測り深さ 30 cm であるが、壁面には石灰岩の根石が露呈している。埋土は上層から下層に至るまで黒褐色土一色である。性格不明である。

#### 第 2 号土壌

第 2 号礫群の南に隣接して岩盤と岩盤の間に掘り込まれている。主軸を N-45°-W の方向にとり、主軸の長さ 2.3 m の不整長方形である。深さ 40 cm を測



り、床面や壁には石灰岩の岩盤がみられた。性格不明である。埋土は黒褐色であるが、中には拳大の石灰岩塊が数個混入していた。



第 6 図 第 2 号土壙

### 第 3 号土壙

L字状の掘り込みとHラインに残した観察畦との間を第3号土壙としてとり扱った。このL字状の掘り込み部には黒褐色土の遺物包含層が厚く堆積していた。この黒褐色を水洗いしたところ、小さい丸玉と炭化米が多量に検出された。

### 第 4 号土壙

I-35とJ-35のグリットを中心に検出されたもので不整円形である。上端の径が3.3m、底面の径2.3m、深さ50～60cmを計る。底は鍋底状を呈している。土壙の中には拳大から人頭大、さらに大人の人がひとかかえもある大きな石まで大小さまざまな石灰岩塊が投げ込まれていた。埋土の中には砲弾の破片が若干混入していることから考えると第二次大戦中の砲弾穴の可能性も強いが、現段階では判然としなかった。



第7図 第4号土坑

#### 拝所に伴う石列

今回の調査対象地となった南西隅に、径3m程の大岩を中心に熱帯樹が繁茂する場所がある。ここは拝所となっており通称「上御願」と呼ばれている。この石列は、大岩の南側一段低くなったところに確認されたもので、岩をとり囲むように配置された石列である。この石列の一部は発掘前からすでに上半分が露出しており、今回の発掘によってそれが企画的に配列されていることが判明したものである。石列の個々の石は、長方形に加工された石灰岩で、後世の攪乱を受けてはいるが、4個の石が並列して現存していた。石列に囲まれた大岩は少し抉れが入り岩蔭状を呈しておりそこから20数枚の古銭が一括して出土した。

#### 小 結

今回の調査で検出した遺構は柱穴群、礫群、土坑、石列である。

柱穴群は局舎内進入道路近くにまとまって検出され、全部で百数十本を数える過密度であった。おそらく数次にわたっての建て替え、建て増しが行なわれた結果であろう。これらの柱穴群は、比較的平坦な場所と露頭岩が少ない所を

選んで掘り込まれており、意識的に露頭岩の多い所をさけて掘立柱建物が建てられていたことが判明した。現状の柱穴群から建物跡の平面プランをつかむことは困難であるが、柱穴群の配列状況やL字状掘り込みの方向、地形の形状等からみて桁行方向N-40°-Eの掘立柱建物跡を想定することが出来、この場合の規模としては、桁行7m、梁間6mが推定される。

礫群については比較的傾斜の厳しいところであると同時に露頭岩が目立つ所に一重に敷き詰められたものであった。それがどんな目的で何のために敷き詰められたものであるか判然としなかった。

土壌は、埋土が黒褐色土を呈し遺構掘込み面が明瞭に色別できるものであった。しかし掘り下げていくにつれ岩盤の露出が目立ち、土壌としてはあまりいい状態のものとはいえない。いずれも性格不明のものである。

石列遺構は「上御願」という拝所に伴うものである。この「上御願」は『琉球國由来記』に収録された「上之嶽」に比定される拝所であろう。神名イノメツカサの御イベとなっている。この拝所は現在でもまだ信仰の対象となっている。

ところでこれらの遺構群の時期についてであるが、今回の調査で得られた遺物は輸入陶磁器で見ると、ほぼ13-14世紀の短期間にしぼられそうである。

(当真嗣一)



## 第2節 出土遺物

調査区内の各グリッドから土器をはじめとして輸入陶磁器、中世須恵器、鉄製品、青銅製品、玉類、石器等が多く出土している。これらの出土遺物は全て本県考古学編年のグスク時代に属するものであり、本土における中世期に比定される時代の遺物である。

各グリッドにおける遺物の出土量は、遺物包含層中からのものが圧倒的に多く、遺構に伴う遺物は極めて少なかった。遺物の分布状況については概して次のことがいえる。一つには柱穴群とその周辺部を被覆する黒褐色土の遺物包含層中から比較的多くの遺物が出土し、遺物の分布頻度に片寄りが見られること。二つには遺物は、地形に沿うように局舎が立地する頂部近くの上から「上御願」がある下方に向って出土量が増加する傾向にあり、その状況は上から下へ遺物が流れたような様相を帯びていたということである。

出土した遺物の多くは小破片であり、とくに生活容器については復元して器形を窺える標品は皆無に等しく、そのほとんどのものが僅か数cm四方の破片ばかりであった。輸入陶磁器の総体は、櫛目劃花文青磁（珠光青磁）や鎬蓮弁文の青磁碗などの13世紀代に属するものを主体としており、細線蓮弁文の青磁碗や電文帯の青磁碗および染付（青花）等は、未攪乱の層中から1点も出土していないということに本発掘区の特徴点が見い出せる。

### 1 輸入陶磁器

青磁、白磁、黒・鉄釉陶器、白地鉄絵壺の破片などが出土している。以下青磁から順に述べる。

#### 青磁（第8～13図）

本遺跡から出土した輸入陶磁器は、破片数から見た場合青磁片が最も多かった。その器種は、碗、鉢、盤、皿、香炉、合子などである。ほとんどが細片で実測可能な標品はわずかであった。

#### A 碗

青磁の中で最も多く出土したものは碗である。これらは①劃花文碗、②櫛目劃花文（珠光青磁）碗、③篋削鎬蓮弁文碗、④篋削蓮弁文碗、⑤無文碗に分類することが出来る。

① 劃花文碗（第8図）

25点の出土をみた。口縁部破片13、胴部破片12点である。標品は全て小破片であり、そのうち実測可能なものは5点である。第8図-1～5がその標品である。横田賢次郎、森田勉両氏の中国陶磁器分類案（注1）によれば龍泉窯系青磁碗Ⅰ類に属するものである。

第8図-1は内面に蓮花文を片彫りしているものであるが、線は細く、かなり簡素化の方向へ進んだ蓮花文である。横田、森田両氏の碗Ⅰ-2類に分類される。同図-2は、内面に片切彫りがみられるが、小さい破片であるために文様が分割され蓮花文か飛雲文かははっきりしない。1と比べ薄手で口唇部が細くなっている。1はD-21グリッドの第Ⅱ層、2は第1号礫群内からの出土である。3と4は横田、森田両氏分類のⅠ-4類に分類されるものである。内面口唇下に2本の沈線が認められるが細小破片のため全体を窺うことが出来ない。3は青味を帯びた緑色で釉はガラス質、内外面とも貫入が多い。Ⅰ-31第Ⅲ層出土。4は暗緑灰色を呈し、釉は透明である。D-22第Ⅲ層出土。5は口縁部に輪花のあるものでⅠ-4・bに分類されている標品である。灰青色を呈し、釉は不透明である。第1号礫群内からの出土。共に龍泉窯の青磁碗である。

② 櫛目劃花文碗及び皿（珠光青磁）（第8図-3）

碗

同安窯系の青磁で23点出土した。そのうち12点については実測可能な標品であった。口縁部2点と高台部2点は横田、森田両氏分類案では碗Ⅰ類である。第8図-6と7は口縁部破片である。6の場合は外面無文のもので横田、森田両氏分類案によればⅠ-1・a類である。L-34グリッド第Ⅲ層からの出土。7は外面に細かい櫛目を有するものでⅠ-1・b類に該当する。C-24グリッド第Ⅲ層出土。8と10はいずれも高台部資料であるが、そのうち8はⅠ-1・a類、10はⅠ-1・b類に属す標品である。前者がD-24グリッド第Ⅰ層、後者がL-35グリッド第Ⅲ層からそれぞれ出土した。

第10図9は碗Ⅲ類に分類されるものを図示した。この標品は体部外面にへら状の工具により片彫り風の太い沈線を入れている。小破片のため内面の施文の有無についてははっきりしない。口縁部3点、胴部5点出土したが、胴



部片は僅か1～2 cm四方の標品である。遺物包含層からの出土である。

#### 皿（第10図11）

1点出土した。体部中位で屈曲し、口縁部は直口して口唇を丸くおさめる。体部と見込みの境に段を有する。釉色は青灰色を呈しガラス質の釉で器外面の体部下半とあげ底の底部には施釉されていない。横田、森田両氏分類案の皿I-1・aに分類される。同安窯系青磁。J-34グリッド第Ⅲ層から出土した。

#### ③ 篋削鎬蓮弁文碗

胴部外面に篋により鎬蓮弁文様を彫るものをここにまとめた。出土した資料は2～3 cm四方の細片化したものによって占められ、口縁部から胴部、および底部にかけて残存しているものは1片もなかった。標品は口縁部細片52点、胴部細片18点であった。そのうち実測可能なものは10点あり、これを第9図に示した。

鎬蓮弁文様を精巧に彫ったものと粗雑なものがある。また蓮弁の先端が尖ったもの、やや丸味をもつものなどが含まれている。

第9図1は本グループで最大の破片であるが底部を欠損する標品である。鎬蓮弁が細く精巧に彫られている。釉はオリブグリーンが全面に均一にかけられている。ガラス質の釉である。胴部器外面には2×1.5 cmの窯滓が付着している。口縁部はわずかに外反する。B-34グリッド第Ⅲ層から出土した。2、3は暗い緑色をし、鎬蓮弁文は細く精巧に彫られているが釉調のため全体的ににぶくみえる。口縁先端は両者とも鋭く尖る。前者はG-36第Ⅲ層、後者はB-29第Ⅲ層からそれぞれ出土した。4と5は釉色は青緑色を呈しガラス質の釉である。前者は鎬蓮弁が精巧に彫られているが、釉の発色は悪い、口縁端を丸くおさめている。後者は鎬蓮弁文の彫り方がやや粗雑であるが、釉の発色はいい。蓮弁の先端はやや丸味をもち口縁端を尖らす。いずれもB-30グリッド第Ⅲ層から出土した。6・7・8・9・10の5点はいずれも釉色が灰青色を呈する標品である。そのうち8・9・10の3点は鎬蓮弁が精巧に彫られているが、6と7はこれらと比較して粗雑である。5・7の標品以外全ての標品が口縁端を丸く、厚ぼったくつくっている。蓮弁の先端は6の1点のみやや丸くおさめ、他は尖っている。6はM-38第



I層、7はN-38第II層、8はK-35第III層、9はB-23第II層。10はB-30第III層から出土した。

④ 篋削蓮弁文碗

第9図-11の1点出土した。胴部外面に蓮弁文を篋で彫り、その上に圈線を太く描いている。口縁は直口し口縁端を丸くおさめている。釉色は濃い緑色を呈してガラス質の釉である。器内外面に貫入が多い。M-40第II層から出土した。

⑤ 無文碗

無文の碗は総数123片出土した。この無文碗を分類すると(イ)口唇部を小さく肥厚させる玉縁タイプのもの、(ロ)口縁部を外反させる外反タイプのもの、(ハ)直口タイプのものに分類される。

(イ) 口唇部を小さく肥厚させる玉縁タイプ

このタイプに分類される標品は3片出土した。全て細片化し口縁部のみとなっている。その特徴は口縁部を僅かに外反させ、口唇部を丸く肥厚させ玉縁状につくる。胴部についていえば、腰部を大きく、豊かに張り、内彎形をつくるものである。このタイプは佐敷グスクのSTO2の遺構から出土し、「口縁部を玉縁状につくる外反タイプの無文碗」として分類されたものに類似するものである。第10図1は、このイ類最大の破片である。口径の推定は18cm、色調は灰緑色を呈している。拝所に伴う石列遺構から出土した。第10図-3は口径の推定は17.4cmを計り、色調は暗灰緑色を呈している。1と同じ遺構から出土した。

(ロ) 口縁部が外反する外反タイプ

総数83片出土し、無文碗の中では最も多かった。ここに分類したものは口縁部が外反するものであるが、口唇部のつくりから2類に細分出来る。7は口唇部を尖らすもので、この類のものは薄手であり、丁寧につくられている。釉調は青灰色で透明釉がある。ガラス質の釉がかけられている。第10図-5は灰緑色を呈するもので、口縁部はゆるく外反する。器は0.2cmの均一化している。胴部外面にはロクロ痕がかすかに残っている。H-38第II層から出土した。第10図-2は口唇部を丸くおさめる標品である。外反の度合いは5より弱い。胴部の器肉は0.6cmを計り厚手。釉は

オリーブグリーンを呈し透明度が低い。胎土は灰白色で緻密。

第10図-4は外反タイプの無文小碗である。口縁部から底部まで接合でき復原可能な標品である。推定口径8.8cm、高さ3.7cmを計る。胴部外面の中位に一条の沈線が周っている。釉は内外面とも施釉されているが、高台部畳付はふき取られていて露胎となり、茶褐色を呈している。釉の発色は青味を帯びた緑色で、胎土は灰白色で緻密。B-30グリッド第Ⅲ層から出土している。

(イ) 直口タイプ

この類に分類したものは細片化した破片総数34片出土した。口縁部の形状が直口するものである。このタイプのものは主として胴部から口縁部にかけて僅かに内彎する。口唇が尖るものと丸くおさまるものの二種ある。

以下無文碗で復原実測のできた個体について観察表を掲げておく。

挿図(図版)	出土地点	形態の特徴
第10図-6	M-36 第Ⅱ層	口縁部外反して口唇は丸くつくる。胴部やや張る。口径は12.9cm、釉灰緑色。
第10図-7	K-31 第Ⅱ層	器厚0.3~0.4cmで薄手。釉は淡灰緑色で発色が良い。口唇僅かに禿けている。大きく外反する。口径16.4cm。
第10図-8	H-36 第Ⅱ層	口縁部外反して口唇は丸くつくる。器厚0.3~0.4cmで薄手。釉灰茶色。表面はアバタ状。口径16cm。
第10図-9	D-24 第Ⅰ層	外反して口唇は丸くつくる。胴部は直線的、素地は灰白色で釉灰緑色。口径16.2cm。
第10図-10	H-34 第Ⅱ層	外反して口唇はやや尖る。胴部0.5~0.6cmと厚いが、口縁部近くで細くなり断面は剣刀状に造る。器内面に筥による片切り彫がある。貫入多し、釉は灰緑色、口径16.9cm。
第10図-11	D-33 柱穴内	口縁部直口し、口縁端は内側に僅かに丸くなる。器外面ロクロ成形痕が残る。器厚0.3cmで薄手。釉オリーブグリーン。焼成悪し。
第10図-12	I-28 第Ⅱ層	口縁部直口し、口唇細く丸い、素地灰色。釉は失透性の灰緑色。



#### ⑥ 鉢

口縁部資料が20片出土した。個体数にして17点である。いずれも細片化して底部まで窺える標品は無かった。有文と無文に大別される。

第11図-1と2は胴部外面に鎬蓮弁文を有する標品である。いずれも口縁部が水平に折れ曲がる。1は胴部外面に丁寧な鎬蓮弁文が彫られているが、釉が厚くかかり鎬がはっきりしない。釉薬はよく発色し光沢がある。草緑色を呈している。胎土は砂ぼい、H-31の第Ⅲ層出土。2は胴部外面に鎬蓮弁が片切り彫りされている。蓮弁の彫りはややシャープさに向け、蓮弁と蓮弁の間隔は離れている。灰緑色を呈し、釉薬はにごりがある。胎土は砂ぼい。O-37グリッドより出土した。

第10図-3・4・5も小形の鉢である。いずれも口縁部が水平に折り曲がる標品であるが、折り曲がった部分は浅い凹状をつくる。3は灰緑色を呈しているが釉薬は薄くかけられている。胎土はセメント質で砂ぼい。O-39グリッドから出土した4は釉調は灰青色を呈しガラス質の釉である。発色がよく光沢を呈している。内外面とも貫入が多い。胎土は灰色で砂ぼい。I-32第Ⅲ層出土。5は暗緑色を呈し透明度が低く全体に貫入が多い。胎土は灰白色でセメント質である。胴部から口縁部に至るところは内彎度が強い。第4土壌から出土。

第11図-6は、口縁部が強く外反する標品で、口唇部を丸くつくっている。釉は厚くかけられ、折り曲がる場所では釉厚が0.2cmを計る。胎土は灰白色を呈しやや緻密。釉色は濃い緑色に発色し光沢がある。胴部から底部にいくにつれ器肉が厚くなる。O-38グリッド第Ⅲ層から出土した。

#### ⑦ 皿

青磁皿は総破片数19、個体数にして13点の出土をみた。全て細片化し、底部までわかる資料は1点も出土していない。口縁部の形態により二種に分類出来る。①は口縁部が外反する標品で外反タイプとして分類する。この外反タイプの皿類はさらに外反度の強弱により2種に細分可能である。②は胴部から口縁部に至るところが内彎し、口縁部がわずかに内傾する標品である内彎タイプとして分類する。

① 無文外反タイプの皿

第11図—8・9・11はいずれも2～3cm大の細片化した口縁部破片であるが、外反度が非常に強い標品である。この三つの標品は胴部下半でわずかに内彎し、胴部上半近くで外へ急にそね口縁部を形成する。口唇部は丸くおさめている。いずれも遺物包含層から出土した。

第11図—11は胴部で内彎し、口縁部がわずかに外反する皿である。釉の発色は前記三つの資料と比べはるかに良く、つくりも丁寧である。釉色は水青色で透明度が高くガラス質である。胎土は灰白色を呈している。器外面の胴部近くに轆轤成形痕がわずかに残る。口縁端が丸く膨らみをもち小玉縁状となっている。H—33第Ⅲ層出土。

第11図—7は胴部で内彎し、口縁部がわずかに外反する皿であるが、11と比べ胴部から口縁部に至るところで次第に器肉が薄くなる。口縁端は丸く細くおさめている。釉は草緑色を呈し失透性、貫入が多い。M—40第Ⅲ層から出土。

② 無文内彎タイプの皿

個体数7点得られているが全て細片化し、実測可能なものは第11図—12・13・14・15の4点のみである。第11図—12は推定口径15.2cmの底の浅い皿である。薄く仕上げてある。胴部で内彎し、口縁部はやや外傾する。二次的な火を受け釉薬が溶け白く変色している。K—33第Ⅲ層から出土。同図—13は、釉はオリーブグリーンを呈し、透明度が高くガラス質である。胴部で内彎して丸味をもち、口縁部を直に引き出す皿である。器外面に轆轤成形痕がわずかに残っている。深さについては皿の全標品中で最も深い。口径推定10.2cmを計る。器種は小さい杯として分類してもよさそうである。

同図—14は第4土層から出土した皿で丁寧に仕上げられている。釉は青緑色を呈し、透明度が高い。器外面には数条のすじが入っている。

同図—15は、推定口径10.6cm、胴部下半は露胎となっている。口縁端は丸くおさめ、器外面には轆轤痕が残っている。釉は灰緑色で貫入が多い。胎土は灰白色を呈し砂ばい。H—39第Ⅱ層から出土した。

⑧ 青磁盤

口縁部、底部資料を含め総破片数8、その内訳は口縁部片が5、底部破片3である。個体数にして6点の出土である。第12図-1は口縁部を水平方向に折り曲げ、更にその先端を折り曲げる標品である。体部内面には凹による蓮弁文様が描かれている。胎土は白灰色を呈し緻密である。釉は草緑色を呈して透明度高くガラス質となっている。推定口径は30.4cm。器内外面とも貫入多い。拝所に伴う石列遺構から出土した。2は、細片化した破片のため形状は窮えないが、残存部分より推量すると口縁部の周縁を葵花状につくる盤であろう。釉は暗緑色を呈し器内外面とも貫入が多い。4は口縁部での水平方向への立上りの変化が見られない盤の小破片である。体部内面には尖端の丸い蓮弁文を浅く不明瞭に描いている。釉は淡黄褐色を呈し不透明。H-39グリッドから出土。

第12図-3・10・11は青磁盤の底部である。28は体部内面に線彫りによる蓮弁文様を有するものである。底径13.2cmを計る。釉は淡緑色を呈し不透明で貫入が多い。外底の釉を環状にカキ取り焼台受け部分を露胎にしている。胎土は灰白色を呈し、気泡が多い。O-39グリッド第Ⅲ層から出土。10も3同様外底の釉を環状にカキ取り焼台受け部分を露胎としたもので釉は淡緑色を呈している。同一個体のように見受けられるが出土グリッドが離れ過ぎている。J-34第Ⅲ層から出土。11は底径9cmの青磁盤である。釉は暗緑色を呈し厚く施釉されている。底部の肉厚が厚く大形の盤底部である底部の施釉方法は内底中央に釉を施さない。胎土は赤く発色している。P-37グリッド第Ⅱ層から出土した。

⑨ 香炉（第12図-7・8）

青磁香炉の小破片が3点出土した。口縁部2、底部1であり3片とも同一個体の可能性が高い。3点とも釉は淡緑色を呈し透明度高くガラス質である。貫入が多い。口縁端は平口縁となっている。足が1個残存しているが、三足の香炉と思われる。底部内面は施釉されてなく露胎である。口縁2個は拝所に伴う石列遺構から出土し、底部はこの遺構に近いG-37グリッドから出土している。



⑩ 合子

合子の身2、蓋1が出土している。合子の身2点についてはD-30グリッドから検出されているピット内から出土した。同一個体であり青白磁である。第12図-5は釉は淡青白色を呈し、蓋受けの外側には釉がかかっていない。体部内面には小さい蓮弁があり、体部中位に段を有している。標品が細片化しているため口径、器高等については知ることが出来ない。

第12図-6は平型合子の青磁蓋である。釉は淡緑色を呈し天井部は無文となっている。施釉の方法は外側のみ施釉され、内側は露胎のままで赤く発色している。M-39グリッドの遺物包含層から出土。

⑪ 水注

頸部の上方を欠損する水注が1点出土した。胴部から頸部に把手が付いていたと思われるが、破損してしまっている。胴部に蓮弁文様を有し、胴部と頸部の境界に2条の沈線がめぐっている。蓮弁は複弁であり、全部で9弁有している。胴部の最大径は上方にある。器外面は高台部畳付から内側は無釉であるが、その他は施釉されている。器内面は施釉されていない。轆轤痕をはっきり残している。釉は暗緑色を呈し薄くかけられている。胎土は灰色で気泡が多い。D-22グリッドの露頭岩と露頭岩の合い間で出土した。

⑫ 青磁底部資料

青磁高台部の破片が47点出土した。いずれも細片化したものであり、高台部から胴部上半部にかけて残在する標品は皆無であった。高台の形状や施釉の方法によって次の6類に分けられる。

I類：高台が断面四角形を呈し、畳付の幅が広い。高台の内部を深く削っていないために高台が低く、また底部の厚さが厚くなる。高台部畳付およびその内部は露胎である。このI類は全部で10点得られている。そのうちの2点については実測図を掲載してある。第13図-1は劃花文碗の底部である。釉はオリーブグリーンを呈している。小さい貫入が器内外面に多く入っている。2は篋削の鎬蓮弁文の底部である。釉は青縁色を呈し、透明度が高くガラス質である。内面見込みに篋削りの文字が確認されるが不鮮明で読めない。

II類：高台は断面四角形を呈しているが畳付の幅がI類に比して狭い。高台

の内部を深く削るため高台が高くまた底部の厚さが、体部下半のそれと同程度になる。高台部畳付およびその内部は露胎である。全部で13点出土した。そのうち7点について実測図を図示した。

第13図 3・4・5・6 は器外面に篋削鎬蓮弁文を有する標品である。いずれも青緑色を呈し、釉はガラス質である。6の標品は胴部外面に篋による鎬蓮弁文を描き内面見込みに双魚文を貼付する。皿の可能性が高い。4点とも遺物包含層からの出土である。

Ⅲ類：高台は断面四角形に近いが、角が薄く削られているために、高台先端が丸みをもっているようにみえる。釉は高台内面中心部付近を残して全面に施釉される、9点得られている。第13図— 9・10の2点を図示した。10は底径約7.7cmを計る大振りの碗である。釉はオリーブグリーンで不透明。胎土に鉄分を多く含むため露胎部は茶赤色を呈している。9は釉が暗緑色を呈しガラス質である。内面に一本の圏線を描き、その中に印花が施されている。10は拝所に伴う石列遺構内、9はP—36第Ⅱ層から出土した。

Ⅳ類：高台の先端部が丸みをもつものや竹節高台をもつものであり、釉は中央部分を露胎にして、外底の畳付からその内側はすべて釉が施されていない。中には内面の釉を環状にカキ取り焼台受け部分を露胎にしたものもある。このⅣ類は佐敷グスクのST 02遺構から一括して出土した大振りの無文碗タイプの高台と考えられるものである。7点出土した。そのうち2点を図示した。第13図— 7と8がその標品である。

Ⅴ類：Ⅰ類からⅣ類の中に該当しないものをここに含めた。5点出土した。標品が細片化して実測不可能であり、図示出来なかった。

Ⅵ類：底部が碁笥底の標品が3点出土している。実測可能なもの1点を図示した。第13図—12はM—40グリッド第Ⅲ層から出土したもので、釉は青灰色を呈し透明度高くガラス質である。胎土は緻密で灰白色を呈している。胴部下半に一本の沈線がめぐっている。

## (2) 白磁

白磁は総数42点出土した。器種・量共に少なかった。器形をみると口禿皿



が主で、18体以上存在する。この他、玉縁白磁碗（注1）、無文碗等が出土している。

① 口禿皿（第14図1～11）

総数18点出土しているがその内訳は口縁部破片14点、底部破片4点となっている。いずれも2cm大の細片化したものである。18点のうち実測可能なものを第14図に図示した。口縁部破片は口縁部のつくりと胴部の立ち上がりおよび釉により次の5類に分けられる。

I類：口縁端が四角になり、口唇部と内面のみ口禿となっている。底部から胴部にかけて内彎し、口縁部でわずかに外反する。釉は青白色を呈している。

II類：口縁端が台形状になり、口唇部・内面・外面ともに口禿となっているが、口禿部分の幅は狭い。底部から口縁部にかけて内彎する。釉は青灰色を呈している。

III類：口縁端が台形状になる。胴部から口縁部にかけて外反する。釉は青灰色、灰白色がある。

IV類：口縁端はやや丸くなる。口縁部が少し外反し、口縁部外面に小さい段を有す。釉は灰白色。

V類：口縁端はやや尖る。底部から胴部にかけて直進し、口縁部は外反する。内面の口禿は幅が広い。外面は口禿となっていない。釉は薄い水色を呈している。

底部資料は4点出土したが、すべて細片化したものであり復原実測可能なもの第14図—11の一点のみであった。10は底部から胴部の立ち上がりかわずかに残るものである。底は薄く仕上げられており、やや上げ底になる。見込みに円圈がみられる。釉は灰白色を呈している。N—38第II層から出土した。

② 玉縁白磁碗（第14図3～8）

口縁部を外側に折り返し、いわゆる玉縁肥厚の口縁を造るものである。口縁部のみ的小破片が10点出土した。そのうち実測可能なものを第14図に示した。8は、肥厚部の厚さ0.9cm、幅1.7cmを測る。素地は灰白色、へき開面は粗く堅い。釉は緑色がかった白色を帯び。光沢がある。口縁部の造りは



丁寧に仕上げている。J-32 第Ⅲ層。5・4の標品も8に釉・素地とも類似する。前者がH-30 第Ⅰ層、後者はF-31 第Ⅰ層から出土した。同標品類似のものがあと2点出土しているが、小破片のため実測不可能である。

第14図-3は施釉が雑で、玉縁の裾の部分に釉垂れがみられる。8・5・4の標品に比べると口縁の造りが雑であると同時に焼成も悪く粗製の標品である。素地は茶色がかかった灰色を呈し、釉は乳白色で細かい貫入が無数に入っている。7・6も3類似の標品である。3はD-22の岩盤上、7はD-21 第Ⅱ層、6はL-33 第Ⅲ層からそれぞれ出土した。

### ③ 内彎タイプの白磁碗

口縁が内彎する白磁碗をここにまとめた。口縁部資料からの個体数は22点である。そのうち実測可能な6点を第14図に示した。この種の標品は比較的厚手の造りで、器外面に回転の遅いヘラ削りが観察できる。いずれも灰白色の釉で、素地は淡灰白色を呈す。復元口径は15～16cm前後におさまる。このタイプの白磁碗は、これまで佐敷グスク（注1）、ピロースク遺跡（注2）等から出土している。ピロースク遺跡の場合は比較的多く出土し、発掘者によってピロースクタイプとして分類命名されている（注3）。

注1 佐敷村教育委員会『佐敷グスク』1980年3月

注2 石垣市教育委員会『ピロースク遺跡発掘調査ニュース』

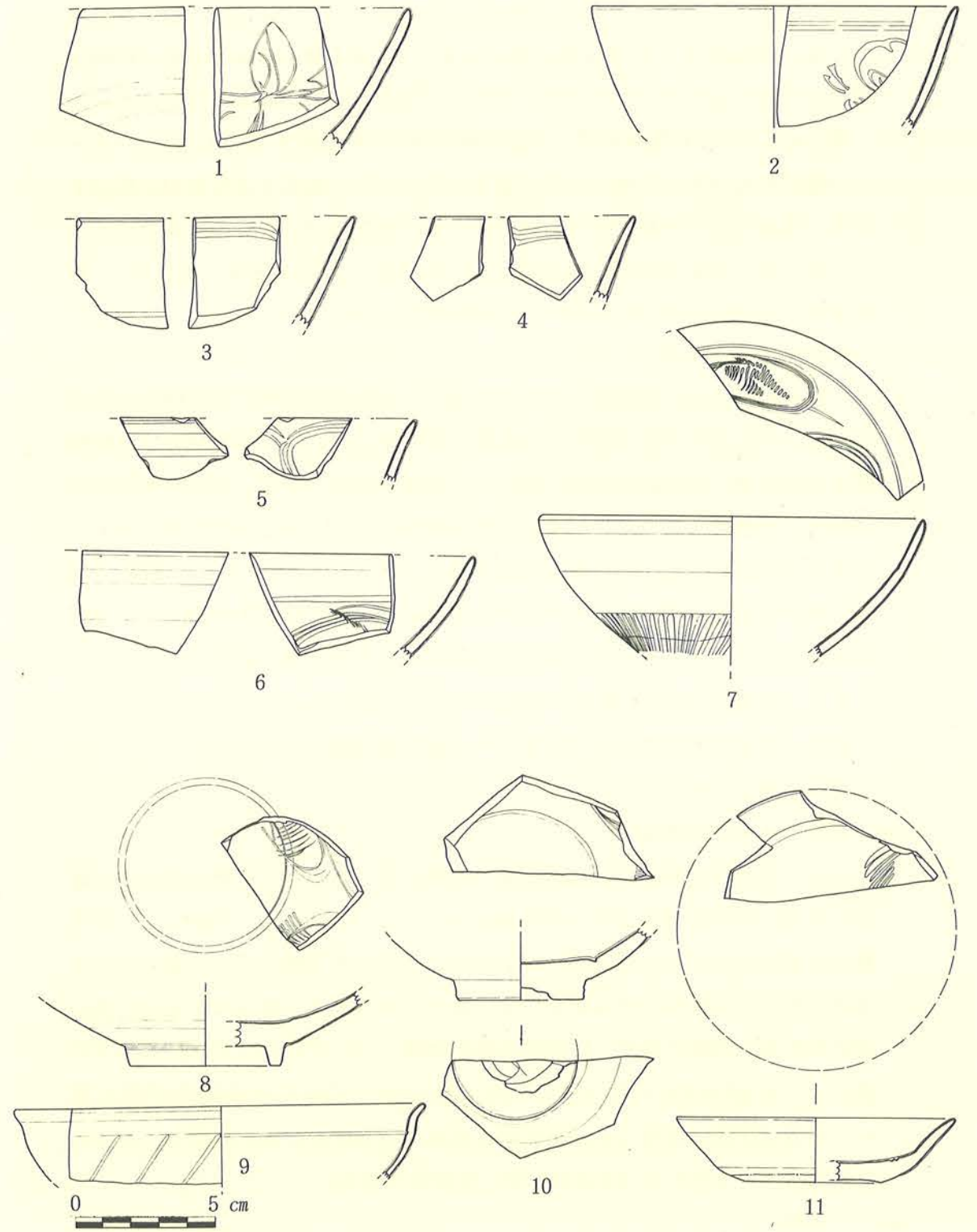
注3 注2に同じ

### ④ 外反タイプの白磁碗

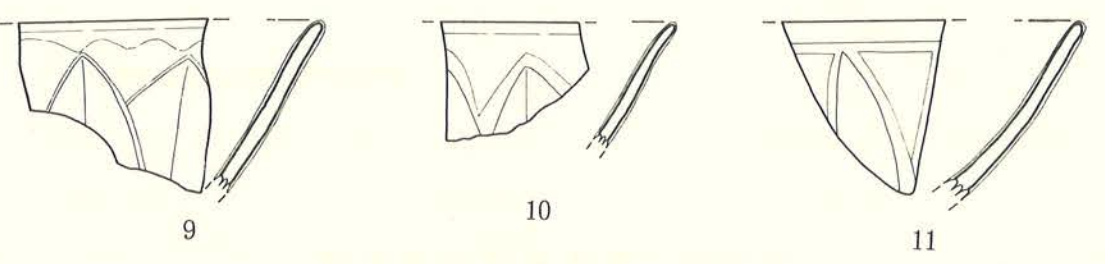
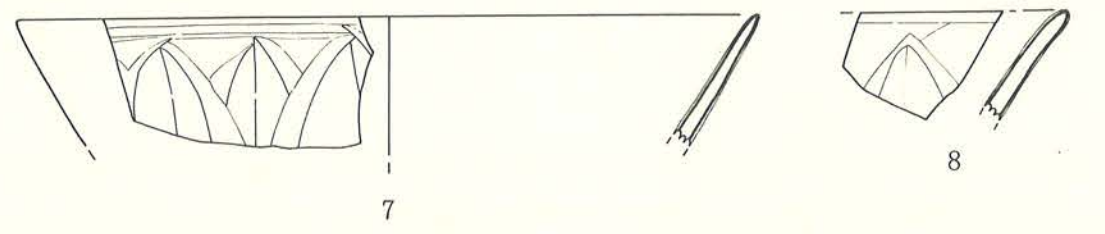
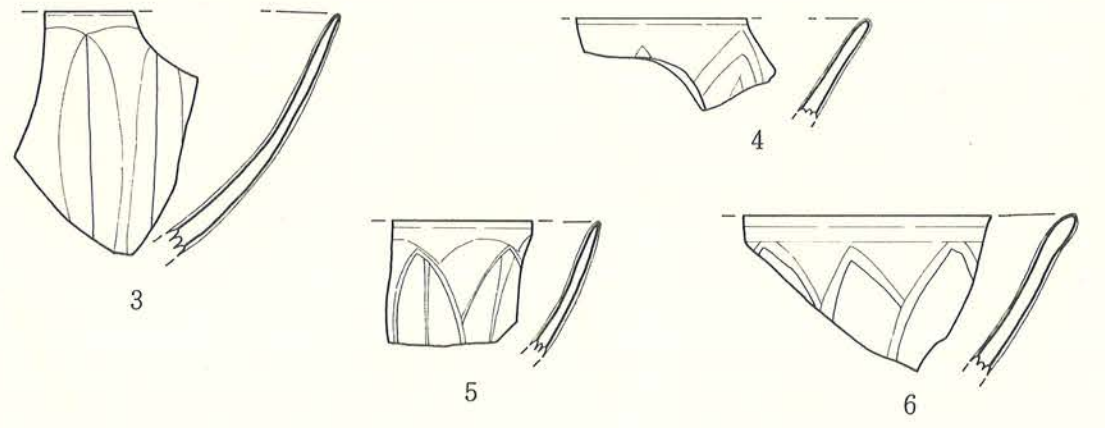
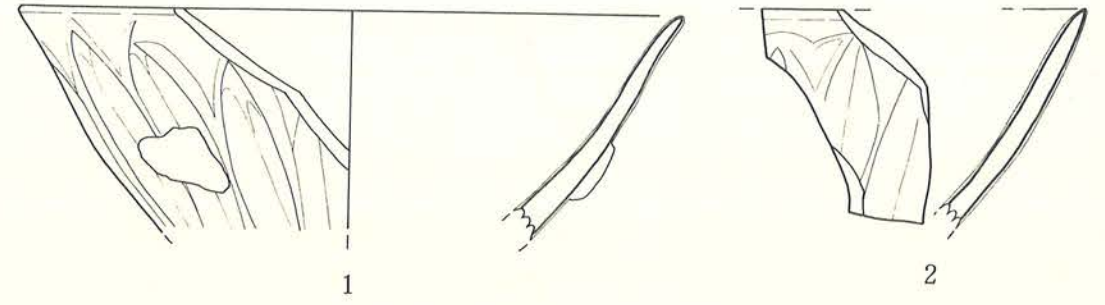
ここにまとめた標品は、体部上位で内彎して、またすぐに外反を示す白磁碗である。口縁部資料のみの個体数は11点出土している。小破片のため実測不可能な2点以外は第14図に図示した。18は氷裂状の貫入が細かく走る標品で乳白色の釉がかけられている。器外面にはロクロ挽きによる成形痕が認められる。焼成が悪く、口唇部の釉が剥離している。C-25 第Ⅰ層からの出土。9・14～16・19・24・25の標品はいずれもへき開面が粗く堅い。素地は淡灰白色を呈し、釉は青白色を帯び光沢がある。器厚0.6cmを測り比較的厚いものから0.4cmのうすいものまでである。

### ⑤ その他

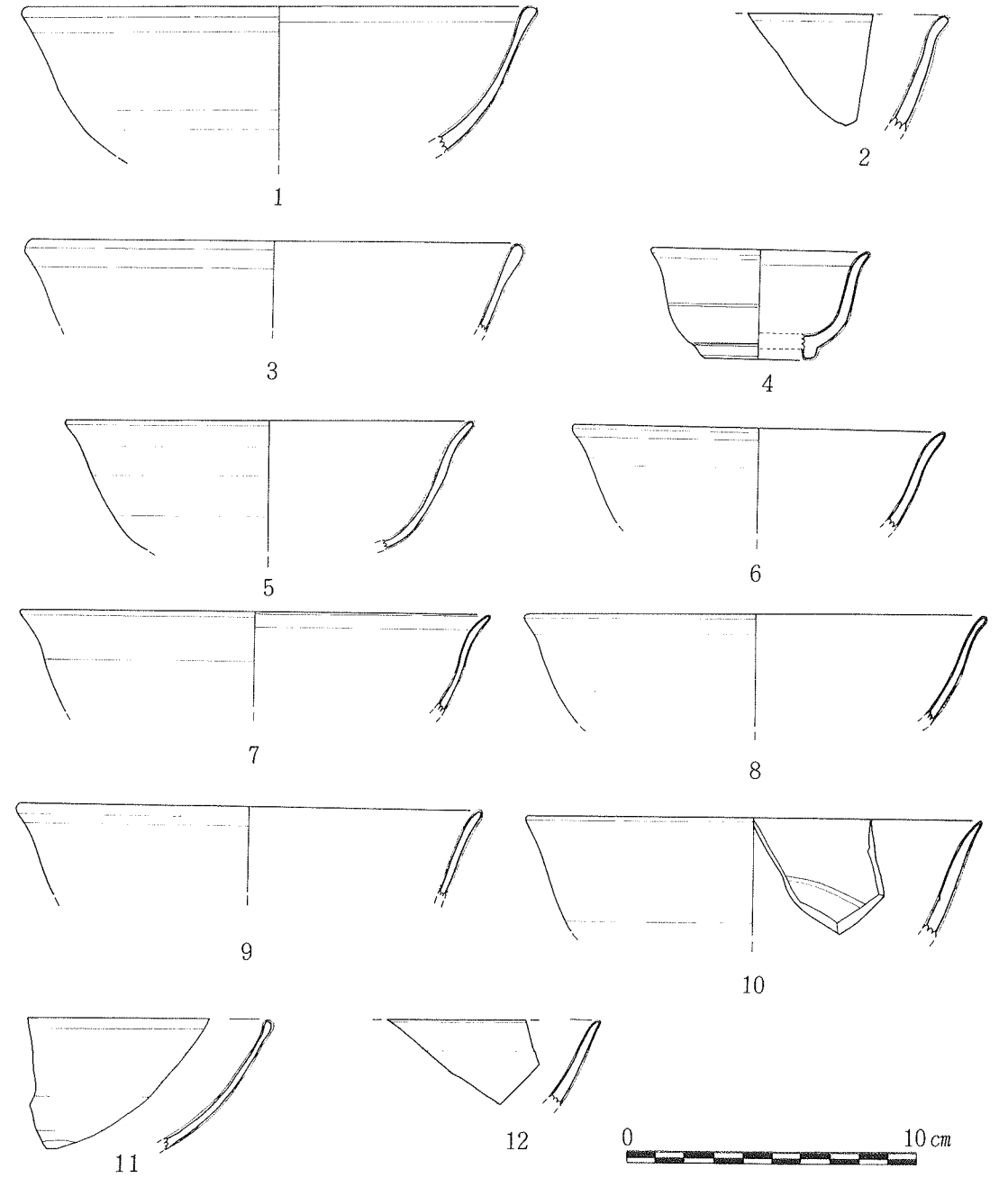
第14図21・22は体部の器肉は全体にうすく、口縁部を「く」の字状に外



第 8 图 青磁实测图

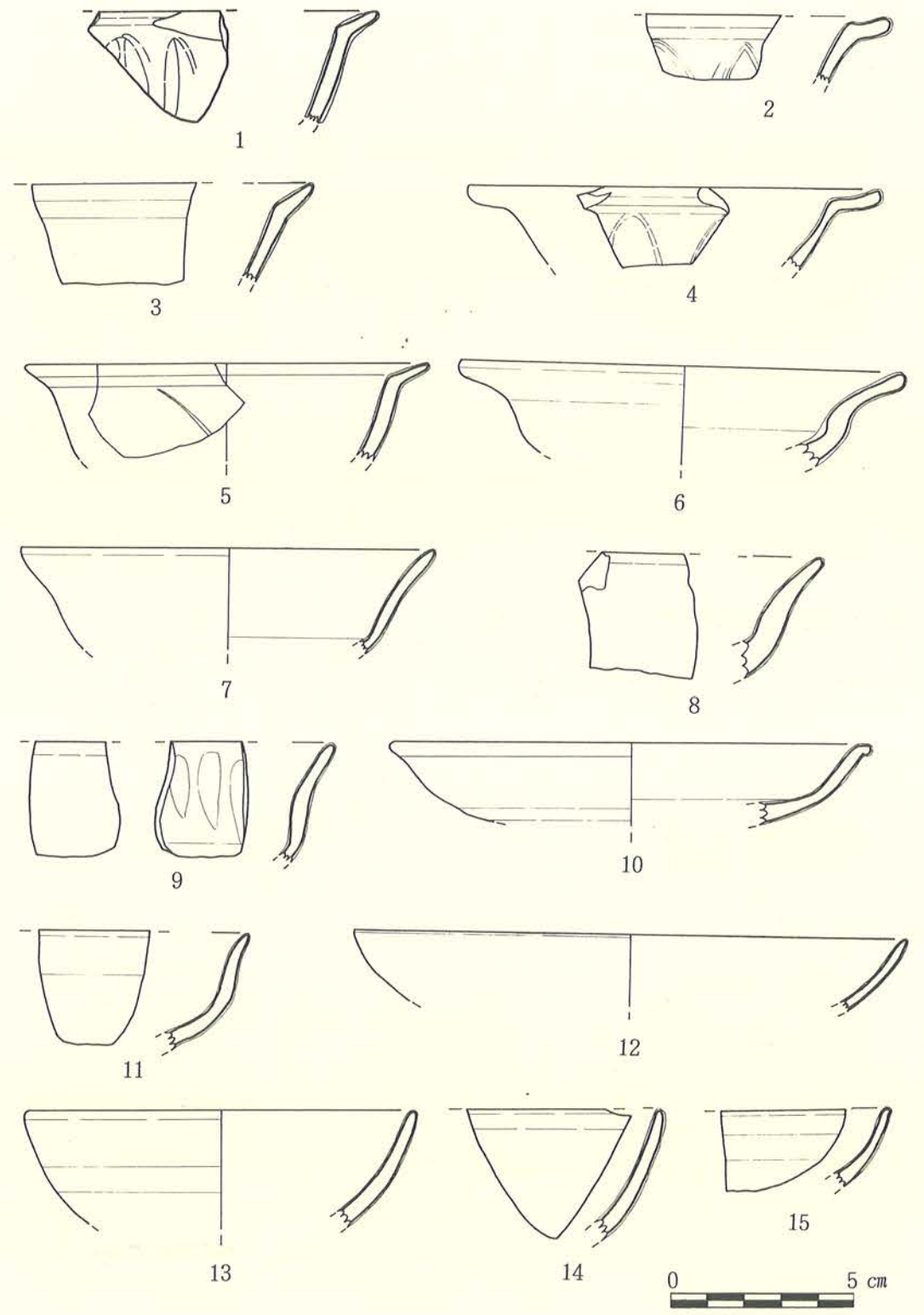


第 9 图 青磁实测图

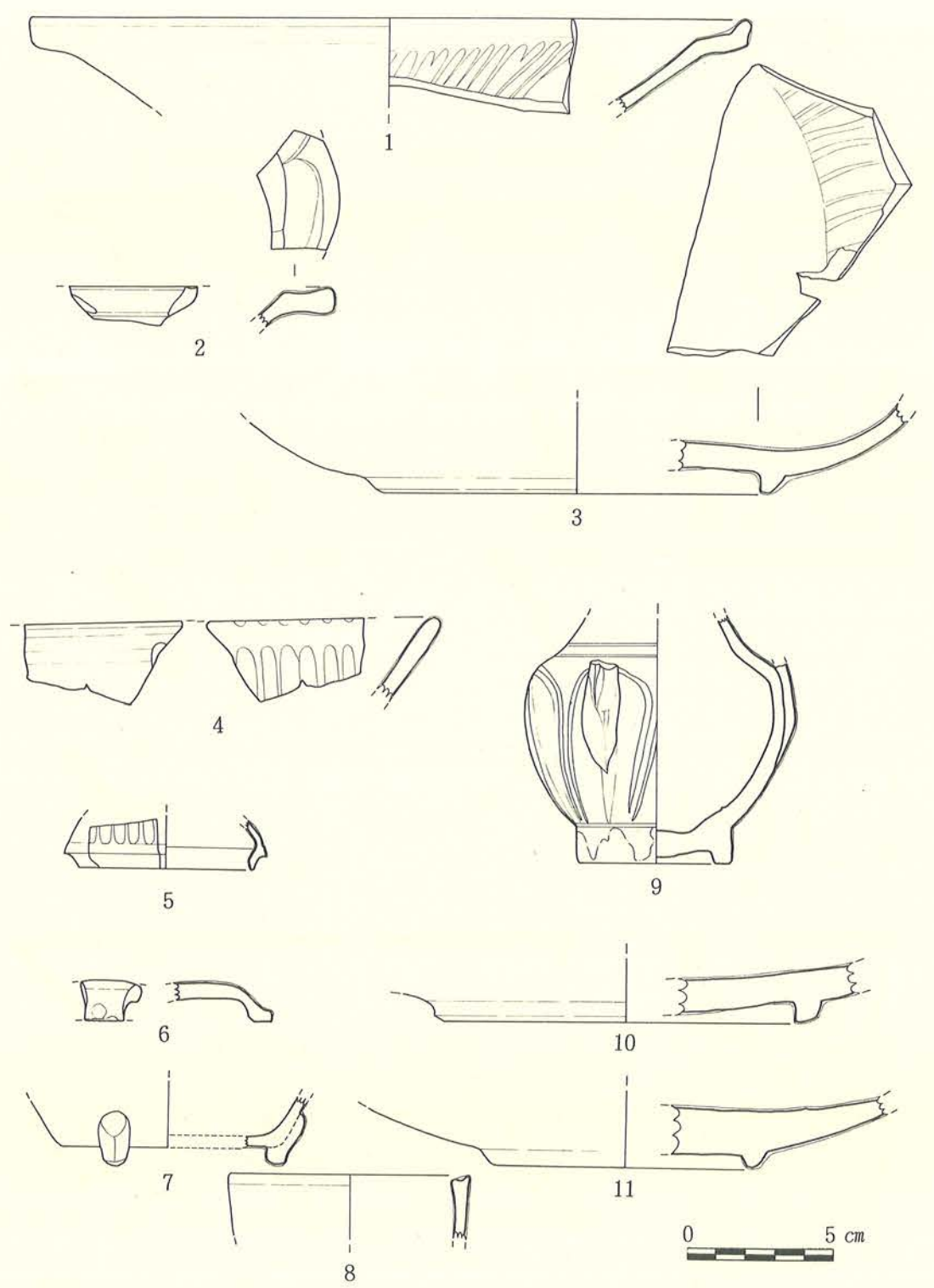


第 10 图 青磁無文碗实测图

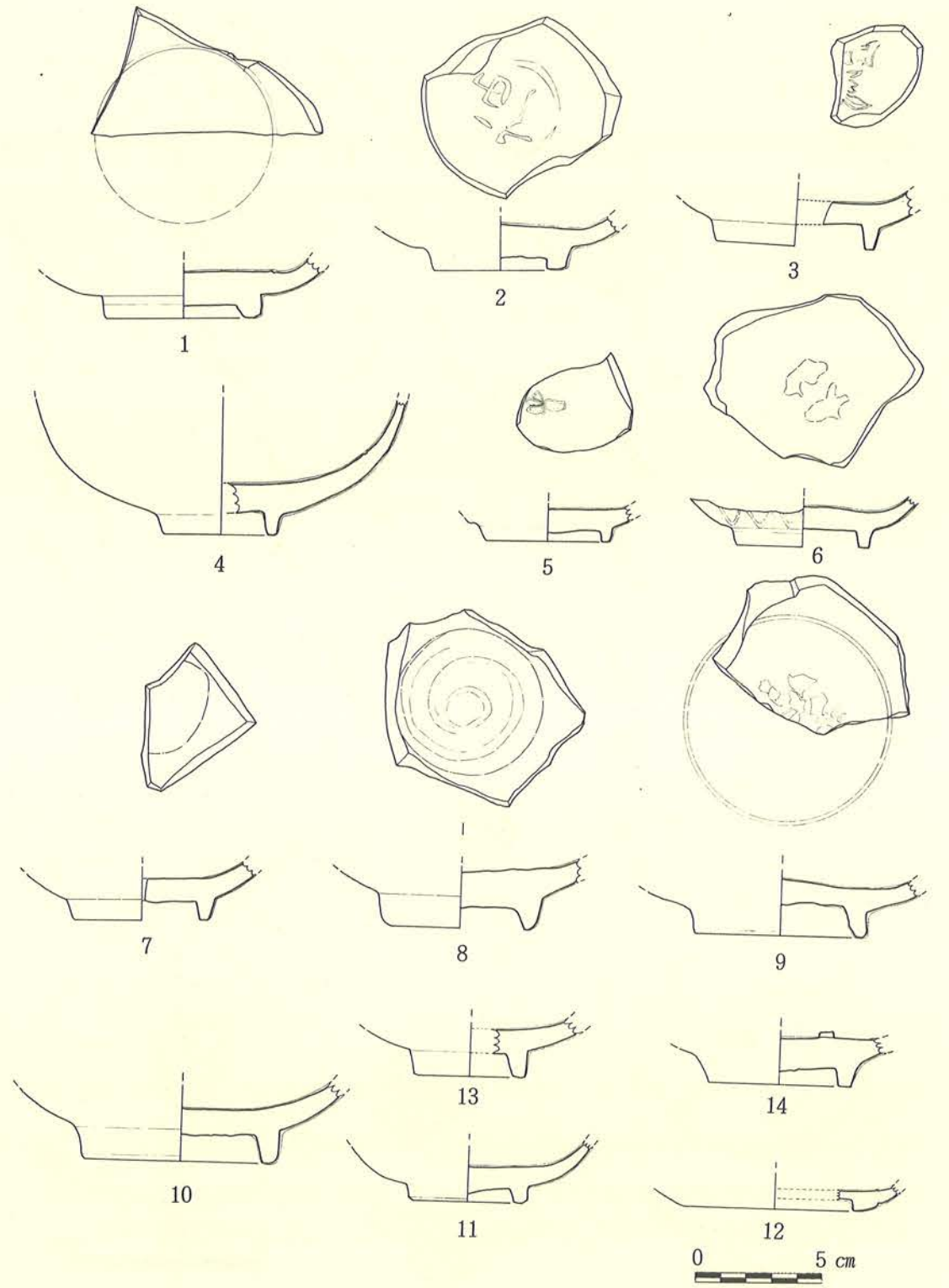




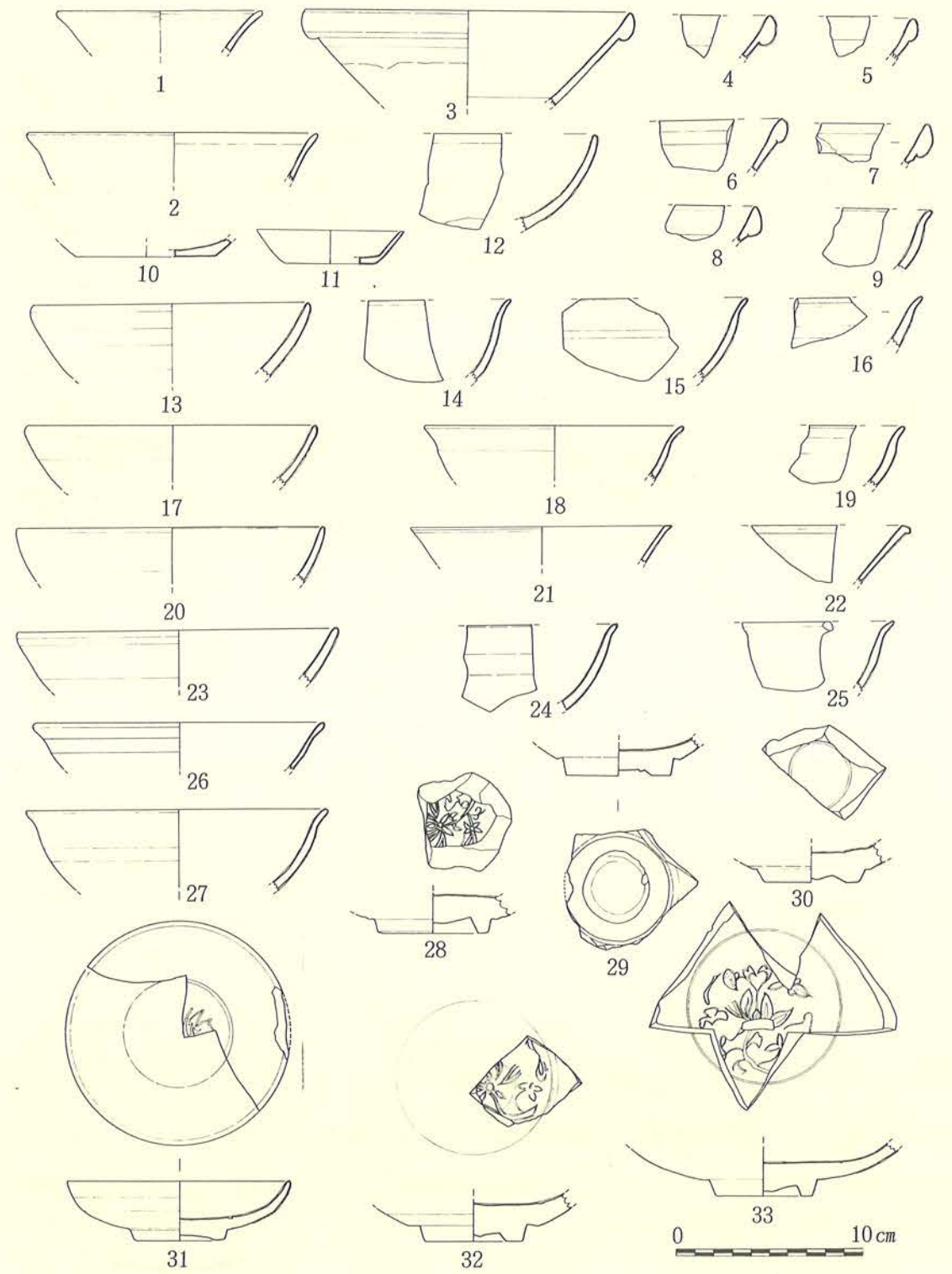
第 11 图 青磁实测



第 12 图 青磁实测图



第 13 图 青磁实测图



第 14 图 白磁实测图



反させ、端部を水平にしている。21は素地が淡灰白色の磁質であり、釉は青白色を呈している。碗のつくりは体部中位から口縁部に喇叭状に開く。K—34 第Ⅲ層から出土した。22は乳白色を呈し貫入が多い。素地は多孔質でソフトな感じを受け、淡白色である。折り曲がった口縁端部は0.5 cmを測る。器厚0.3～0.4 cmで比較的うすく斉一性に富む。H—30 第Ⅲ層出土。

#### 皿

第14図 31は白磁皿である。この標品は口縁部から底部にかけて略完存の唯一の資料である。口径11.3 cm、高さ3.2 cmを測る。器内面は全面に施釉され、見込みに印花がみられ、外側を円圈が取りまく。器外面は体部下位から高台部にかけて施釉されていない。口縁部はやや内彎ぎみで口縁端を丸くおさめている。素地は淡灰色で緻密。釉は濁色ぎみの青白色を呈する。へき開面は粗く堅い。高台は削り出しが浅いため、底部の器肉も厚くなっている。H—34 第Ⅲ層出土した。

#### 底部資料

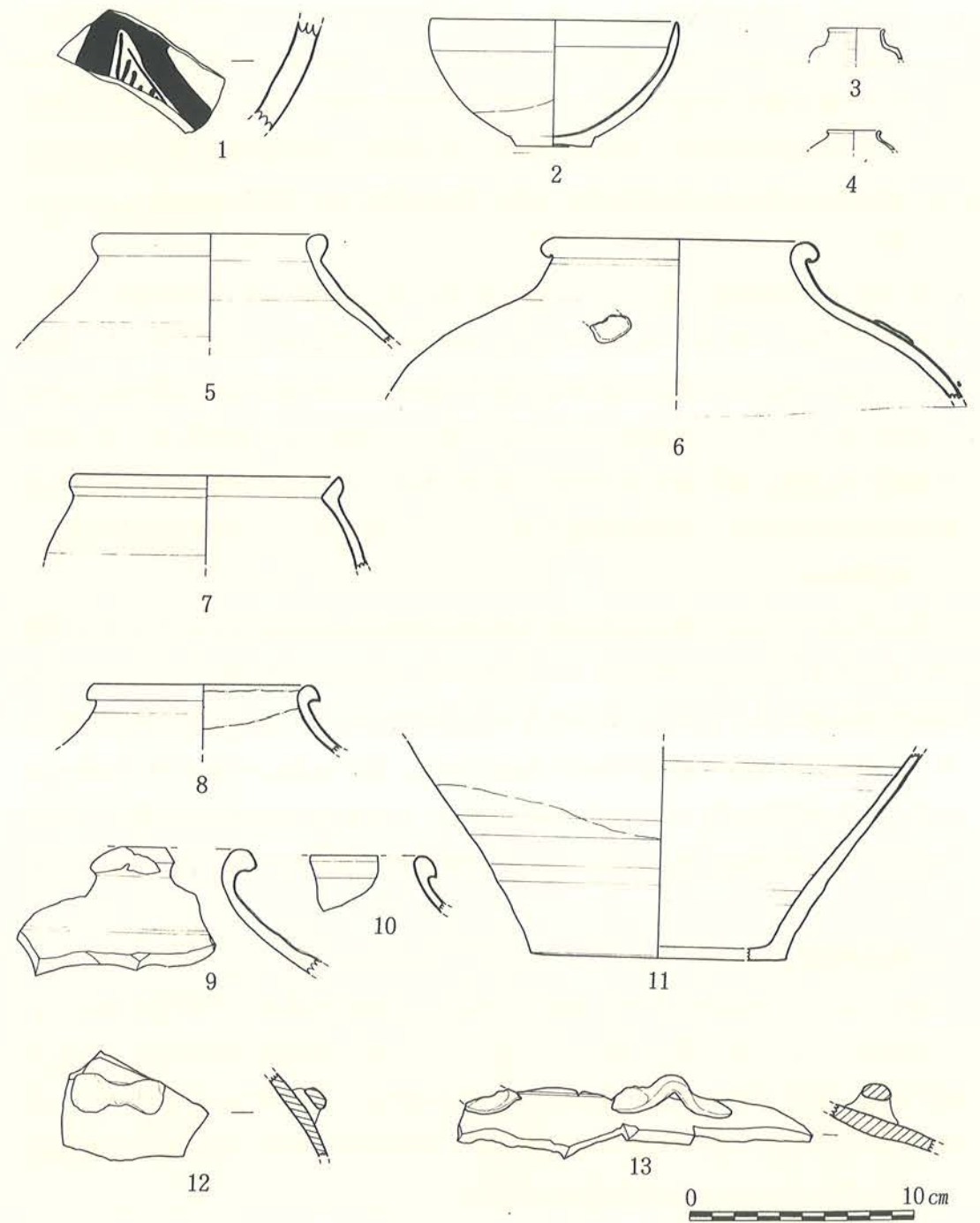
第14図 28～33は白磁の底部資料である。素地はいずれも淡灰白色を呈し堅緻である。28・31・32・33のように底部の見込みに印花が型押しされ、その外側を円圈が取りまくものと、そうでないものが見られる。釉は失透性で白濁色を呈し、体部下位から高台部にかけて無釉である。高台は概して幅広で、削出しが浅く、底部の器肉が厚くなっているのが多い。いずれも高台の造りは雑で、内部には円のずれが段状に残ったり、あるいは中央部が頭巾状になっているのが多い。

#### 黒釉陶器

数点出土しているが、すべて小破片であり、1点だけ接合して全形を知りうるものがあつた。これを第15図—2に示した。還元炎焼成にかかるものであり碗である。復元すると推定口径10.6 cm、器高5.6 cm、高台形3.6 cmとなつた。素地は暗灰色を呈し、釉は暗茶色の釉がうすくかけられている。高台は円盤状に削り出されている。M—40 第Ⅱ層から出土。

#### 鉄釉陶器

これまで「南蛮」と呼称されていた鉄釉陶器が数百点出土している。しかしそのほとんどが1～2 cm大の胴部破片で器形を推定できるものは少なかった。実測可能な標品を第15図にまとめた。いずれの標品も釉が比較的うすく掛けられてい



第15图 陶器

る。器種は小形の壺を主とし、素地は灰褐色ないしは暗灰色である。口縁部は折り返えされた玉縁状に造るのが多い。いずれも小破片のため全体的な器形の特徴はつかめない。底部資料も若干出土しているが、実測可能なものは11の1点のみである。この標品は小形壺の底部であり、素地は淡褐色を呈し、底部は無釉である。

第15図3は茶入である。暗褐色の釉がうすく掛けられている。口縁部を丸く細めにつくり、口縁部から胴部にかけてS字状に曲がる。素地は茶褐色を呈し緻密である。O-36 第Ⅲ層出土。4の標品も茶入れである。口縁部を丸くつくりなで肩となる。素地は4同様茶褐色で緻密。H-33 層第Ⅰ層出土。

#### 白地鉄絵壺（第15図1）

白地鉄絵壺の破片が1点出土している。白化粧された素地に鉄絵が器面いっばいに描かれている。鉄絵の発色は悪く、全体として雑にみえる。素地は暗灰色で粗い。器内面は成形時のヨコナデが顕著に残り、全体的に白化粧がうすく施されている。C-35 第Ⅱ層出土。吉州窯で焼かれたものであろう。

#### 中世須恵（第16・17図）

中世須恵としたのはこれまで須恵器、類須恵器等と呼称されていたものである。器種は壺、鉢、急須（第17図2）、碗（第17図-1）に分けられる。

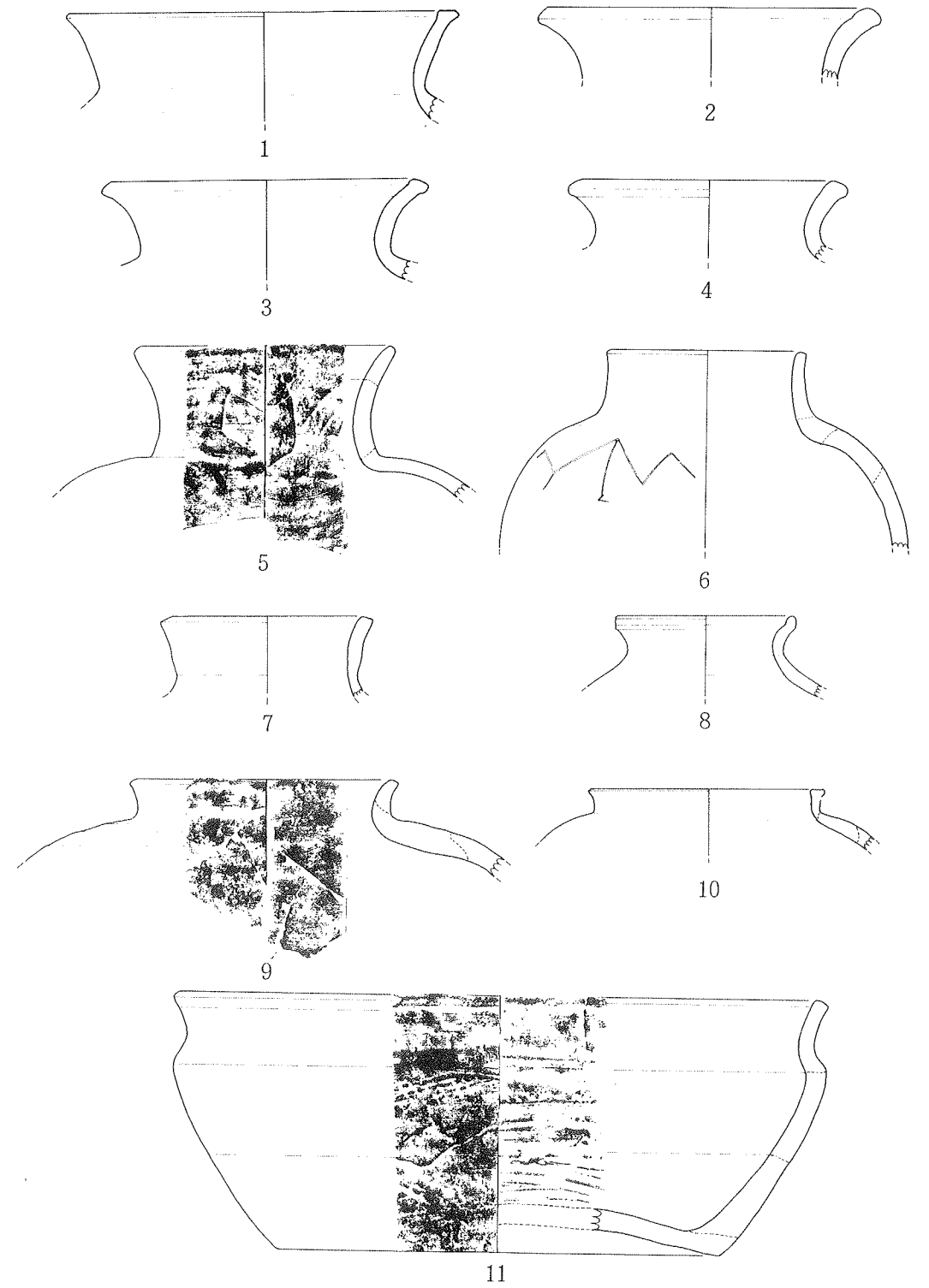
壺は頸部が短かく直進するもの、頸部が長くゆるやかに外反するものおよび「く」の字状に折れ曲がるものがある。これらの標品の中で概して大形の壺は無文であり、小形の壺は波状文が施されている。

鉢は胴部上位から急に内傾してすぐに外反を呈すもので、これまで報告されたことの無い器形の鉢となっている。第16図-11がこの標品である。法量は口径33.5 cm、高さ13.5 cm。口縁断面は方柱状につくる。胴部の器厚1.2～1.5 cmと厚く、ずんぐりしている。底部は揚底となり、円盤貼りつけである。粘土帯は3段によって仕上げられている。粘土帯のつなぎ目には明瞭なタタキ目が残存する。M-40 グリット第Ⅰ層からの出土。

底部資料の中には底部から胴部への立ち上りが角をつくるものと丸くなる標品の二種含まれている。また、底面に網代文（第17図5）を有す標品が1点認められる。

#### 土製品

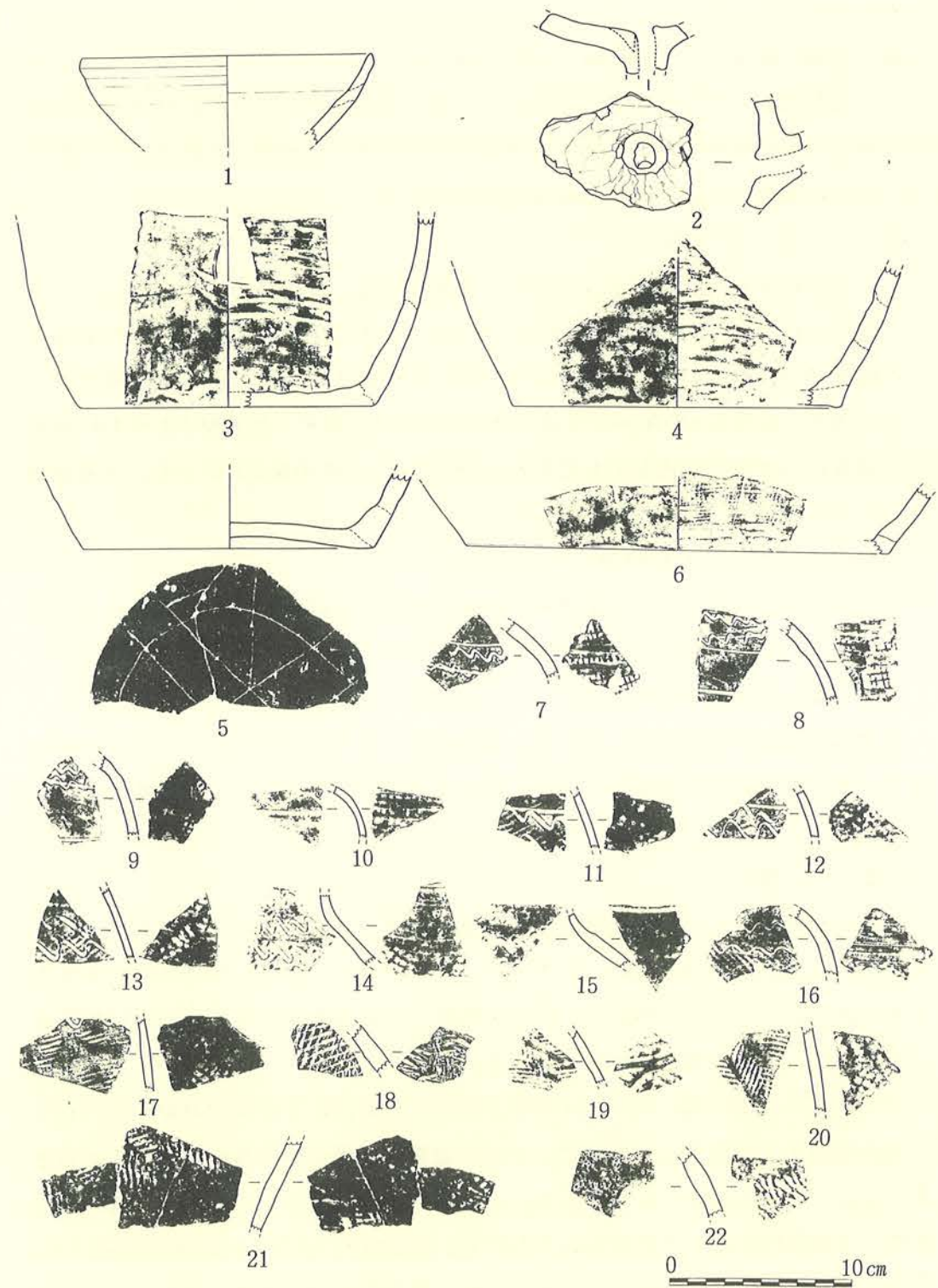
土製品には土製勾玉、土錘、円形状土製品等がある。第18図-28～38にまとめ



0 10 cm

第 16 图 須惠器





第 17 图 須惠器

たものがそれである。

① 土製の勾玉（第 18 図 34・35・36）

数個出土しているがすべて頭部、背部、尾部とバラバラに割れた状態で出土し、完形品は 1 個も無い。頭部破片で見る限り、頭頂近くに孔が穿たれている。素材は土器と同じものを使用している。

② 土 錘（第 18 図 37・38）

2 点出土している。38 は円筒形の土錘である。長さ 2.2 cm、径 0.8 cm、重量 3.7 g を測る。長軸方向に径 0.1 ～ 0.2 cm の孔が貫通している。泥質で固く焼き締められている。37 は平面形態が長楕円形状を呈している。長軸に沿って周囲に幅 0.1 cm の紐かけ用溝がめぐる。重量 5.5 g、最大厚 1.3 ～ 1.4 cm を測る。胎土は灰白色を呈している。前者は G-31 の No. 61 ピット、後者は M-39 第Ⅲ層から出土。

③ 円形状土製品（第 18 図 28～32）

5 点出土している。いずれも土器の破片を丸く調整して円形にしたもので径は 1.5 cm ～ 1.9 cm を測る。用途については不明だが遊具とするむきもある。

骨 製 品（第 18 図 39）

有茎の骨製鏃が 1 点出土している。先端部を大きく欠失している。茎の断面は円で、身の断面は菱形を呈している。現存長 3.0 cm を測る。P-28 第Ⅲから出土した。

玉 類

本遺跡から出土した玉類は総数 494 個を数えた。色調は淡青色、黒褐色、黄色赤茶色、黒色、濃緑色、白色、乳白色とバラエティーに富む。材質はほとんどガラスであるが中には石質や陶質、同定不明のものが含まれている。形状には丸玉平玉、小玉、臼玉、管玉、勾玉等がある。

出土状況は、C-33、C-34 の両グリッド間に露出した柱穴の中から一括して 140 個の小玉が出土したほかは、すべて遺物包含層中や土壌の埋土の中から水洗法によって検出されたものである。140 個の小玉を出土した柱穴は、柱穴群の南端、上御願拜所近くで検出されたもので、径 20 cm、深さ 30 cm の柱穴であった。小玉の出土状態については柱穴の埋土である黒褐色の中からバラバラになって検出されたものであり、掘り出す時には小玉の配置に企画性は認められなかった。



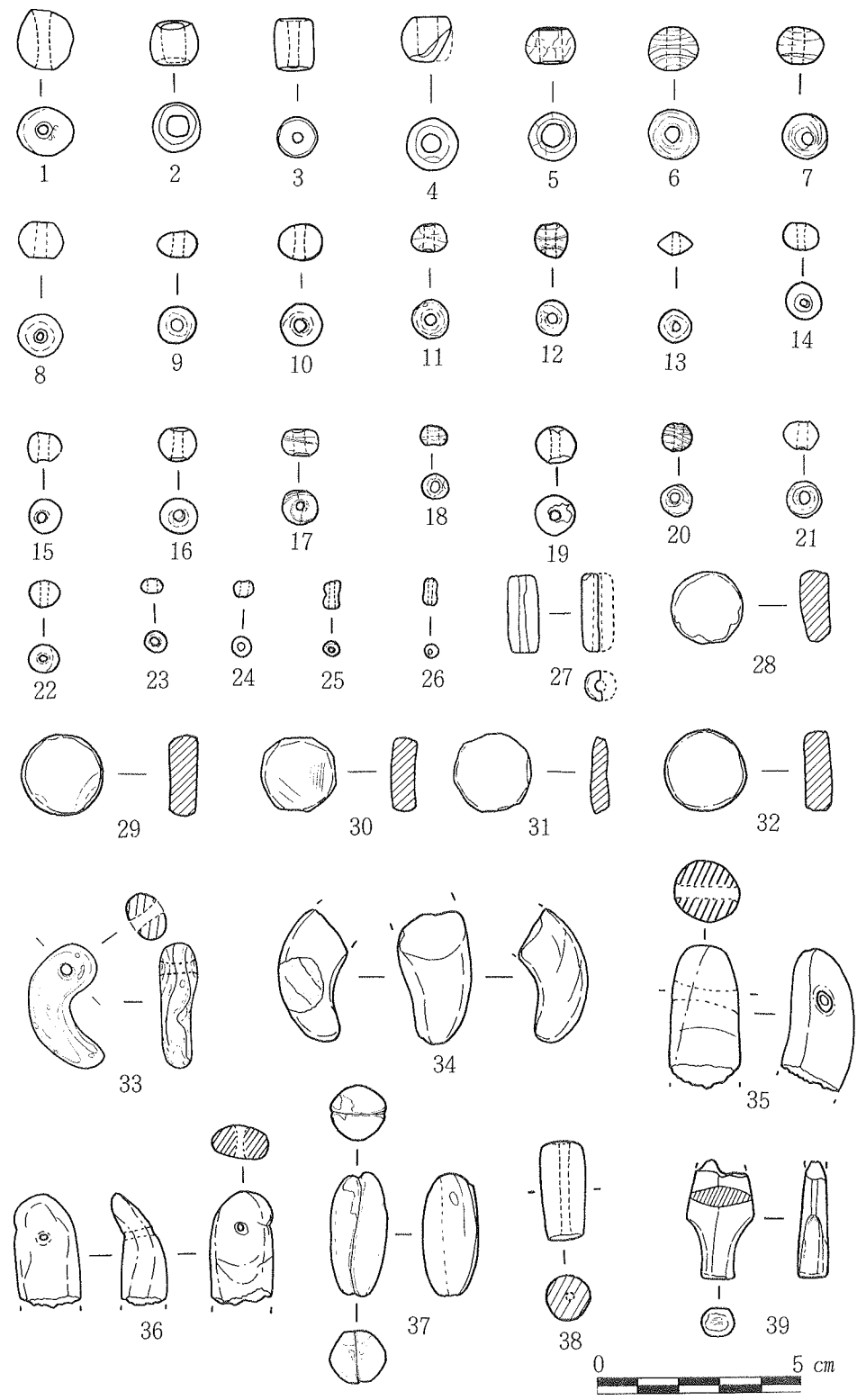
小玉の色調は乳白色を主に淡青色、濃緑色が若干みられる。形状は全て小玉で、その規格は大が径3mm、小が径1mmを測るものである。図版20は小玉の一括品を数珠つなぎにしてまとめたものである。

以下、出土した玉類のうち代表的なものの観察結果を次表に掲げておく。

(当真嗣一)

玉類観察一覧表

挿図番号	グリット	層	序	厚 cm	径 cm	孔径 cm	色 調	材 質	
第18図1	C-31	pit	内	1.50	1.37	0.30	茶褐色	土製品	棗玉
2	"	第III層		1.04	1.20	0.50	灰白色	陶質	白玉
3	K-36	pit	内	1.28	1.00	0.30	"	"	管玉
4	E-31	第III層		1.01	1.03	0.50	"	"	丸玉
5	C-31	pit	内	0.90	1.15	0.50	"	"	白玉
6	I-38	第II層		1.01	1.02	0.32	"	"	丸玉
7	N-38	第III層		0.91	1.01	0.30	白色	ガラス	"
8	H-33	第III層		0.90	1.05	0.2~0.3	濃緑色	"	"
9	M-35	第I層		0.60	0.92	0.25	銀色	"	"
10	F-30	第1号土壌		0.90	0.15	0.30	黒色	"	"
11	D-31	pit	内	0.70	0.90	0.30	黒褐色	"	"
12	K-38	第II層		0.85	0.85	0.28	乳白色	"	"
13	表採			0.57	0.80	0.18	無色透明	"	"
14	I-37	第III層		0.75	0.89	0.30	淡青色	"	"
15	F-30	第III層		0.70	0.90	0.20	白色	"	"
16	D-33	第III層		0.71	0.82	0.30	黄色	"	"
17	F-30	第1号土壌		0.76	0.90	0.30	緑白色	"	"
18	H-31	第III層		0.50	0.65	0.25	赤茶色	ガラス	"
19	E-35	第III層		0.85	1.01	0.27	黒褐色	"	"
20	H-34	"		0.68	0.72	0.2~0.8	青色	"	"
22	H-32	"		0.70	0.89	0.2~0.8	白色	"	"
21	岩盤内			0.65	0.90	0.30	青色	"	"
24	D-33	pit	内	0.33	0.51	0.20	乳白色	?	小玉
23	C-33	pit	内	0.40	0.50	0.20	茶白色	?	小玉
25	C-33	pit	内	0.65	0.35	0.15	"	?	小玉
26	C-33	pit	内	0.65	0.32	0.11	"	?	小玉
27	I-34	第III層		長さ1.81	径0.62	0.20	濃青色	?	管玉
33	K-33	第II層		長さ2.82	長さ0.74	0.14	白色	石質	勾玉



第18图 玉、土製品、骨製品実測図



## 6. 鉄製品

稲福遺跡出土の鉄製品を概観してみると、用途において大まかに二つに分けられそうである。一つは日常に使用される労働用具で他は実戦に際しての武器、武具の類である。日常の用具においても大半が消耗品的要素をもつ鉄釘と加工具としての小形製品でさらに漁具の出土となっている。武器は刺突具で飛道具としての鉄鏃である。

日常の用具や武器のいずれにおいても従来のグスクから出土してくる資料と極端な差異が認められるものはなく、ほぼ同一の技術形態の中から製作された資料とも想定される。

技術形態といっても半鉄の状態からの鉄器加工のみの鍛冶技術にとどまるものなのか、あるいは鉄鉱石や砂鉄などの素原料からの製錬技術を導入した本格的な鉄製業の分業体制が存在したものか資料の畜積が望まれるところである。

これまでに出土した鉄滓資料の化学分析からは（グスクの時期に限定して言えば）、その大半が鍛冶技術を残す分析値が得られるとしている。<sup>注</sup>

（注）大澤正巳「渡名喜島遺跡発見の鉄滓について」『渡名喜島の遺跡Ⅰ』

沖縄県渡名喜村教育委員会 昭和54年3月

### 鉄 鏃

#### ① G-28 II層出土（第19図1）

小さな錆ぶくれが出来ているが全体的に形がよく整っている。刃部は小さくバチ形に開く。刃先部は3.2 cmの長さで平板状に成形されており、柄部は棒状に仕上げられている。直径約0.6 cm。末端は小さくくびれて丸味をもつ。刃先部と柄のつなぎ目に小さな抉りが残されている。刃部は両刃である。全長7.3 cm × 刃部幅3.2 cm。

#### ② L-40 第II層出土（第19図2）

先端部が摩滅しやや丸味をなし、わずかに左右端が欠失しているが、ほぼ全形に近い状態を保っている。刃先部は板状に仕上げられており三角形をなす。刃先部の横断面からみると三枚にヒビ割れが出来ており、板状の剥離状態をもつことから鍛造品によるものと思われる。現存する長さ5.3 cm、柄部は左右からの折り曲げで鍛造成形されている。

#### ③ O-38 第II層出土（第19図3）

原形を保った保存状態の良好な製品である。ほとんど錆ぶくれない。刃先部は長さ 2.1 cm、幅 1.3 cm をなし柄部つなぎ目で棒状の差し込み部をつくる。柄部先端で小さく抉れる。刃先は両刃。全長 6.2 cm、重量 0.5 g。

④ K-33 第Ⅲ層出土 (第19図4)

原形をよく保っている。錆ぶくれもほとんどない。刃先部が板状で葉形をなし柄部へくびれ棒状に成形してある。さらに小さく一段くびれ細まる。刃部は両刃に仕上げてある。全長 8.15 cm、重量 10 g。

⑤ L-34、N-37 第Ⅲ層出土 (第19図5・6)

L-34 出土の資料は直径 0.7 cm、長さ 1.7 cm 前後の半空洞に成形され他の部分は棒状に出来ている。頭部から 4.7 cm で断面円形をなし一段くびれ 2.0 cm の長さで小さく円形をなす。一見キセルの状態に似ているが、小さな空洞から鍬のソケット部分ではないかと思われる。全体に錆化が進行しており磁鉄鉱の部分が断片的に観察される。空洞の先端部は折れた結果からか不ぞろいである。成形の跡がわからない。N-37 出土の資料もほぼ同様な形態をつくる。空洞部から縦にヒビが入っている。錆ぶくれはほとんど出来てない。長さ 6.0 cm、頭部断面直径 0.7 cm。

⑥ G-34 第Ⅱ層出土 (第19図7)

刃先部がわずかに欠損している他はほぼ良好に残っている。全体には小さな錆ぶくれが出来ており、小さな凹凸が観察される。刃先部は板状でやや長葉形をなす。全長 6.7 cm、重量 10 g。

⑦ M-35 第Ⅲ層出土 (第19図8)

全体に保存状態が良好である。刃先部に小さな刃こぼれが目立つ。三角形で板状に成形され両刃である。全長 10 cm、重量 10 g。

⑧ J-38 第Ⅱ層出土 (第19図9)

刃先部の先端が欠損しているが、全体的には形のよく残っている資料である。刃先は板状にやや楕円状に鍛造されており柄部差し込み部分は方形状に作られている。現存する長さ 5.3 cm、重量 9 g。

⑨ D-28 第Ⅲ層出土 (第19図10)

全体に形がよく整った製品である。刃部はバチ形に小さくひらく。刃先は斜めに磨滅している。刺突部の断面は楕円状をなす。

⑩ F-30 第Ⅲ層出土（第19図）

L-34、N-37の資料に類似する。頭部に約1.5cmの深さの差し込み部がある。

刀 子

① H-32 第Ⅲ層出土（第19図12）

切先と柄部が欠損している。両刃で外反りの刃部をつくっている。柄部へ一段抉りが入る。

② K-32 第Ⅱ層出土（第19図13）

刃部中央部から切先にかけて欠損している。柄の端部はやや丸味をもつ、刃部は両刃で外反りをつくる。厚み0.4cm。

③ E-29 出土の資料。先端部欠損。刃部は両刃で外反りをなすと思われる。

鉄 釘

形態の明瞭なのが17本と鉄製品の中で最も多く出土している。タイプは大きく頭部が逆L形に成形された角釘と頭部の折り曲げのない普通角釘とさらに切り釘の3種に区分される。さらにこれらは総称して家釘としてまとめられている。

稲福遺跡出土の製品は全体に保存状態が良好で錆化の進行は少ない。長さは5～6cm以下とほぼ近似した数値で製作されており、縦に板状のヒビが入っていることから、鍛造品によるものと思われる。グスク出土の鉄釘は出土する量や、長さに若干の差異は認められるがタイプとしては、ほぼ上記の種類に入るとと思われる。鉄釘の加工技術や成分の分析、鉄鉱石か砂鉄のいずれかによる原材料で製練されたものか、今後検討されるべき問題を多く残す。

ここに紹介した資料は保存状態の良好な製品を抽出して報告してある。

① K-33 第Ⅲ層出土（第20図15）

頭部が平たく折り曲げられている。身の部は方形をなす。先端部が欠失している。

② N-39 第Ⅲ層出土（第20図16）

頭部が欠損。断面方形をなす。全体の形がつかめない。

③ H-32 第Ⅲ層出土（第20図17）

全体の形がよく残った資料である。頭部を逆L形に折り曲げてある。長さ6.2cm、幅約0.4cmとさほど大きな釘ではない。頭部部分はやや楕円状の断面



をなし先端部近くではやや角形をなす。

④ D-25 第Ⅰ層出土 (第20図18)

頭部折り曲げの角釘。頭部は全体に錆がかぶっている。使用時で変形したものかやや傾斜した状態になっている。身部先端は欠失。

⑤ I-38 第Ⅲ層出土 (第20図19)

頭部は角形でよく残っている。正面観からはやや円形をなす。

⑥ C-33 第Ⅱ層出土 (第20図20)

頭部が角形をなすが、使用時に出来たものか変形している。小形の釘で先端部を欠失する。

⑦ C-36 第Ⅲ層出土 (第20図21)

赤錆が全体におおい縦に小さなヒビ割れがある。方形で頭部はフラットになる。先端に小さな錆ぶくれが目立ち変形している。

⑧ M-38 第Ⅱ層出土 (第20図22)

角釘の一種だと思われるが頭部が丸くなっており、使用時に叩打変形したものであるのか先端部が小さく細まる。小さな錆ぶくれがある。

⑨ I-33 出土 (第20図23)

先端部が鋭利にとがり、頭部が欠損している。全体に錆ぶくれが出来ている。断面は円形をなす。

⑩ K-39 第Ⅱ層出土 (第20図24)

頭部折り曲げの角釘。剥落があり先端が丸く磨滅している。

⑪ K-35 第Ⅲ層出土 (第20図25)

角釘、全体に形は整っているが小さな錆が目立つ。先端欠失。小形の成品、断面方形をなす。

鉄 斧

① 第1号礫群下 C-25 出土 (第20図26)

柄部両端の差し込み部折り曲げの袋式のものである。刃部がバチ形に開き片刃である。右端が欠失。刃部断面の厚さが0.4 cm。全長7.0 cm。小さな錆ぶくれが出来ているが全体的に保存状態は良好。小形の手斧タイプで工具としての利用が考えられる。



## 鉄 鋸

### ① O-36 出土 (第20図27)

先端カエリのついた鋸で、板状に成形し柄部は断面円形の棒状で一部欠失している。柄部でねじれの状態をつくっている。突き道具の漁具の一種とも考えられる。類似資料に我謝遺跡(西原町)出土の鋸がある。先端部より小さなカエリがつき、頭部は棒状に仕上げられている。

## ヤリガンナ

### ① K-39 第Ⅱ層出土、H-35 第Ⅱ層出土 (第20図28・29)

平面からは先端が板状で小さくバチ形に成形され、柄部が棒状になる。側面図からは小さくカーブし反っている。全長4.2cm、重量0.2g、H-35からの資料は先端が丸味をもちスプーン状に湾曲している。

## 鉄鏃タイプ

### ① M-39 第Ⅲ層出土 (第20図30)

先端部が欠失。幅1.8cmで巾広型で板状に成形されている。全長5.4cm、重量10g。

## 釣 針

### ① H-33 出土の資料である。小形で頭部が丸く、鉤の部分が鋭利である。保存状態良好 (第20図31)

## 用途不明品

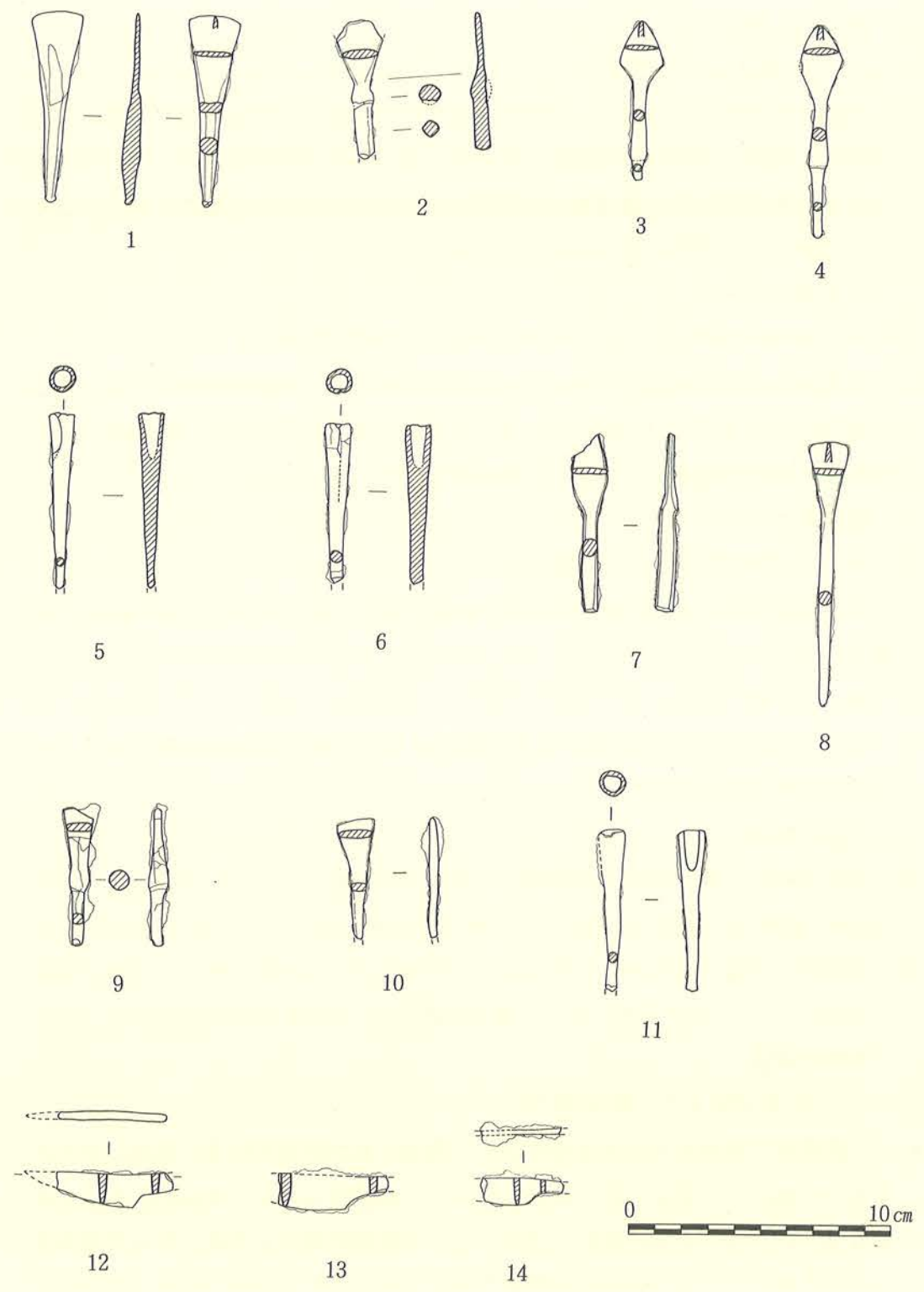
### ① 頭部が角状に折り曲げられた薄手の板状製品でC-33、No.21(d) pit、E-28 第1礫群下、No.21(A) pit、G-34 第Ⅱ層より出土している(32)。

### ② 針金状の製品であるが、いずれも部分的なもので他に細工加工した跡が確認できない。I-32 第Ⅰ層、D-27 第Ⅰ号礫下、E-29 第Ⅱ層より出土(33~35)。

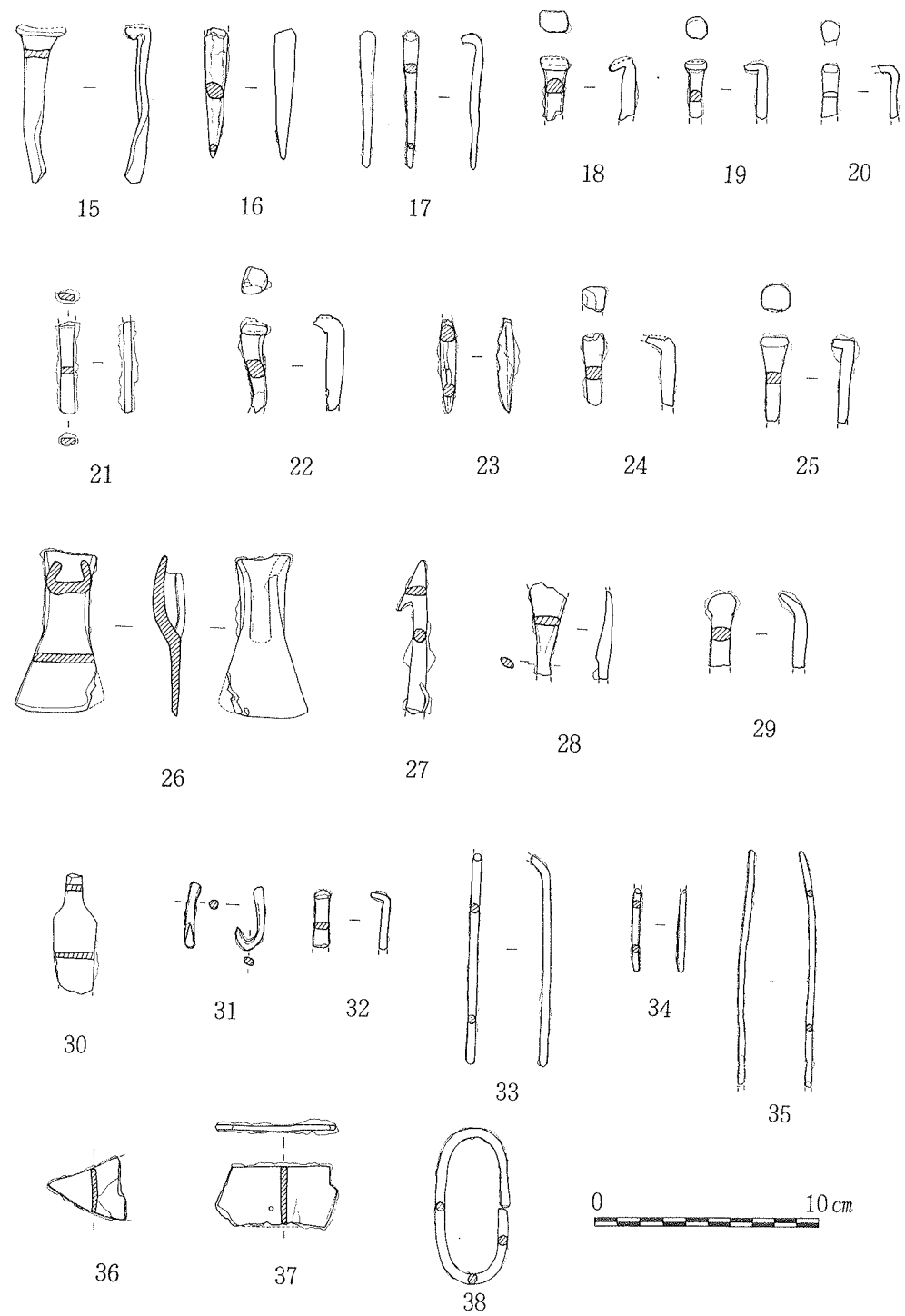
## 鉄板状製品

### ① L-35 第Ⅱ層出土 (第20図36)

三角形の板状になったもので小さな錆ぶくれが出来ている。従来、グスク遺跡から出土する板状の鉄片に類似するが、鉄鍋片なのか半製品の未加工の状態のものか不明である。板状の鉄片にはやや曲面を残すものがこれまで他のグスクから出土しており鉄鍋との関連も想定される。37は小札である。現存長5.4cm、幅2.7cmを測る。錆化が著しい。M-38 第Ⅱ層出。



第19圖 鐵製品 (1~11 鐵鎌、12~14 刀子)



第20図 鉄製品（15～25—鉄釘、26—斧、27—鋸、28～29—ヤリガンナ、  
 30～32—用途不明品、33～35—棒状製品、36～37—板状品、38—  
 鉄輪（用途不明））

#### 用途不明品（第20図38）

全体に錆が不着している。楕円状の鉄輪になっている。本品に類似するものとして佐敷グスクから出土した資料がある。

『佐敷グスク』—佐敷グスク発掘調査報告—沖縄佐敷町教育委員会

1980年3月

### 7 石製品

#### 有孔石製品（図21図1）

頭部に0.4 cm前後の小さな穿孔がある。上部がやや細まるが全体に長方形の製品である。長さ8.1 cm、厚さ0.9 cm。類似資料として糸数城跡や浦添城跡などからの出土例がある。いずれもグスクの時期に出土しているが、機能用途としては垂飾品で護符的なものとして利用されたものではないかと考えられる。

#### 砥石（第21図2・3・4）

砥石は部分的な破片のみの出土である。L-35出土の資料は磨面に1.5 cm前後の小さな溝が出来ており、小さな細加工具の研磨調整の砥石として利用されたと思われる。T-34、C-24出土の資料は研磨作業の際の使用痕としてかなり磨耗しており小さくゆるやかな凹みが全体に出来ている。石質、琉球石灰岩。

#### 磨石（第21図11・12）

N-35の資料は半分欠失している。現存部分の周縁に磨り面が残っている。現存長5.2 cm、厚さ6.4 cm。第4土壌内出土の資料は小型で全体に磨きのかかった製品である。表裏面と側縁部に研磨使用後の面取りが形成されている。現存長4.6 cm、最厚3.3 cm、石質斑粘岩

#### 石皿（第22図3）

L-36の資料全体がやや円盤状を形成する石皿である。側縁部にわずかに自然面を残し、表裏に磨面が見られる。J-33の資料は全体の1/4の残存で表と実測図の上側縁部に磨面が見られる（石質、粗粒砂岩）。C-22、21の資料も残欠で表面の片面のみに磨面がある。J-32の資料は1/2の残りで表面に磨面を残す。



敲石（第21図9）

全体にやや柱状になっており上部は欠失、下部に使用時の小さな打痕がみられる。現存長 9.4 cm、石質、輝緑岩

石斧（第21図10）

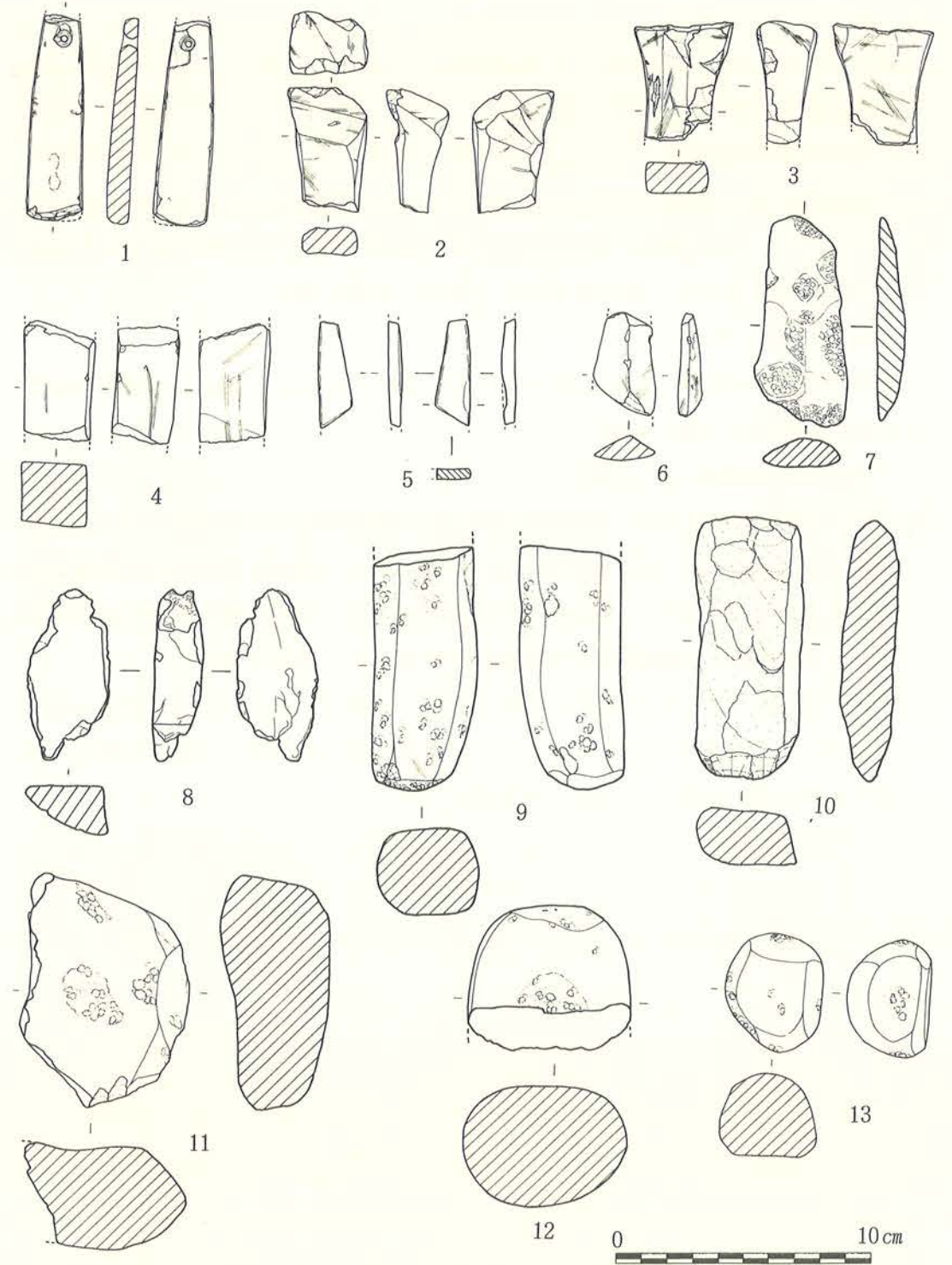
方形状の石斧で刃部が欠損している。全体に自然面を残し刃部のみの研磨となっている。（L-34資料）、現存長 10.2 cm、幅 4.0 cm、第4土壌の資料は石器片を石斧への再利用という形がとられたものか。石質、砂岩

凹石（第21図12）

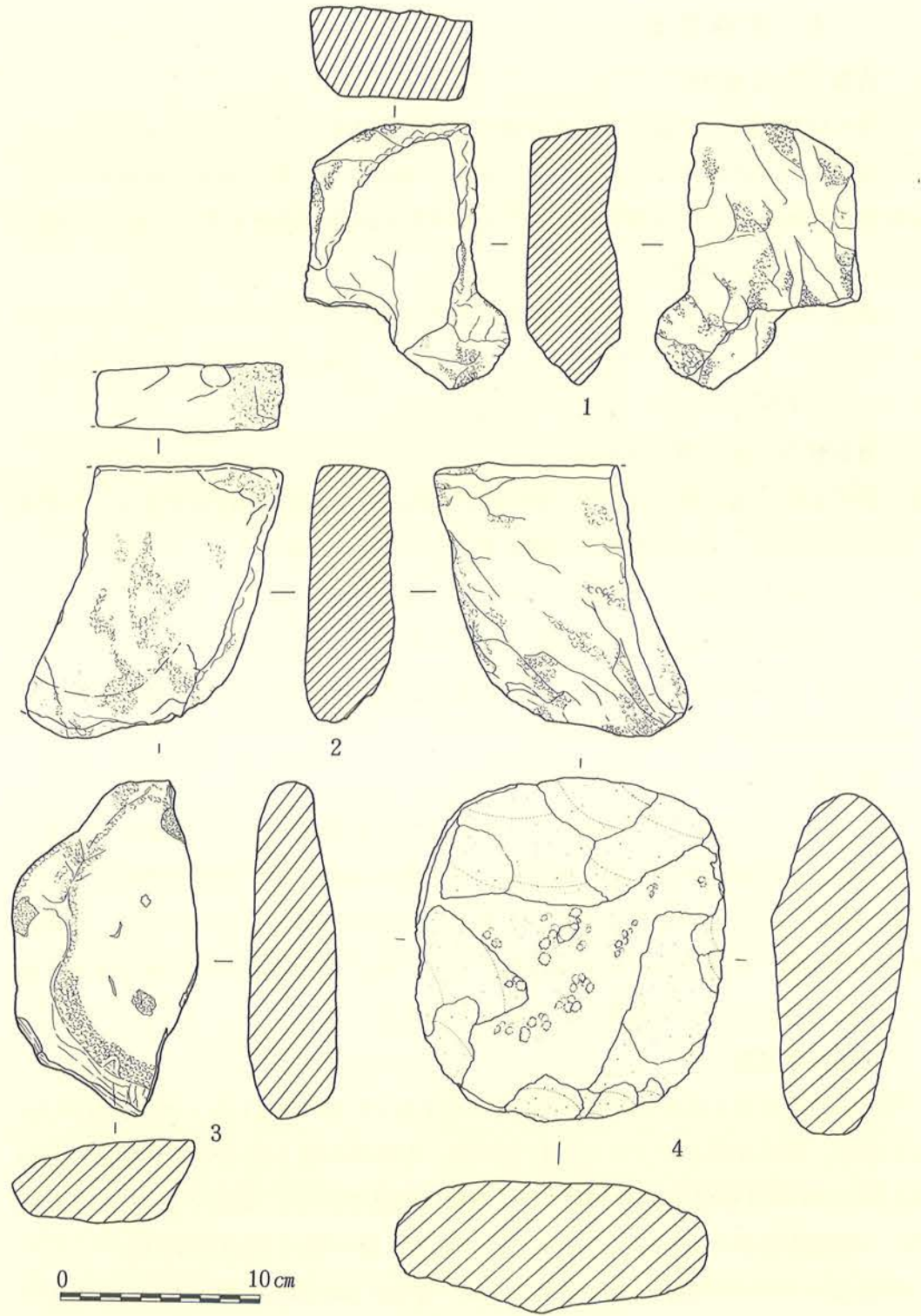
表の片面のみに直径 1.8 cm前後の小さなくぼみが出来ている。側縁部が欠損している。表採品、石質、砂岩

その他の石製品（第21図）

- ① I-32からの出土は、滑石製品である。横断面から1/4の残りで全形の状態がつかみにくい。上面は平坦になり下方は丸く、滑石は他のグスク遺跡においても出土しているが、これまでの資料の中には、石鍋の破片と思われるものが出土しており、石鍋製作との関連も想定される。（第21図8）
- ② K-35出土の資料で全面に研磨を施した製品である。残念ながら小破片であるため形が判然としない。一方の側縁部と思われる部分は特に研磨面が明瞭である。（第21図6）。石質、粘板岩。



第 21 图 石器实测图



第 22 图 石器实测图



## 8 青銅製品

### 古鏡 (第21図39)

六花卉で構成された面をもつ青銅鏡である。調査時の際の小さなキズが入っているが全体に保存状態が良好な製品である。表面は平板状で鏡背は外縁が約 0.3 cmの隆帯縁を残し、中央部に幅 1 cm、高さ 0.4 cmの鋳が貼付されている。文様なし。面径 16.1 cm、縁厚 0.3 cm

本製品の出土状態として第1号礫群に接して出土したもので、用途としては日常的な使用によるものよりも副葬もしくは祭祀、神儀的なものとしての埋納品の一つとして利用されていたものと考えられる。

### カンザシ (第21図4～43)

- ④⑩ 頭部が細く楕円形にスプーン状に成形され、竿部が直径 10.3 cmである。先端部が鋭利である。小さな面取り調整がある。全長 15.2 cm。
- ④⑪ 資料①に類似する。竿部は六面の小さな面取成形がある。(第21図41)
- ④⑬ I-33 出土の資料で第1号礫群内からの出土である。頭部が六花卉の装飾部分がある。首部は断面が 0.4 cmの円形をなし竿の部は 5.5 cmで方形状をなす。先端は角錐状をなす。(第21図43)

### 鞋 (第21図44)

N-35 からの出土で両端が楕円形に成形された製品である。表側がやや丸くカーブをもち裏面は平たくなっている。中央部に 0.5 cmの小孔が2ヶ所<sup>注1</sup>あけられている。重量 2.9 gで小形の鞋である。本製品と同態の資料はこれまでに、浦添城跡、<sup>注2</sup>勝連城跡、<sup>注3</sup>佐敷グスクなどから出土している。武具の防備具の部品である鎧のヒモ止めの金具として利用されたもの<sup>注1</sup>と考える。

### 青銅製金具類

円形状の飾金具2点と半円筒金具が1点出土している。第21図-45は直径 1.8 cmを測り、桜の花形にデザインされている。中央部に径 0.65 cmの穴が穿たれている。M-38 第II層出土。46は径 1.9 cmの扁円形状を呈し、表面に唐草文様を施す。同様中央部に 0.5 cmの穴が穿たれている。H-29、第I層出土。

第21図-47は半円筒の金具で全長 4.5 cm、径 0.4 cmを測る。厚さ 0.1 cmの銅板を折り曲げ半筒状につくるが一方だけに合わせ目<sup>注1</sup>があって他方は完全に合わさっていない。I-38、第II層出土。



(注1) 『浦添城跡第一次発掘調査概報』—今姿を見せる古琉球の浦添城跡—  
沖縄県浦添市教育委員会 昭和58年1月

2) 『琉球文化財調査報告書』琉球政府文化財保護委員会 1965年6月

3) 『佐敷グスク』—佐敷グスク発掘調査報告—沖縄佐敷村教育委員会  
1980年3月

#### 貨銭(第22図)

開元通宝、洪武通宝、紹聖元宝、熙寧元宝、寛永通宝、無文銭。

貨銭はD-38とした現在も拝所として利用されている隆起石灰岩の下部からとその周辺部において出土した。従来グスクから出土する貨銭の性格については、これまでに各種の論争が発表されている。「グスク時代を通じての貨銭の出土は外来交易のきざしを端的に物語るものである。中国銭が主流を占める中に和銭など鑄造年代と流通の時代幅とは必ずしも一致した使われかたではないとされる。」<sup>注</sup>したがって貨銭出土の遺跡における時期的開始の決定的な判断の資料としては積極性に欠ける要素が残されているとされている。

グスクにおけるこのような貨銭が流通銭としてどの程度の利用であったか、あるいは遺跡の時代判断への層位的な中での埋土状態などに問題が残る。



(注) 『興南研究紀要』—遺跡出土の貨銭の取扱いについて—嵩元政秀  
1978年7月

(大 城 慧)

第 1 表 貨 銭 出 土 一 覧

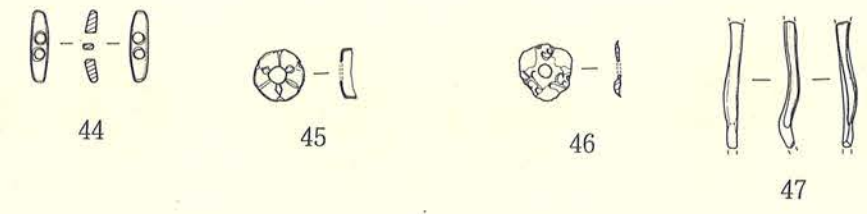
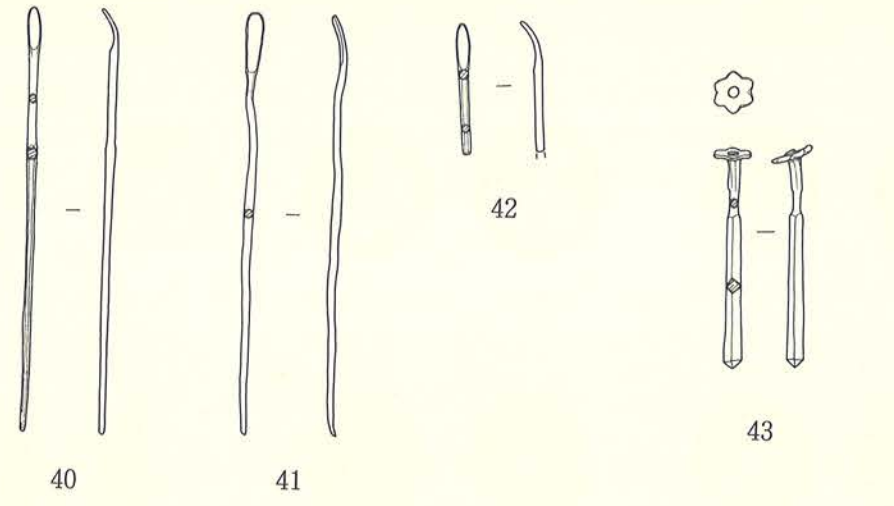
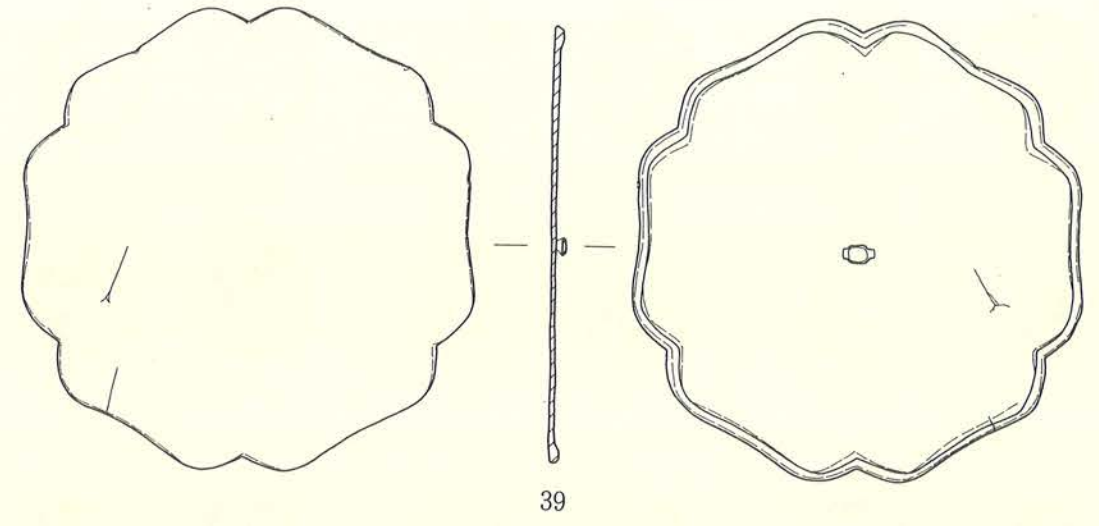
図版 番号	貨 銭 名	観 察 事 項	直 径 (cm)	現存厚 (cm)	重 量 (g)	銭造国・ 初銭年	出 土 地 点
1	開元通宝	完形品。文字は磨耗するが、「開」・「元」は判読できる。表面に緑色のサビが一部にみられる。	2.4	0.1	3.1	唐 高祖 621年	D-38 拝所に伴う石列
2	開元通宝	完形品。判読できる文字は「開」・「元」の二文字で他は磨耗が著しい。裏面に赤色のサビが全体的にみられる。	2.4	0.1	3.0	唐 高祖 621年	D-38 拝所に伴う石列
3	祥符元宝	完形品。文字部は「祥」・「符」・「元」が明瞭である。「宝」は磨耗する。表面の一部分に緑色のサビ。	2.2	0.15	5.05	北宋 哲宗 1008年	D-38 拝所に伴う石列
4	□和□宝	破損品。残存する文字は「和」・「宝」ではほぼ明瞭に判読できる。「至和元宝」あるいは「至和通宝」のいずれかが推定される。表裏面に緑色のサビが全体的にみられる。	推定 2.5	0.11	1.2	北宋 仁宗 1054年～ 1055年	G-31 No.60 pit
5	熙寧元宝	完形品。文字は全体的に明瞭である。表面は緑色のサビがわずかにみられる。わずかにまがる。	2.35	0.1	2.3	北宋 神宗 1068年	D-38 拝所に伴う石列
6	元豊通宝	完形品。書体は隸書で、「元」・「豊」・「通」の三文字が容易に判読できる。縁端の一部がかなり磨り減った感じをうけるため横断の一部は楔形状に近い。サビはみられない。	2.3	0.03 ～ 0.1	1.9	北宋 神宗 1078年	D-38 拝所に伴う石列
7	元祐通宝	完形品。明瞭な隸書体である。表裏に緑色のサビが全面にみられる。	2.5	0.11	3.4	北宋 哲宗 1086年	K-34 第Ⅲ層

図版 番号	貨 銭 名	観 察 事 項	直径 (cm)	現存厚 (cm)	重量 (g)	銭造国・ 初銭年	出 土 地 点
8	元祐通宝	完形品。書体は隸書体である。腐蝕は表裏面にみられるが、文字は不鮮明ではあるが判読が可能。表裏に緑色のサビが一部に残存。	2.4	0.11	3.4	北宗 哲宗 1086年	表採資料
9	紹聖元宝	ほぼ完形に近く、縁端が欠損する。文字はほぼ明瞭に判読できるが「聖」の字が一部欠失する。表裏に緑色のサビが付着する。	2.85	0.1	2.55	北宗 哲宗 1094年	H-27 第Ⅲ層
10	洪武通宝	完形品。文字は鮮明である。サビの付着はすくないようである。	2.2	1.1	2.2	明 太祖 1368年	D-38 拝所に伴う石列
11	寛永通宝	完形品。文字はかなり鮮明である。サビの付着は少ない。裏面に「丈」の一文字あり。	2.35	0.1	2.45	江戸 家光 1636年	K-38 第Ⅰ層
12	寛永通宝	完形品。文字は鮮明である。緑色のサビによって腐蝕する。	2.45	0.1	1.15	江戸 家光 1636年	K-38 第Ⅰ層
13	寛永通宝	一部破損。文字は鮮明であるが「永」が欠損する。緑色のサビによって腐蝕する。	2.4	0.11	1.3	江戸 家光 1636年	K-38 第Ⅰ層
14	□祐示宝	完形品。文字は全体的に磨耗し判読ができない箇所もある。熙祐元宝の可能性が考えられる。	2.2	0.1	2.2		D-38 拝所に伴う石列
15	□祐□□	破損品。書体は隸書体である。文字は「祐」の一字が確認される。元祐通宝などの可能性が考えられる。表裏の全面に緑色のサビがみられる。孔が一孔(1mm)破損部近くに確認できる。ゆるく屈曲する。	推定 2.5	0.11	1.0		C-28 第Ⅰ層

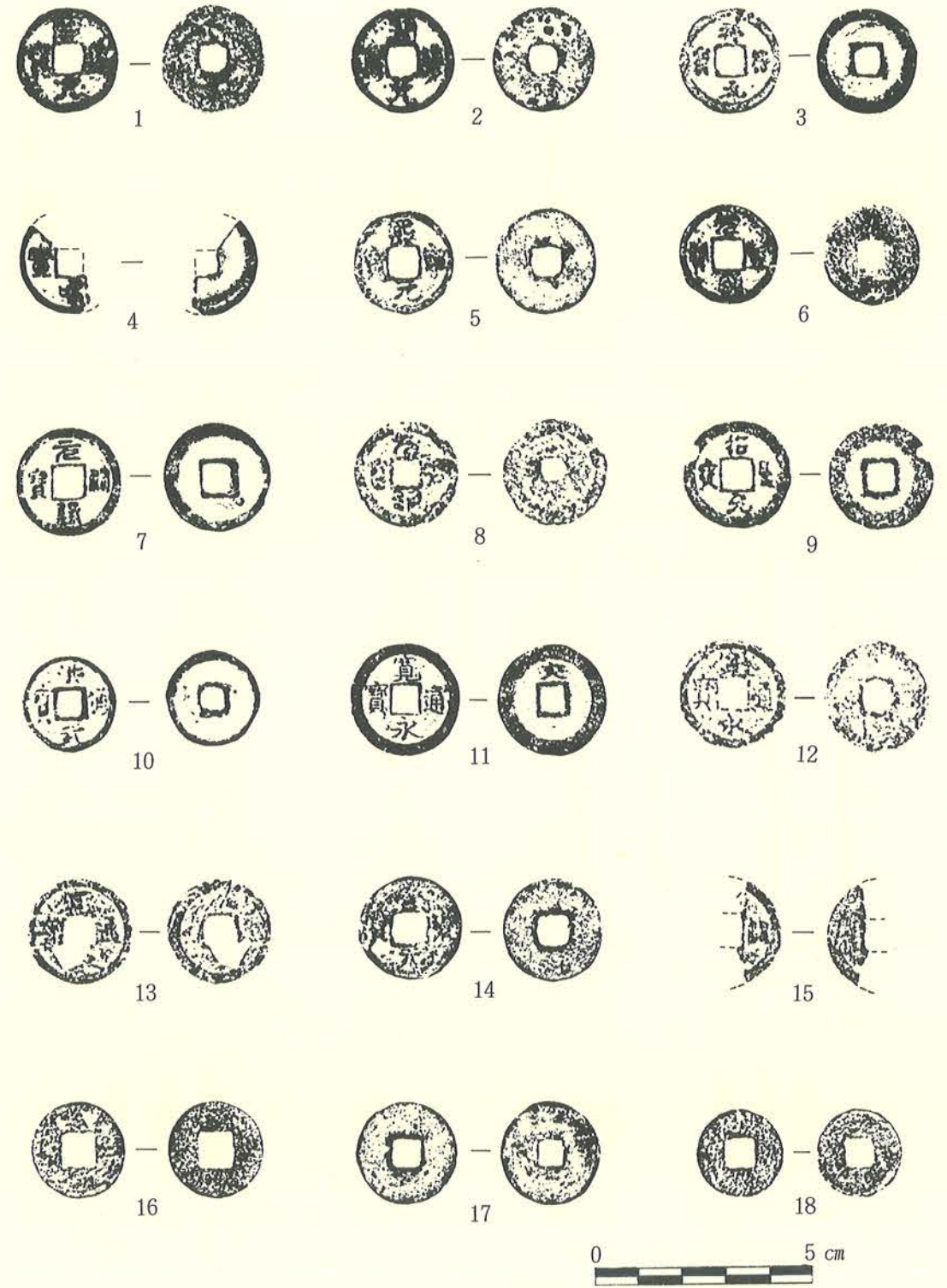
図版 番号	貨 銭 名	観 察 事 項	直 径 (cm)	現 存 厚 (cm)	重 量 (g)	銭 造 国・ 初 銭 年	出 土 地 点
16		完形品であるが、磨耗が著しいため文字は半読できない。サビの付着もみられる。	2.2	0.1	2.15	不 明	D-38 拝所に伴う石列
17		完形品。磨耗が著しく、文字の痕跡は16よりも悪い。判読不可能。ゆるく屈曲する。	2.3	0.1	3	不 明	D-38 拝所に伴う石列
18	無 文 銭	完形品。この種の無文銭は他に17点がD-38の拝所で得られているが、鳩目銭（当間銭）とは異なる理由として中央の正方形の孔が鳩目銭と比較して孔のサイズが小さい。	2.0	0.1	1.5		D-38 拝所に伴う石列

(注) 表の作成にあたっては高元政秀氏の『遺跡出土の貨銭の取扱いについて』（興南研究紀要 1978年7月第6号）と比嘉春潮氏の「沖縄の歴史」（沖縄タイムス社 1965年11月）を参考にした。





第23図 青銅製品 (39—鏡、40~43—カンザシ、44—鞋)



第 24 圖 貨錢拓影圖

## 9 土 器

本遺跡出土の主体となる土器はフェンサ上層式土器（註1）と呼称されるものであるが、形態などにおいてフェンサ下層式土器（註2）の範疇にはいる資料や陶質土器が数点得られている。

出土した土器は全てが細片化し、器形の全体像が把握しにくいいため、ここでは久米島下地原洞穴遺跡から採集された2点の土器を掲げてグスク土器を理解するための一助としておきたい（第35図1・2）。なお、稲福遺跡の「上御願」地区は前述したとおり過去にも発掘調査が実施されており（註3）、この時に出土した鉢形土器が2点、琉球考古学研究会編『稲福遺跡』に収録されているので、この遺跡から出土した破片土器を理解するために参照されたい。

本遺跡で出土した資料には完形品はなく、全て小破片であった。若干、器形を窺うことのできるものは図上復元を試みたものもある。

出土した土器片数は、表採資料を含めて37,936点得られ、その内訳は、口縁破片1,972点、胴部破片34,952点、底部破片1,012点である。これらを各遺構別に出土頻度をみると第1号礫群（約0.7%）、第2号礫群（約0.3%）、第3号礫群（約0.4%）、第1号土壙（約0.08%）、第2号土壙（約0.1%）、第3号土壙（約0.3%）、第4号土壙（約2.2%）となっている。他は表採（約5.3%）によるものと遺物包含層（約90.7%）からの出土であった。地点別出土状況は別表Aに表示。

本遺跡で確認できた土器の種類は、壺形土器・鉢形土器・碗形土器・手捏土器・不明土器・その他の土器・滑石を混入する土器の7種類である。その他に蓋・把手・底部・土製品が得られている。記述は前記した順に行なうが、特に出土量の多い壺形・鉢形の2器種については細分を試み、他はそのおおまかな形態的な特徴で分類した。また、胴部破片については割愛した。なお、口縁部の個々の特徴を第1表に示した。

土器は、破片資料ではあるが器種・器形がはっきりするものについては器種・器形ごとに分類し、さらにその土器面調整（外器面の観察を主体とした）や胎土および混入物についても注意を払うこととして分類を試みた。以下、器種・器形および胎土・混入物の概説を行なった上で、各器形別あるいは蓋・把手・底部・土製品の順に記載する。

1) 壺形土器は全体的特徴から肩が張り出すもので、頸部のもっとも締る箇所か

ら口唇部までの長さに任意の基準を設けて、次の様に分類した。口唇部から頸部までの長さが2 cmを超えるものを壺Ⅰ、2 cmを越えないものを壺Ⅱ、無頸に近いものを壺Ⅲとした。また、壺Ⅰ・壺Ⅱにみられる口縁部の形態は文章中で記述することにした。なお、壺形土器細分の規準にした口唇部から頸部までの「2 cm」の長さについては便宜上設定したものである。

- 2) 鉢形土器は、基本的に壺形で用いた口頸部の長さが2 cmを超えるものを鉢Ⅰ、2 cmを越えないものを鉢Ⅱとした。鉢Ⅱの中には成形・器面調整において細分が可能であったので鉢Ⅱa・鉢Ⅱb・鉢Ⅱcの3タイプを設定した。したがって鉢Ⅱは、鉢Ⅱa・鉢Ⅱb・鉢Ⅱcの総称となる。鉢Ⅰ・鉢Ⅱはいずれも頸部が「く」の字状に屈曲するものであるが、頸部を有さず口縁部が内傾する鉢形土器を鉢Ⅲとした。鉢Ⅲの土器のうち口縁部が肥厚するものを鉢Ⅲa、肥厚しないものを鉢Ⅲbの2者に細分した。
- 3) 碗形土器は鉢Ⅲのように口縁形態に従って分類することにし、口縁部が肥厚するものを碗A、肥厚しないものを碗Bとした。
- 4) 手捏土器。ここでいう手捏土器は手捏（指圧とナデ）手法で仕上げるもの以外に篋調整で仕上げるものをも含めることにした。
- 5) 不明土器としたものは、器形の傾きが一定しないものや器形の推定が困難なものをここに含めた。
- 6) その他の土器として取り扱った土器はフェンサ下層式土器と陶質土器の二種である。
- 7) 滑石を混入する土器とは、胎土に滑石の粉末を混入するものである。

※ 各器種と遺構の関係は第2表に示した。

#### 胎土および混入物

土器は、精選された粘土に微細な石英（ガラス質の鉱物）・長石・黒色鉱物などを混入するもの（いずれも肉眼と30倍ルーペで観察した結果による）である。なお、土器の胎土に含まれる混入物の量は、器面調整の結果で多く見えたり少なく見えたりするものであるが、ここでは器表面の肉眼観察によって鉱物片が多く見える順に従って記述することにした。胎土および混入物の特徴や違いによって次のⅠ類からⅥ類の6種に分類してみた。



イ類 焼成はかなり良く、硬いものが多い。胎土は粘着性に富んだ泥質粘土である。

ロ類 イ類よりかなり焼成の良いものと、極端に悪いものの二者があり、胎土は両者ともイ類より粘着性が弱い粘土である。この種の胎土は精選されるものときめの細かいものがある。

ハ類 焼成は良く、硬いものが一般的で、胎土に石灰質砂粒などを多量に混入する。胎土の粘着性はイ類よりも強く、器面の状況はアバタ状を呈するものを主体とする。

ニ類 固く焼き締められ陶質化した土器である。焼成はイ類・ロ類・ハ類・ホ類へ類よりも硬い。

ホ類 イ類・ロ類・ハ類に近い胎土に、細かい滑石の粒を多量に混入するため、手ざわりはスベスベする。

へ類 胎土は全体的に粗く、石英が極端に多く混入しているもの。

#### 1) 壺形土器

壺形土器は30点(第25図1～第27図30)を図示した。ここでは前記分類に従がい壺Ⅰ・壺Ⅱ・壺Ⅲの順に概説する。

##### ○ 壺Ⅰ(第25図1～第26図18)

壺Ⅰは18点をその典型とした。壺Ⅰはおおまかに口縁の形態から3つに細分できる。①ゆるく外反するもの(第25図1～3、第26図12)が4点、②直口あるいはそれに近いもの(第25図4～6、第26図7・8・13～18)が11点、③きつく外反するもの(第26図9～11)が3点である。実測図を掲載しなかった破片資料においても①・②が多い様である。③は少ない傾向にあった。

##### ○ 壺Ⅱ(第26図19～第27図28)

壺Ⅱに属する資料は10点を選び掲載した。この壺Ⅱも壺Ⅰと同様に分類した。①ゆるく外反するもの(第26図19・20、第27図25・26)は4点で、②直口あるいはそれに近いもの(第27図21・22・27・28)が4点、③きつく外反するもの(第27図23・24)が2点得られた。壺Ⅱも壺Ⅰと同様に①・②が多く、③は少ない。

##### ○ 壺Ⅲ(第27図29・30)

壺Ⅲの明確な資料は2点のみであった。29は口唇近くで微妙にくびれるタイ

プである。30は胴部からいきなり口縁にくるタイプである。壺Ⅲは量的に少ないようであった。

以上が壺形土器に分類したものであるが、外器面の調整方法をみると、篋削りで調整した後にナデで仕上げるものが圧倒的に多い様である。篋削りのみで終了する例は3点ある(第25図1、第26図7・8)。稀に篋磨きによって仕上げられるものがある(第27図22)。22は黒褐色を呈する。胎土および混入物においては今のところ壺Ⅰにハ類としたアバタ状を呈するものが多く、壺Ⅱ・壺Ⅲには少ない様である。

壺Ⅰ・壺Ⅱの口径推算をみると、壺Ⅰの最大は21.5 cm、最少10.7 cm。平均15.9 cmである。壺Ⅱの最大は14.0 cm、最少は7.5 cm。平均10 cmであった。壺Ⅰは壺Ⅱより口径が大きい結果となった。

## 2) 鉢形土器

鉢形土器は前述の分類に従い。36点をその典型的な資料として図示した。以下、鉢Ⅰ・鉢Ⅱ・鉢Ⅲの順に記述を行なうことにするが鉢Ⅰ・鉢Ⅱは一括して記述する。

鉢Ⅰ(第27図31~33)・鉢Ⅱ(第27図34・35、第28図36~45、第29図46) 鉢Ⅰ・鉢Ⅱの代表的なものは16点を呈示した。

鉢Ⅰ・鉢Ⅱを器面調整などから分類すると鉢Ⅰ(第27図31~33)の3点は頸部の屈曲がゆるいもので、口縁から胴部にかけて篋削りを施し、一部にナデが観察できる。鉢Ⅰの3点は胎土・混入物・色調などから同一個体の破片と考えられるものであるが直接は接合できない。鉢Ⅱは次の3タイプに分類できる。鉢Ⅱa(第27図34~第28図36)は3点で、口縁から胴部に刷毛等を施した後に口縁部へ補強を兼ねた指圧を加えるものである。鉢Ⅱbの第28図37~40に示す4点は、全体的に篋削りで調整した後に頸部へ横位・斜位方向の篋削りを再度施す。鉢Ⅱc(第28図41~45、第29図46)の6点は、口縁部に貼付けを施すため、擬似肥厚的な感じを受ける。この部分に指圧を加える。頸部にはシャープな稜が観察できる。

以上が、鉢Ⅰ・鉢Ⅱと分類したものである。鉢Ⅱbの40篋磨きによって仕上げられているため滑沢を帯びる。色調は黒褐色である。この手法に近いものは壺Ⅱ(第27図22)に見られた一例を含めて数少ない資料である。胎土・混入物は特に口類が多く、イ類が次に少ない。ハ類は僅かであった。

口径のサイズと鉢Ⅰ・鉢Ⅱを比較すると、鉢Ⅰは 24.4 cm。鉢Ⅱの最大は 27.4 cm、最少は 14.9 cm。平均 21.4 cmであった。鉢Ⅰ・鉢Ⅱには口唇から頸部までの 2 cmの基準と口径は適応しない様であった。

鉢Ⅲ（第 29 図 47～60、第 30 図 61～66）

鉢Ⅲの代表的資料として 20 点を図示した。鉢Ⅲは前述の分類に従った。

鉢Ⅲ a（第 29 図 47～49）属するものは 3 点あった。器面調整をみると第 29 図 47 の 1 点が篋削りが主体で、口縁部にナデを施す。第 29 図 48・49 の 2 点はナデ仕上げである。この 2 点は同一個体の破片資料であるが、直接的には接合できない。鉢Ⅲ b（第 29 図 50～60・第 30 図 61～66）に属する典型的なものとして 17 点を図示した。器面の特徴から①篋削りを施すもの（第 29 図 52・53・57・59）が 4 点、②は篋消り・刷毛目がナデと併用またはナデ消されるもの（第 29 図 50・51・54・55・56・58、第 6 図 61・62・64・65）が 10 点、③器面の保持が悪く、破損するもの（第 29 図 60、第 30 図 63・66）が 3 点あった。

以上が鉢Ⅲと分類したものであるが、口径の推算が試みられるものはない。コブ状の把手が貼付けられるグループにおいて第 3 表に示すとおり、主体となるコブの方向は口唇に対して縦位の貼付けで、次いで円形状の貼付けである。この二者が一般的なものであるが、第 29 図 55 の一点は例外的なものであり、口唇に対して横位の貼付けであった。胎土・混入物は鉢Ⅰ・鉢Ⅱと同様に口類が多い様で、イ類、ハ類の順に少ない。

### 3) 碗形土器

碗形土器の代表的なものとして 18 点を図示した（第 30 図 67～84）。碗形土器は碗 A と碗 B の 2 種に分類した。碗 A（第 30 図 67～83）は 17 点で、その内、丸味のある肥厚と角っばい肥厚の両者に分類した結果、丸味のあるものが多い様であった。碗 B（第 30 図 84）は 1 点のみであった。碗 A の出土状況は別表 B に呈示。

以上が碗形土器と分類したものである。器面調整をみると碗 A は肥厚部をナデで丁寧に仕上げるが、頸部から胴部にかけては篋削りを主体とするものが一般的であった。碗 A の 77 は篋磨きで仕上げる。碗 B の 84 は篋磨きによって仕上げられ、色調は黄褐色を呈している。胎土・混入物をみると口類がイ類より多い。口径が推算できた資料は 3 点であった。67 が 19 cm、78 が 13.2 cm、81 が 13 cm を測った。

#### 4) 手捏土器

ここに分類した土器は手捏を主体とする土器であり、第30図85～89に図示した5点である。以下、個々の主な特徴を記述する。

85は図上復元を試みた資料である。口径4.6cm、底径2.8cm、高さ2.2cm。器厚は2～5mm。器色は内外面とも黄褐色。器面は内外面に指圧とナデによって調整される。内面は外面に比べ丁寧である。胎土・混入物はⅠ類である。86は口径・底径の推算が困難な資料であるが高さは2.4cmを測る。器厚は0.8～1.4cm。器色は内外面とも黄褐色。器面調整は内外面とも指圧とナデによって仕上げる。胎土・混入物はⅠ類である。87は推算口径が8.4cmである。内外面とも丁寧にナデで仕上げている。器厚は2mm前後。器色は淡黄色である。胎土・混入物はⅠ類である。88は推算口径5.8cm。器厚3～4mm。器色は黄褐色。器面調整をみると内外面ともナデ仕上げ、内面は丁寧である。胎土・混入物はⅠ類である。89は推算口径6.2cmである。器厚3～4mm。器色は外面暗褐色、内面黄褐色である。器面調整は外面において篋削り後にナデを施す。内面はナデ仕上げ。胎土・混入物はⅠ類である。

#### 5) 不明土器

不明土器としたものは破片が小さく器種、器形がはっきりしない標品のことであり、第31図90～102に示す13点である。その内、102の一例は口縁部を欠損する資料である。この不明土器とした標品についてあえて器種、器形別に細分して記述すると次のとおりとなる。

壺Ⅰもしくは鉢Ⅰに分類できるものは1点(第31図90)のみである。壺Ⅱもしくは鉢Ⅱに分類できる資料はもっとも多く9点あった(第31図91～94・96～98・100・101)。壺Ⅱ・鉢Ⅱの中には口縁が肥厚するものが1点(第31図95)ある。そのことは壺Ⅱ・鉢Ⅱのいずれかに肥厚するタイプを設定することが可能かと考えられる。本調査では数点の出土があった。99は傾きが一定しないため、見方によってはフェンサ下層式土器の口縁にもみえるが、壺Ⅲに近い感じを受ける。102は口縁部が欠落するが残存部から鉢形が考えられる標品である。

#### 6) その他の土器

その他の土器としたものはフェンサ下層式土器(第31図103～105)と陶質土器(第31図106)の4点である。



フェンサ下層式土器の2点(103～105)は残存する破片から鉢形もしくは甕形に属するものかと推定される。103は外面を主に篋削りで調整するが、一部にナデを施す。内面は篋削りで仕上げる。104は内外面ともナデと指圧で仕上げるが、内面は外面に比べ丁寧である。全体的にいびつた感じを受ける。105は外面を篋削りで調整した後にナデによって丁寧に仕上げられている。内面はナデ仕上げである。106の陶質土器は外器面の皮模質が欠落するが、残存部よりナデ・研磨仕上げが考えられる標品である。内面はナデが主体で、一部に刷毛目が残存する。

胎土および混入物については103～105が前述したフェンサ上層式土器と共通する鉱質をもちいている。103・105が口類、104はイ類であった。106はニ類で微細なガラス質鉱物を主体に混入する。口径は8.7 cmである。

#### 7) 滑石を混入する土器

ここでいう滑石を混入する土器とは胎土に1 mm内外の粉末化された滑石を混入するもので、5点(第31図107～111)得られた。残存する破片から器形を推定すると鉢形(107・108)が2点、碗形(109)が1点である。107の口径は24 cmで、内外の器表面とも篋削りのあとにナデ消されている標品である。108も107と同様に器面を調整するが、内面では篋削りは撫で消されているが十分でなく、削りの痕跡を残す標品である。110は内外面とも削りで仕上げられそのまま篋削りが残されている。111は土鍋の胴部破片である。胴部に台形状の鐔を横位に貼付けする。外面は刷毛目がナデ消されている。内面はナデ仕上げである。

#### 8) 蓋および把手の資料

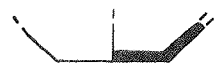
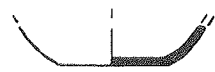


蓋の資料と考えられたものは(第32図112)の1点で、当初、その他の土器に分類してあったが、傾き、器面調整などから種々検討した結果、蓋として抜き出したものである。蓋の内外面および縁部は篋削りで仕上げる。内面の縁部は磨耗した感じを受ける。

把手あるいは把手と考えられる標品は2点(第32図113・114)得られた。113は篋削りの後にナデで仕上げたもので把手の形態は付け根部は薄い、全体的にみると指の先端が押しつぶされた形状のものである。色調は橙褐色である。把手の厚さは0.8～1.2 cm、幅1.3～1.7 cmである。付け根部分は0.3～0.4 cmの厚さである。本品は完全に近い把手資料である。114は把手の付け根部分に相当す

ると考えられるもので、形態的に 113 に近いものが推定できる。色調は全体的に黄褐色を呈するが一部は暗褐色の箇所もみられた。厚さ 2.7 cm。付け根部分は 0.6 ~ 1.9 cm であった。

9) 底 部

底部は 1,012 点の出土がみられた。底部の分類は、その特徴から下記の模式図に従った。

形 態	模 式 図	主 な 特 徴
I	a 	底面からの立ち上がりは外側に大きく開いた状態で、ほぼ直線的に胴部へ伸びるもの。
	b 	底面からの立ち上がりは内側に小さくとじた状態で、ほぼ直線的に胴部へ伸びるもの以外に、内傾の極端なものも含めた。また、手捏土器もその範囲とした。
II	a 	底面からの立ち上がりは I a と同様にひろくが、次の点で区別した。立ち上がりの部分から丸味を保持しながら胴部へ伸びるもの。
	b 	底面からの立ち上がりは I b と同様にとじるが、立ち上がり部からほぼ丸味を保持する状態で胴部へ伸びるもの。また、手捏土器もその範囲に含めた。
III	a 	底面の立ち上がり部が僅かにくびれ、ほぼ直線的に胴部へ伸びるもの。
	b 	底面の立ち上がり部が III a と同様にくびれるが、ほぼ丸味を保持する状態で胴部へのびるもの。
IV		陶磁器にみられる高台を貼付けするもの。
V		フェンサ下層式土器の底部で、底部のくびれは III a・III b よりきつくくびれる。
VI		高杯の底部
VII	不 明	底面および立ち上がり部の破片で、特に葉痕・刷毛目を残す資料を取り上げた。

出土量は1,012点中もっとも多いものはⅦで50.7%で、次いでⅠaに属するもの30.5%、Ⅱaに属するもの15.9%、他の29%はⅠb・Ⅱb・Ⅲ～Ⅵに示したものである。以下、各タイプ別に器面調整・胎土および混入物について記述を行なうことにする。

○Ⅰa (第32図115～123)

Ⅰaに属する典型的な資料は9点を図示した。器面調整をみると篋削りを主体に施すものは8点(第32図115～122)で、ナデを主体に施すものは同図123に示した1点のみであった。胎土および混入物はⅠ類に属するものが2点(117・122)、Ⅱ類に属するものが1点(115)、他はⅢ類であった。

○Ⅰb (第32図124～127)

Ⅰbに属するものは4点であった。器面はナデを主体に仕上げるものが4点(124～127)あり、篋削りを基本に施すものもある。胎土および混入物はすべてⅢ類であった。

○Ⅱa (第33図128～129)

Ⅱaの典型的な例は2点を図示した。いずれも篋削りがある。胎土および混入物はⅡ類とⅢ類であり、各々1点ずつの出土である。

○Ⅱb (第33図130～135)

Ⅱbに属する資料は6点得られた。器面はナデを主体に仕上げるもの(130・133・135)が4点、篋削りを施すものは131の1点で、132は器面が欠落するため不明。胎土および混入物は135のみⅠ類で、他はⅢ類に属する。

○Ⅲa (第33図136～144)

Ⅲaに属するものは9点である。136は底面に刷毛目を施すもので、この一例だけである。ナデを主体に施すものは137・140・143の3点である。篋削りを施すものは136・141・142・144の4点、141・142の破片は同一個体のものである。不明は138・139の2点であった。胎土および混入物は、137・138、140の3点がⅡ類で、他はⅢ類であった。

このⅢaは、底部の底ち上がり部をヘラ削りで仕上げるもの(136・141・142)と指圧・ナデを併用するもの(137・140・143・144・145)がある。

○Ⅲb (第33図145～第34図149)

Ⅲ b は 5 点得られた。器面は篋削りを主体に調整するもの 145・147・148 の 3 点で、ナデを主体に調整する例は 146・149 の 2 点である。胎土および混入物はすべてハ類であった。

○Ⅳ（第 34 図 150・151）

Ⅳは 2 点のみ得られ、その特徴は高台を貼つけることにある。150 は器面をナデで仕上げ高台の断面は隅丸の三角形を呈する。高台の内側には 5 mm 前後の半円状の溝がみられる。高台裏は篋削りである。151 は高台の断面は台形状に近く、畳付けは平坦となる。高台裏は篋削りで仕上げる。

○Ⅴ（第 34 図 152・153）

Ⅴの 2 点は、いわゆるフェンサ下層式土器の底部である。152 は底面の直径から内側に 1 cm 前後くびれるものである。153 は底面の厚さが一部破損する資料で、底面の厚さが前者のものより 3 倍近く厚くなる。器面はナデを主体に仕上げる。胎土および混入物は 152 がロ類、153 がヘ類である。

○Ⅵ（第 34 図 154）

154 はその形状から高杯になるものと考えられた資料で、一点だけの出土であった。器面はナデで仕上げる。胎土および混入物はロ類である。

○Ⅶ（第 34 図 155～159）

Ⅶ類としたものは 5 点得られた。4 点ともグスク系土器の底部であるが、159 の 1 点だけは陶質化した土器であり厚手の標品となっている。

155～157 の 3 点はさといも科の葉痕と考えられるものである。158 の 1 点は幾可学状に刷毛目を施すものである。159 は時期的にはグスク時代以降のもので、横位方向に刷毛目を丁寧に施し、劈開面には縦方向に大きな気孔状のものがみられる。素地は瓦質である。

#### 10) 土製品

土製品は 4 点（第 34 図 160～163）が得られ、いずれも土器の破損部を利用したものであるが、用途は不明である。160 は平面観が不定形で、一面に三条の凸帯がみられる。横断面は楔形に近い。一面は滑沢を帯び、平坦であることからこの面を多用したものと考えられる。胎土は非常に精選された感じを受ける泥質粘土で、微細な石英と長石を混入する。ハ類である。焼成は良く、硬い。色調は灰褐色である。尖端部が 1 mm と薄く、厚い所で 9 mm である。161～163 の 3 点は



胴部破片の端部に2～4孔が穿たれているもので、穿孔部はすべて破損する。また、孔はすべて外面から穿っているのが特徴かと考えられる。161・163の2点は胴部破片の上端に穿たれていて、両者とも横位方向に施されている。穿孔の数は161が2孔、163が4孔確認できた。162は胴部破片の上端に4孔穿ち、さらに右側面に2孔穿っている。孔のサイズは161～163は直径4～5mmが平均として推定できる。胎土・混入物は161がロ類、162・163がハ類である。

※ 久米島下地原洞穴遺跡採集の土器について

久米島下地原洞穴遺跡採集の資料は壺形土器・鉢形土器の復元土器で第35図1・2に示した2点である。

○ 壺形土器（第35図1）

口縁部はほぼ直口に近く、口唇は平坦である。頸部よりゆるやかに肩が張り出し、そのまま胴部へ移行する。底部の状況は立ち上がり部より丸味を保持しながら胴部へ移る。底面の仕上げはナデ調整を施す。器面調整をみると外面は口縁部がナデ調整、他はすべて篋削りである。内面はナデによって仕上げられている。胎土は細かく、焼成は悪く、脆い泥質粘土で、1mm以下の石英粒を多量混入し、長石などを含む。色調は外面が黄褐色で、胴部の一部は黒褐色を呈する。内面は黄褐色。器厚は口縁から胴部までが0.5～1.1cmで、底面の厚さは1.3cmである。口径12.2cm、高さ23.3cm、底径16.2cm。

○ 鉢形土器（第35図2）

口縁部はかるく外反する。口唇は丸味を帯び、頸下部よりなだらかに胴部へ移るまで肩状に近い。底部からの立ち上がりはやや丸味を帯びた状態で胴部へ続く、底面の仕上げは石灰分が付着しているために不明。器面調整は外面を丁寧な篋削りで仕上げているが、口縁部に指圧とナデが観察される。内面はナデが主体で、一部に篋削りを施す。胎土は精選され、焼成は堅緻である。泥質粘土で、微細な石英粒などを混入する。色調は外面が暗褐色を主体とするが、一部に黄褐色を呈す箇所がある。内面は主に黄褐色で、一部に黒色を呈する面が観察できる。器厚は口縁から胴部までが4～8mmである。底面の厚さは4～6mmであった。口径16.9cm、高さ12.2cm、底径12.2cm。

小 結

本遺跡で確認できた土器は前述したとおり、フェンサ上層式土器を主体とする

ものである。量的には壺形よりも鉢形土器の口縁破片がかなり目立った。いずれも鉢Ⅱa・鉢Ⅱb・鉢Ⅱc・鉢Ⅲの小破片が多く、その中でも特に鉢Ⅱb・鉢Ⅱcに分類した破片が多かった。鉢形の次に壺形、碗形の順となっている。主要器種と器面調整および胎土・混入物の関係を概略すると壺形にはナデ調整で仕上げるものが主流を占め、鉢形では圧倒的に篋削りで仕上げるものが多いということである。また、器面調整が、壺形・鉢形の用途を解明するうえで重要な一要素になるものと考えられた。

壺Ⅰにおいてはハ類が他器種に比べ、目立つ事由のひとつに次の要素が推定された。これは壺Ⅰの土器製作過程と関係するのではないかということである。具体例を掲げると第1図1のロ類と第1図2のハ類の場合を取り上げると前者のロ類で仮りに胴部から頸部までを積み上げていく段階で、粘着性の弱さをカバーするために、器壁を厚く積み上げて仕上げたものとして想定できるからである。後者のハ類は粘着性がとくに強いため容易にしかも薄く積み上げることができる利点から壺Ⅰにおいて多用されたものかと推察された。実際に、分類の対象とした壺形、鉢形の小破片を十分に観察しても、壺形ではハ類が目立ったが、逆に鉢形土器の場合は極端に少なかった。さらにまた、壺Ⅰのハ類の場合にはきめが細かく、しかも腰が強いために液体などを貯蔵するものとして利用された可能性が強くなった。また、ハ類とはほぼ一致する胎土が多量に出土した例として八重瀬グシク(註4)の報告がある。このことは本島南部地域でも壺形土器以外の用途としてハ類は多用されたことを裏付けているものであろう。

胎土および混入物を総括するとロ類が多く、次にイ類、ハ類などの順に減少する傾向にあった。壺形と鉢形のロ類は原稿執筆後、気づいた点があった。それは壺形・鉢形のロ類に若干の差異が感じられるということである。すなわち壺形のロ類は粗く、鉢形のロ類は細かいということであった。

底部の底面の状況を観察したところ大多数がナデ仕上げで、稀にさといも科の葉痕や刷毛目仕上げのものがある。

胎土に滑石を混入する土器は他に熱田貝塚(註5)、佐敷グスク(註6)、与那城貝塚(註7)などで報告例がある。

その他に鉢Ⅲの一部に貼付けられたコブ状の突起を有する例としてフェンサグスク貝塚(註8)、勝連城跡(註9)、ヤジャーガマ洞穴遺跡(註10)などで出



土している。特にコブ状を横位に貼付けする例はヤジャーガマ洞穴遺跡で3例報告があり、この種のもは把手として実際に機能していた可能性を考えることができる。

蓋の類例も前記したフェンサグスク貝塚、勝連城跡などで出土している。

土鍋に関してはヤジャーガマ洞穴遺跡の出土例がある。

特筆すべきものに陶質土器、把手、高台付きの底部、土製品などであるが、土製品についての用途は今後の調査、研究等で解明されるであろう。

以上前述した諸要素から推定すればグスク土器の系譜については幾度かの外来文化（特に九州の中世須恵器、中世土器など）の影響を受けて、グスク土器として発生し、そして南島という地理的環境の中で変容しながら独自性を確保していった感を強くした形となった。

（当真嗣一・金城亀信）

#### 註

註1 フェンサ城貝塚調査概報 1969年 琉球大学法文学部紀要 社会篇 第13号。

註2 註1に同じ。

註3 稲福遺跡 1974年 琉球考古学研究会編。

註4 八重瀬グスク 一調査略報一 1979年 東風平町教育委員会。

註5 恩納村熱田貝塚発掘調査ニュース 1978年 沖縄県教育委員会。

註6 佐敷グスク 1980年 佐敷町教育委員会。

註7 与那城貝塚 1980年 西原町教育委員会。

註8 註1に同じ。

註9 勝連城跡第二次発掘調査概報 1966年 琉球文化財調査報告書。

註10 特別寄稿 グスク時代開始期の若干の問題について 一久米島ヤジャーガマ遺跡の調査から一 1975年 沖縄県立博物館紀要 第1号。

第1表 土器観察一覧（口縁・蓋・把手）

図版 土器番号	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	器面調整の 特徴	胎土・混入物	色調・器厚	出土 地点
第25図 1	壺 I	口径 16.9	(口縁の形態) 口唇は丸い。 ゆるく外反す る。口縁から 肩部はフック 状に近い。	外面…横位方 向の篋削り。 内面…ナデ。	イ類…ガラス 質の鉱物・黒 色鉱物など。 胎土は精選。 焼成は良く、 硬い。	外面…淡黄色 内面… “ 5~8 mm	表採
第25図 2	壺 I	口径 13.8	(口縁の形態) 口唇は尖状。 ゆるく外反す る。口縁から 肩部は「く」 の字状に近 い。	外面…ナデが 主体。一部に 篋削りを施す。 内面…横位方 向の篋削り。 口縁にナデを 施す。	ハ類…長石・ ガラス質の鉱 物など。 胎土は精選。 焼成は堅緻。	外面…淡黄色 内面… “ 5~8 mm	表採
第25図 3	壺 I	口径 13.5	(口縁の形態) 口唇は尖状。 ゆるく外反す る。	外面…ナデ仕 上げ。 内面… “	ハ類…石灰質 微砂粒・石英・ 黒色鉱物など。 胎土は細かい。 焼成は悪く、 脆い。	外面…灰褐色 内面… “ 3~7 mm	B-33 第II層
第25図 4	壺 I	口径 17.6	(口縁の形態) 口唇は尖状。 直口状の口縁。 口縁から肩部 は「く」の字 状に近い。	外面…ナデ。 内面…ナデが 主体。横位方 向に篋削りの 痕跡あり。	ハ類…ガラス 質の鉱物・長 石・黒色鉱物。 胎土は細かい。 焼成は良く、 硬い。	外面…黄褐色 内面… “ 4~6 mm	I-32 第III層
第25図 5	壺 I	口径 14.0	(口縁の形態) 口唇は丸い。 全体的に内傾 し、直口に近 い口縁。口縁 から肩部は弧 状に近い。	外面…ナデが 主体。口縁に 指圧痕あり。 内面…ナデ。	ハ類…石灰質 微砂粒・長石 ・ガラス質の 鉱物など。 胎土は精選。 焼成は良く、 硬い。	外面…淡黄色 内面… “ 4~5 mm	B-24 第I層
第25図 6	壺 I	口径 19.7	(口縁の形態) 口唇は丸い。 直口に近い口 縁。全体的に 内傾する。	外面…ナデが 主体。篋削り の痕跡あり。 内面…横位方 向の篋削り。	ハ類…長石・ ガラス質の鉱 物・黒色鉱物。 胎土は細かい。 焼成は良く硬 い。	外面…黄褐色 内面… “ 6~7 mm	K-35 第III層
第26図 7	壺 I	口径 14.0	(口縁の形態) 口唇は平坦。 直口の口縁。	外面…斜位・ 横位方向の篋 削り。 内面…斜位方 向に刷毛目の 痕跡が口縁で 見られる。	イ類…長石・ ガラス質の鉱 物・黒色鉱物。 胎土は精選。 焼成は堅緻。	外面…淡黄色 内面… “ 4~8 mm	D-29 第III層



図版 土器番号	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	器面調整の 特徴	胎土・混入物	色調・器厚	出土 地点
第26図 8	壺 I	口径 21.5	(口縁の形態) 口唇は平坦。 直口の口縁。	外面…横位方 向の篋削り。 内面…ナデが 主体。横位方 向に篋削りの 痕跡あり。	ハ類…長石・ ガラス質の鉾 物・黒色鉾物。 胎土は細かい 焼成は良く、 硬い。	外面…黄褐色 内面…淡黄色 7~9 mm	L-38 第Ⅲ層
第26図 9	壺 I	口径 17.7	(口縁の形態) 口唇は丸い。 強く外反する。 口縁から肩部 は「く」の字 状に近い。	外面…ナデが 主体。横位方 向に篋削りの 痕跡あり。 内面… ”	ロ類…あずき 色の粘土粒・ 黒色鉾物。 胎土は細かい。 焼成はやや悪 い。	外面…黄褐色 内面… ” 9 mm~1.5 cm	E-29 第Ⅲ層
第26図 10	壺 I	口径 16.5	(口縁の形態) 口唇は丸い。 強く外反。口 縁から肩部は 「V」字状に 近い。	外面…ナデが 主体。指圧(口 縁部)と篋削り (頸部)が観 察できる。 内面…ナデが 主体。横位方 向に篋削りの 痕跡あり。	ロ類…ガラス 質の鉾物・長 石・黒色鉾物 胎土は精選。 焼成は良く、 硬い。	外面…淡黄色 内面…灰色 4~5 mm	C-38 第Ⅱ層
第26図 11	壺 I	口径 10.7	(口縁の形態) 口唇は丸い。 強く外反。口 縁から肩部は 「V」字状に 近い。	外面…ナデが 主体。篋削り の痕跡あり。 内面…ナデが 主体。篋削り の痕跡あり。	ロ類…黒色鉾 物・ガラス質 の鉾物。 胎土は細かい。 焼成はやや悪 く、脆い。	外面…黄褐色 内面… ” 5~8 mm	K-34 第Ⅲ層
第26図 12	壺 I		(口縁の形態) 口唇は丸い。 ゆるく外反。	外面…ナデ。 内面…ナデが 主体。篋削り の痕跡あり。	ロ類…長石・ 黒色鉾物など。 胎土は細かい。 焼成はやや悪 く、脆い。	外面…暗褐色 内面…黄褐色 7 mm~1.0 cm	I-34 第Ⅲ層
第26図 13	壺 I		(口縁の形態) 口唇は尖状。 直口に近い口 縁。	外面…磨耗の ため不明。 内面…ナデが 主体。横位方 向に篋削りの 痕跡あり。	ハ類…アズキ 色の粘土粒・ 長石など。 胎土は細かい。 焼成は良く、 硬い。	外面…黄褐色 内面…淡黄色 4~8 mm	C-31 第Ⅲ層
第26図 14	壺 I		(口縁の形態) 口唇は尖状。 直口に近い口 縁。	外面…ナデが 主体。一部に 指圧痕 内面… ”	イ類…ガラス 質の鉾物・黒 色鉾物など。 胎土は精選。 焼成は良く、 硬い。	外面…黄褐色 内面… ” 5~7 mm	I-33 第3礫 群
第26図 15	壺 I		(口縁の形態) 口唇は丸い。 直口の口縁。 全体的に内傾 する。	外面…ナデ。 内面… ”	ロ類…ガラス 質の鉾物・黒 色鉾物など。 胎土は精選。 焼成は良く、 硬い。	外面…黄褐色 内面… ” 6~8 mm	C-28 第Ⅲ層

図版 土器番号	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	器面調整の 特 徴	胎土・混入物	色調・器厚	出土 地点
第26図 16	壺 I		(口縁の形態) 口唇は尖状。 直口の口縁。 全体的に内傾する。	外面…磨耗の ため不明。 内面…ナデが 主体。横位方 向に篋削りの 痕跡あり。	ロ類…黒色鉍 物・アズキ色 の粘土粒。 胎土は細かい。 焼成は良く、 硬い。	外面…橙褐色。 内面…淡橙色。 5～8 mm	D-30 第Ⅲ層
第26図 17	壺 I		(口縁の形態) 口唇は尖状。 直口の口縁。 全体的に内傾する。	外面…ナデ。 内面…ナデが 主体。横位方 向に篋削りの 痕跡あり。	ハ類…石灰質 砂粒・長石。 胎土は細かい。 焼成は良く、 硬い。	外面…黄褐色 内面…淡黄色 4～6 mm	N-38 第Ⅲ層
第26図 18	壺 I		(口縁の形態) 口唇は尖状。 直口に近い口 縁、全体的に 内傾する。	外面…ナデ。 内面…ナデが 主体。横位方 向に篋削りの 痕跡あり。	ハ類…石灰質 微砂粒・ガラ ス質の鉍物・ 黒色鉍物など。 胎土は細かい。 焼成は良く、 硬い。	外面…淡黄色 内面 " 5～8 mm	表 採
第26図 19	壺 II	口径 7.5	(口縁の形態) 口唇は丸い。 ゆるく外反。	外面…ナデが 主体。指圧痕 を一部に残す 内面…ナデ。	ロ類…ガラス 質の鉍物・黒 色鉍物など。 胎土は精選。 焼成は良く、 硬い。	外面…黄褐色 内面 " 5～6 cm	D-25 第Ⅰ層 群
第26図 20	壺 II	口径 9.2	(口縁の形態) 口唇は丸い。 ゆるく外反。	外面…ナデ。 内面…ナデが 主体。口頸部 に僅かに篋削 りが残存。	イ類…石英・ 長石・黒色鉍 物など。 胎土はかなり 精選。 焼成は良く、 硬い。	外面…橙褐色 内面…黄褐色 4～7 mm	C-23 第Ⅱ層
第27図 21	壺 II	口径 8.6	(口縁の形態) 口唇は平坦。 直口状の口縁。	外面…ナデが 主体。指圧痕 が僅かに残存。 内面…ナデ。	イ類…石英・ 長石・黒色鉍 物など。 胎土はかなり 精選。 焼成は良く、 硬い。	外面…黄褐色 内面… " 3～5 mm	E-30 第Ⅰ層
第27図 22	壺 II		(口縁の形態) 口唇は丸い。 直口の口縁。	外面…篋削り による研磨で 滑沢を呈す。 内面…ナデが 主体。僅かに 篋削りの痕跡 あり。	イ類…石英・ 長石・黒色鉍 物など。 胎土はかなり 精選。 焼成は良く、 硬い。	外面…黒褐色 内面…黄褐色 5～6 mm	B-30 第Ⅲ層
第27図 23	壺 II		(口縁の形態) 口唇は丸い。 きつい外反。	外面…ナデ。 内面…ナデが 主体。頸部に 横位方向の篋 削りが僅かに 残存。	ロ類…ガラス 質の鉍物・黒 色鉍物など。 胎土は細かい。 焼成は良く、 硬い。	外面…橙褐色 内面… " 5～6 mm	M-33 第Ⅲ層

図版 土器番号	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	器面調整の 特 徴	胎土・混入物	色調・器厚	出土 地点
第27図 24	壺Ⅱ	口径 14.0	(口縁の形態) 口唇は丸い。 きつい外反。	外面…ナデが 主体。口縁近 くに横位方向 の篋削り。 内面…器面が 破損するため 不明。	ロ類…ガラス 質の鉱物・長 石など。 胎土は細かい。 焼成は良く硬 い。	外面…赤褐色 内面…黄褐色 6～7 mm	I-31 第Ⅲ層
第27図 25	壺Ⅱ	口径 12.0	(口縁の形態) 口唇は丸い。 ゆるい外反。	外面…ナデが 主体。一部に 指圧痕あり。 内面…ナデ。	イ類…長石・ ガラス質の鉱 物・黒色鉱物。 胎土はかなり 精選。 焼成は良く、 やや硬い。	外面…灰褐色 内面… “ 4～6 mm	表 採
第27図 26	壺Ⅱ		(口縁の形態) 口唇は丸い。 ゆるい外反。	外面…ナデが 主体。一部に 横位方向の篋 削りが痕跡と して残る。 内面…ナデが 主体。斜位方 向に篋削りが 残存する。	ロ類…黒色鉱 物・ガラス質 の鉱物・長石 胎土は細かい。 焼成は良く、 硬い。	外面…赤褐色 内面…黄褐色 5～8 mm	C-25 第Ⅱ層
第27図 27	壺Ⅱ		(口縁の形態) 口唇は丸い。 直口の口縁。	外面…ナデ。 内面…ナデが 主体。頸部に 横位方向の篋 削りが痕跡と して残る。	ロ類…ガラス 質の鉱物・黒 色鉱物など。 胎土は細かい。 焼成は良く、 硬い。	外面…暗褐色 内面…黄褐色 5～9 mm	M-36 第Ⅱ層
第27図 28	壺Ⅱ		(口縁の形態) 口唇は丸い。 直口の口縁。	外面…ナデが 主体。頸下部 に横位方向の 篋削りが痕跡 として残る。 内面…ナデ。	イ類…石英・ 長石。 胎土は精選。 焼成は良く、 硬い。	外面…黄褐色 内面… “ 4～5 mm	K-33 第Ⅲ層
第27図 29	壺Ⅲ		(口縁の形態) 口唇は尖状。 全体的に内傾 する。	外面…破損の ため不明。 内面…ナデ。	ロ類…黒色鉱 物・ガラス質 の鉱物など。 胎土は細かい。 焼成は悪く、 脆い。	外面…黄褐色 内面… “ 5～6 mm	B-24 第Ⅲ層
第27図 30	壺Ⅲ		(口縁の形態) 口唇は尖状。 全体的に内傾 する。	外面…ナデが 主体。一部に 横位方向の刷 毛目と指圧が 残存する。 内面…ナデが 主体。	ロ類…ガラス 質の鉱物・黒 色鉱物など。 胎土は粗い。 焼成は悪く、 脆い。	外面…黄褐色 内面…暗褐色 6～8 mm	B-35 第Ⅲ層

図版 土器番号	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	器面調整の 特徴	胎土・混入物	色調・器厚	出土 地点
第27図 31	鉢 I	口径 24.4	(口縁の形態) 口唇は丸い。 ゆるく外反し 口頸部は鈍く 「く」字状を 呈する。ナデ 肩。	外面…横位方 向の篋削りが 主体。口縁の 一部にナデと 指圧が観察で きる。 内面…ナデが 主体。篋削り が残存する。	ロ類…ガラス 質の鉾物・黒 色鉾物など。 胎土は細かい。 焼成は良く硬 い。	外面…暗褐色 内面…黄褐色 7～8 mm	L-34 第Ⅲ層
第27図 32	鉢 I		(口縁の形態) 口唇は丸い。 ゆるく外反し 頸部の角は鈍 く、「く」字 状を呈する。 ナデ肩。	外面…横位方 向の篋削りが 主体。口縁の 一部にナデと 指圧がみられ る。 内面…篋削り は31よりかな り顕著に残る。 一部にナデが みられる。	ロ類…ガラス 質の鉾物・黒 色鉾物など。 胎土は細かい。 焼成は良く硬 い。	外面…黄褐色 内面…黄褐色 7～8 mm	L-33 第Ⅲ層
第27図 33	鉢 I		(口縁の形態) 口唇は丸い。 ゆるく外反し 頸部の角は鈍 く、「く」字 状を呈する。 ナデ肩。	外面…横位・ 斜位方向の篋 削りが良く残 っている。 内面…篋削り が主体。一部 にナデがみら れる。	ロ類…ガラス 質の鉾物・黒 色鉾物など。 胎土は細かい。 焼成は良く硬 い。	外面…黄褐色 内面…黄褐色 7～8 mm	K-34 第Ⅲ層
第27図 34	鉢 II a	口径 27.0	(口縁の形態) 口唇は丸い。 ゆるく外反し 頸部の角は鈍 く、「く」字 状を呈する。	外面…刷毛目 が主体。頸部 に指圧痕を残 す。 内面…刷毛目 仕上げ。	ロ類…ガラス 質の鉾物・黒 色鉾物など。 胎土は精選。 焼成は堅緻で ある。	外面…黄褐色 内面…淡黄色 6～7 mm	F-26 第Ⅰ層
第27図 35	鉢 II a	口径 27.4	(口縁の形態) 口唇は平坦。 ゆるく外反す る。頸部の角 は鈍く、「く」 字状を呈する。	外面…刷毛目 が主体。頸部 に指圧痕を顕 著に残す。 内面…頸下部 に刷毛目が良 く残存し、口 縁は刷毛目が ナデ消される。	ロ類…黒色鉾 物・ガラス質 の鉾物など。 胎土は精選。 焼成は堅緻で ある。	外面…黄褐色 内面…淡黄色 6～7 mm	O-38 第Ⅱ層
第28図 36	鉢 II a	口径 24.6	(口縁の形態) 口唇は平坦。 ゆるく外反し 頸部の角は鈍 く、「く」字 状を呈する。	外面…篋削り で仕上げる。 頸部で指圧痕 が僅かにみら れる。 内面…篋削り が主体。一部 は篋削りがナ デ消されている。	イ類…ガラス 質の鉾物・黒 色鉾物など。 胎土は精選。 焼成は堅緻。	外面…淡黄色 内面… “ 4～6 mm	M-40 第Ⅱ層



図版 土器番号	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	器面調整の 特徴	胎土・混入物	色調・器厚	出土 地点
第28図 37	鉢Ⅱb	口径 23.5	(口縁の形態) 口唇は平坦。 きつく外反し 頸部の角は鋭 い。「く」字 状を呈する。	外面…篋削り で仕上げる。 内面…篋削り 後にナデで仕 上げる。	ロ類…黒色鉍 物・ガラス質 の鉍物など。 胎土は精選。 焼成は堅緻。	外面…暗褐色 内面…灰褐色 4～5mm	G-30 第Ⅲ層
第28図 38	鉢Ⅱb		(口縁の形態) 口唇は丸い。 ゆるく外反し 頸部の角は鋭 い。「く」字 状を呈する。	外面…篋削り で仕上げる。 内面…篋削り が主体。一部 ナデによって 消されている。	イ類…ガラス 質の鉍物・黒 色鉍物など。 胎土は精選。 焼成は堅緻。	外面…黄褐色 内面…淡黄色 4～5mm	K-33 第Ⅲ層
第28図 39	鉢Ⅱb	口径 18.1	(口縁の形態) 口唇は平坦 ゆるく外反。 頸部の角は鋭 い。「く」字 状を呈する。	外面…篋削り が主体。口縁 に指圧痕を残 す。 内面…篋削り がナデ消され ている。	ロ類…ガラス 質の鉍物・黒 色鉍物など。 胎土は精選。 焼成は堅緻。	外面…暗褐色 内面…淡黄色 5～6mm	K-33 第Ⅱ層
第28図 40	鉢Ⅱb	口径 17.0	(口縁の形態) 口唇は丸い。 ゆるく外反。 頸部の角は鋭 く、「く」字 状を呈する。	外面…頸下部 は篋磨き、口 縁はナデと指 圧がみられる。 内面…ナデ仕 上げ。	イ類…ガラス 質の鉍物・黒 色鉍物など。 胎土は精選。 焼成は堅緻。	外面…黒褐色 内面…黄褐色 4～5mm	H-30 第Ⅲ層
第28図 41	鉢Ⅱc	口径 15.7	(口縁の形態) 口唇は丸い。 ゆるく外反す る。頸部の角 は鋭く、「く」 字状を呈する。	外面…篋削り 後にナデで仕 上げる。 内面…ナデ仕 上げ。	イ類…ガラス 質の鉍物・黒 色鉍物など。 胎土は精選。 焼成は堅緻。	外面…黄褐色 内面…淡黄色 4mm	H-30 第Ⅲ層
第28図 42	鉢Ⅱc	口径 14.9	(口縁の形態) 口唇は丸い。 ゆるく外反す る。頸部の角 は鋭い、「く」 字状を呈する。	外面…篋削り が主体。口縁 の一部に指圧 痕がみられる 内面…ナデ仕 上げ。	イ類…ガラス 質の鉍物・黒 色鉍物など。 胎土は精選。 焼成は堅緻。	外面…淡黄色 内面 “ 2～3mm	H-30 第Ⅲ層
第28図 43	鉢Ⅱc	口径 26.0	(口縁の形態) 口唇は丸い。 ゆるく外反す るが、口縁が 内傾気味であ る。頸部の角 は鋭い。「く」 字状を呈する。	外面…頸下部 は篋削り、口 縁はナデ仕上 げ。 内面…ナデが 主体。一部に 篋削りが残存 する。	イ類…ガラス 質の鉍物・黒 色鉍物など。 胎土は精選。 焼成は堅緻。	外面…暗褐色 内面…淡黄色 3～5mm	H-30 第Ⅲ層

図版 土器番号	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	器面調整の 特徴	胎土・混入物	色調・器厚	出土 地点
第28図 44	鉢Ⅱc		(口縁の形態) 口唇は丸い。 ゆるく外反し 頸部の角は鋭 い「く」字状 を呈する。	外面…頸下部 は篋削り、口 縁の一部にナ デと指圧が残 る。 内面…ナデ仕 上げ。	ロ類…ガラス 質の鉾物・黒 色鉾物など。 胎土は精選。 焼成は堅緻。	外面…淡灰色 内面…暗灰色 2～4mm	H-31 第Ⅰ層
第28図 45	鉢Ⅱc	口径 20.7	(口縁の形態) 口唇は丸い。 ゆるく外反、 頸部の角は鋭 い「く」字状 を呈する。	外面…頸下部 は篋削り、口 縁の一部にナ デと指圧が観 察できる。 内面…ナデで 仕上げるが、 一部に篋削り の痕跡あり。	ロ類…ガラス 質の鉾物・黒 色鉾物など。 胎土は精選。 焼成は堅緻。	外面…黄褐色 内面…暗灰色 2～4mm	M-29 第Ⅰ層
第29図 46	鉢Ⅱc	口径 21.2	(口縁の形態) 口唇は平坦。 きつく外反、 頸部の角は鋭 い「く」字状 を呈する。	外面…頸下部 は篋削り、口 縁の一部に指 圧痕あり。 内面…ナデで 仕上げるが、 一部に篋削り の痕跡あり。	イ類…ガラス 質の鉾物・黒 色鉾物など。 胎土は精選。 焼成は堅緻	外面…淡黄色 内面… 5～6mm	L-33 第Ⅲ層
第29図 47	鉢Ⅲa		(口縁の形態) 口唇は平坦。 ゆるく内傾す る。口縁に帯 状の貼付け。	外面…頸下部 は篋削り、口 縁はナデと指 圧。 内面…篋削り がナデ消される。	イ類…黒色鉾 物・ガラス質 の鉾物など。 胎土は精選。 焼成は堅緻。	外面…黄褐色 内面… 肥厚部 4～5mm 胴部 4～10mm	H-30 第Ⅲ層
第29図 48	鉢Ⅲa		(口縁の形態) 口唇は平坦。 ゆるく内傾す る。逆「L」 字状を呈する。	外面…ナデ仕 上げ。 内面…	ロ類…黒色鉾 物・ガラス質 の鉾物など。 胎土は細かい。 焼成は悪く、 脆い。	外面…赤褐色 内面…暗褐色 肥厚部 1.5cm 胴部 5mm	K-38 第Ⅲ層
第29図 49	鉢Ⅲa		(口縁の形態) 口唇は平坦。 ゆるく内傾す る。肥厚部の 先端は破損す るが、48と同 様の形態。	外面…ナデ仕 上げ。 内面…	ロ類…黒色鉾 物・ガラス質 の鉾物など。 胎土は細かい。 焼成は悪く、 脆い。	外面…赤褐色 内面…暗褐色 肥厚部 9mm 胴部 5mm	K-39 第Ⅱ層
第29図 50	鉢Ⅲb		(口縁の形態) 口唇は平坦。 ゆるく内傾す る。縦位のコ ブ状突起を貼 付ける。	外面…コブの 周辺はナデ。 他は篋削りで 仕上げる。 内面…ナデが 主体。一部に 刷毛目あり。	イ類…ガラス 質の鉾物・長 石・黒色鉾物 胎土は精選。 焼成は堅緻。	外面…黄褐色 内面… 5～6mm	I-31 第Ⅲ層

図版 土器番号	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	器面調整の 特 徴	胎土・混入物	色調・器厚	出土 地点
第29図 51	鉢Ⅲb		(口縁の形態) 口唇は平坦。 ほぼ直口。縦 位のコブ状突 起を貼付ける。	外面…コブの 周辺はナデ。 他は刷毛目と ナデ。 内面…ナデ仕 上げ。	イ類…ガラス 質の鉱物・黒 色鉱物など。 胎土は精選。 焼成は堅緻。	外面…黄褐色 内面… “ 6～7 mm	H-30 第Ⅲ層
第29図 52	鉢Ⅲb		(口縁の形態) 口唇は平坦。 ゆるく内傾す る。円形状の コブ状突起を 貼付ける。	外面…篋削り で仕上げる。 内面…刷毛目 がナデ消され ている。	ロ類…ガラス 質の鉱物・黒 色鉱物など。 胎土は精選。 焼成は良く、 硬い。	外面…黄褐色 内面… “ 4～5 mm	表 採
第29図 53	鉢Ⅲb		(口縁の形態) 口唇は平坦。 ゆるく内傾す る。円形状の コブ状突起を 貼付ける。	外面…篋削り で仕上げる。 内面…ナデ仕 上げ。	イ類…ガラス 質の鉱物・黒 色鉱物など。 胎土は細かい。 焼成は良く、 硬い。	外面…黄褐色 内面…灰褐色 5～6 mm	E-31 第Ⅰ層
第29図 54	鉢Ⅲb		(口縁の形態) 口唇は平坦。 ゆるく内傾す る。円形状の コブ状突起を 貼付ける。	外面…篋削り が主体。口唇 の一部にナデ がみられる。 内面…刷毛目 がナデ消され ている。	イ類…ガラス 質の鉱物・黒 色鉱物など。 胎土は細かい。 焼成は良く、 硬い。	外面…暗褐色 内面…黄褐色 7～8 mm	D-22 第Ⅱ層
第29図 55	鉢Ⅲb		(口縁の形態) 口唇は平坦。 ほぼ直口。横 位にコブ状突 起を貼付ける。	外面…篋削り で仕上げるが 一部にナデあ り。 内面…刷毛目 がナデ消され ている。	イ類…ガラス 質の鉱物・黒 色鉱物。 胎土は細かい。 焼成は良く、 硬い。	外面…暗褐色 内面…黄褐色 5～7 mm	C-24 第Ⅱ層
第29図 56	鉢Ⅲb		(口縁の形態) 口唇は平坦。 ゆるく内傾す る。	外面…篋削り がナデ消され る。 内面…指圧痕 もみられるが ナデで仕上げ ている。	ロ類…黒色鉱 物・ガラス質 の鉱物など。 胎土は精選。 焼成は良く、 硬い。	外面…暗褐色 内面… “ 5～7 mm	C-24 第Ⅲ層
第29図 57	鉢Ⅲb		(口縁の形態) 口唇は平坦。 ゆるく内傾す る。	外面…篋削り で仕上げる。 内面…刷毛目 で仕上げる。	イ類…黒色鉱 物・ガラス質 の鉱物など。 胎土は精選。 焼成は堅緻。	外面…黄褐色 内面… “ 4～5 mm	L-33 第Ⅲ層
第29図 58	鉢Ⅲb		(口縁の形態) 口唇は丸い。 ゆるく内傾す る。	外面…篋削り がナデ消され る。 内面…ナデ仕 上げ。	イ類…黒色鉱 物・ガラス質 の鉱物など。 胎土は精選。 焼成は堅緻。	外面…黄褐色 内面… “ 5～7 mm	第 1 礫 群

図版 土器番号	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	器面調整の 特 徴	胎土・混入物	色調・器厚	出土 地点
第29図 59	鉢Ⅲb		(口縁の形態) 口唇は平坦。 ゆるく内傾する。	外面…篋削り で仕上げる。 内面…指圧痕 が顕著に残る	ロ類…黒色鉍 物・ガラス鉍 物など。 胎土は細かい 焼成は良く、 硬い。	外面…暗褐色 内面…黄褐色 7～8 mm	地土地 点不明 第Ⅲ層
第29図 60	鉢Ⅲb		(口縁の形態) 口唇は平坦。 ゆるく内傾する。	外面…不明 (器面の保持 が悪い)。 内面… ”	ハ類…長石・ 石英。 胎土は細かい。 焼成は良く、 硬い。	外面…黄褐色 内面… ” 4～5 mm	M-39 第Ⅱ層
第30図 61	鉢Ⅲb		(口縁の形態) 口唇は平坦。 ゆるく内傾する。	外面…篋削り が主体。口縁 の一部にナデ を施す。 内面…ナデ仕 上げ。	ロ類…ガラス 質の鉍物・黒 色鉍物など。 胎土は精選。 焼成は堅緻。	外面…淡黄色 内面… ” 4～6 mm	第1号 礫 群
第30図 62	鉢Ⅲb		(口縁の形態) 口唇は丸い。 ゆるく内傾する。	外面…篋削り が主体。口縁 の一部にナデ を施す。 内面…刷毛目 を施す。一部 はナデ消され ている。	イ類…ガラス 質の鉍物・黒 色鉍物など。 胎土は精選。 焼成は堅緻。	外面…淡黄色 内面… ” 5～6 mm	L-33 第Ⅲ層
第30図 63	鉢Ⅲb		(口縁の形態) 口唇は丸い。 ゆるく内傾する。	外面…不明 (器面の保持 が悪い)。 内面…ナデ仕 上げ。	ロ類…黒色鉍 物・ガラス質 鉍物など。 胎土は細かい。 焼成は良く、 硬い。	外面…黄褐色 内面… ” 5～6 mm	H-30 第Ⅰ層
第30図 64	鉢Ⅲb		(口縁の形態) 口唇は丸い。 ゆるく内傾する。	外面…篋削り で仕上げるが 一部にナデが みられる。 内面…ナデ仕 上げ。	ロ類…ガラス 質の鉍物・黒 色鉍物など。 胎土は精選。 焼成は堅緻。	外面…暗褐色 内面…淡黄色 4～6 mm	表 採
第30図 65	鉢Ⅲb		(口縁の形態) 口唇は丸い。 ゆるく内傾する。	外面…篋削り がナデ消され ている。 内面…刷毛目 の一部がナデ 消されている	ロ類…ガラス 質の鉍物・黒 色鉍物など。 胎土は精選。 焼成は堅緻。	外面…暗褐色 内面…淡黄色 4～7 mm	G-30 第Ⅲ層
第30図 66	鉢Ⅲb		(口縁の形態) 口唇は尖状。 ゆるく内傾する。	外面…不明 (器面の保持 が悪い)。 内面…ナデ仕 上げ。	ハ類…長石・ ガラス質鉍物 など。 胎土は細かい。 焼成は良く、 硬い。	外面…黄褐色 内面… ” 5～6 mm	C-20 第Ⅱ層



図版 土器番号	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	器面調整の 特徴	胎土・混入物	色調・器厚	出土 地点
第30図 67	碗A	口径 19.0	(口縁の形態) 口唇は丸い。 外傾する。	外面…頸下部 は篋削り、口 縁はナデで仕 上げる。 内面…器面が 全体的に剥落 するが残存部 よりナデが推 定。	ロ類…黒色鉍 物・ガラス質 鉍物など。 胎土は精選。 焼成は堅緻。	外面…黄褐色 内面… “ 肥厚部 6 mm 胴部 4 mm	L-39 第I層
第30図 68	碗A		(口縁の形態) 口唇は丸い。 全体的に外傾 する。口縁部 が弧状を呈す る。	外面…篋削り は口縁の稜部 から胴部まで みられる。口 縁の一部はナ デ。 内面…ナデ仕 上げ。	イ類…黒色鉍 物・ガラス質 の鉍物など。 胎土は精選。 焼成は堅緻	外面…橙褐色 内面…淡黄色 肥厚部 5 mm 胴部 5 mm	表採
第30図 69	碗A		(口縁の形態) 口唇は丸い。 外傾する。口 縁は弧状を呈 する。	外面…篋削り は口縁の稜部 から胴部まで 観察できる。 口縁の一部は ナデ。 内面…刷毛目 がナデ消される。	ロ類…ガラス 質の鉍物・黒 色鉍物など。 胎土は精選。 焼成は堅緻。	外面…灰白色 内面…淡黄色 肥厚部 6 mm 胴部 4 mm	B-24 第III層
第30図 70	碗A		(口縁の形態) 口唇は丸い。 外傾する。	外面…ナデ仕 上げ。 内面… “	イ類…ガラス 質の鉍物・黒 色鉍物など。 胎土は細かい。 焼成は良く、 硬い。	外面…橙褐色 内面… “ 肥厚部 8 mm 胴部 5 mm	F-30 第III層
第30図 71	碗A		(口縁の形態) 口唇は丸い。 外傾する。	外面…不明 (器面の保持 が悪いため)。 内面… “	ロ類…黒色鉍 物・長石・石 英。 胎土は細かい。 焼成は悪く、 脆い。	外面…黄褐色 内面… “ 肥厚部 6 mm 胴部 3~5 mm	M-37 第II層
第30図 72	碗A		(口縁の形態) 口唇は丸い。 外傾する。	外面…頸下部 は篋削り、口 縁はナデ仕上 げ。 内面…ナデ仕 上げ。	ロ類…黒色鉍 物・ガラス質 の鉍物など。 胎土は精選。 焼成は堅緻。	外面…灰褐色 内面…淡黄色 肥厚部 7 mm 胴部 5 mm	表採
第30図 73	碗A		(口縁の形態) 口唇は丸い。 外傾する。	外面…頸下部 は篋削り、口 縁はナデ仕上 げ。 内面…ナデ仕 上げ。	ロ類…黒色鉍 物・ガラス質 の鉍物など。 胎土は細かい。 焼成は良く、 硬い。	外面…暗褐色 内面… “ 肥厚部 8 mm 胴部 7 mm	第4土 墳

図版 土器番号	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	器面調整の 特徴	胎土・混入物	色調・器厚	出土 地点
第30図 74	碗A		(口縁の形態) 口唇は丸い。 外傾する。	外面…篋削り がナデ消される。 内面…ナデ仕 上げ。	イ類…ガラス 質の鉍物・黒 色鉍物など。 胎土は精選。 焼成は堅緻。	外面…黄褐色 内面… “ 肥厚部 7 mm 胴部 6 mm	O-36 第I層
第30図 75	碗A		(口縁の形態) 口唇は丸い。 外傾する。	外面…篋削り がナデ消される。 内面…ナデ仕 上げ。	ロ類…黒色鉍 物・ガラス質 の鉍物。 胎土は精選。 焼成は堅緻。	外面…橙褐色 内面…灰白色 肥厚部 5 mm 胴部 3~4 mm	L-36 第III層
第30図 76	碗A		(口縁の形態) 口唇は平坦。 外傾する。	外面…頸下部 は篋削り、他 は篋削りがナ デ消されてい る。 内面…ナデ仕 上げ。	イ類…黒色鉍 物・ガラス質 の鉍物など。 胎土は精選。 焼成は堅緻。	外面…橙褐色 内面…灰白色 肥厚部 1 cm 胴部 5 mm	第1 隣 群
第30図 77	碗A		(口縁の形態) 口唇は平坦。 外傾する。	外面…篋磨き で滑沢を有す る。 内面… “	イ類…黒色鉍 物・ガラス質 の鉍物など。 胎土は精選。 焼成は堅緻。	外面…暗黄色 内面… “ 肥厚部 6 mm 胴部 6 mm	H-29 第III層
第30図 78	碗A	口径 13.2	(口縁の形態) 口唇は平坦。 外傾する。	外面…器面の 大半が欠損す る。 残存部より篋 削りが推定。 内面…ナデ仕 上げ。	ロ類…ガラス 質の鉍物・黒 色鉍物など。 胎土は精選。 焼成は堅緻。	外面…灰白色 内面… “ 肥厚部 4 mm 胴部 4 mm	M-34 第III層
第30図 79	碗A		(口縁の形態) 口唇は平坦。 外傾する。	外面…ナデ仕 上げ。 内面… “	ロ類…ガラス 質の鉍物・黒 色鉍物など。 胎土は精選。 焼成は良く、 硬い。	外面…淡黄色 内面…灰白色 肥厚部 5 mm 胴部 4 mm	D-21 第II層
第30図 80	碗A		(口縁の形態) 口唇は平坦。 外傾する。	外面…篋削り がナデ消される。 頸下部にみら れ、口縁はナ デ仕上げ。 内面…ナデ仕 上げ。	ロ類…ガラス 質の鉍物・黒 色鉍物など。 胎土は精選。 焼成は良く、 硬い。	外面…橙褐色 内面…淡黄色 肥厚部 6 mm 胴部 3 mm	B-25 第II層
第30図 81	碗A	口径 13.0	(口縁の形態) 口唇は平坦。 外傾する。	外面…篋削り 後にナデを施 す。 内面…ナデ仕 上げ。	ロ類…ガラス 質の鉍物・黒 色鉍物など。 胎土は細かい。 焼成は良く、 硬い。	外面…淡茶色 内面… “ 肥厚部 7 mm 胴部 3 mm	C-24 第II層

図版 土器番号	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	器面調整の 特徴	胎土・混入物	色調・器厚	出土 地点
第30図 82	碗A		(口縁の形態) 口唇は平坦。 外傾する。	外面…篋削り が主体。一部 にナデがみら れる。 内面…ナデ仕 上げ。	イ類…長石・ 黒色鉱物など。 胎土は精選。 焼成は堅緻。	外面…橙褐色 内面…黄褐色 肥厚部 7 mm 胴部 4 mm	第1 礫 群
第30図 83	碗A		(口縁の形態) 口唇は平坦。 外傾する。	外面…篋削り 後にナデを施 す。 内面…ナデ仕 上げ。	ロ類…黒色鉱 物・ガラス質 の鉱物など。 胎土は精選。 焼成は良く、 硬い。	外面…橙褐色 内面… “ 肥厚部 6 mm 胴部 3 mm	表 採
第30図 84	碗B		(口縁の形態) 口唇は平坦。 外反する。	外面…篋磨き 内面…ナデ仕 上げ。	ロ類…長石・ 石英・黒色鉱 物など。 胎土は精選。 焼成は良く、 硬い。	外面…黄褐色 内面…淡黄色 5 mm	第4土 壙
第30図 85	手捏土 器	口径 4.6 底径 2.8 高さ 2.2	(口縁の形態) 口唇は丸い。 外傾する。	外面…指圧と ナデ。 内面…指圧と ナデは外面に 比べ丁寧であ る。	イ類…ガラス 質の鉱物・黒 色鉱物など。 胎土は精選。 焼成は良く、 硬い。	外面…黄褐色 内面… “ 2 ~ 5 mm	M-36 第II層
第30図 86	手捏土 器	高さ 2.4	(口縁の形態) 口唇は丸い。 直口状。	外面…指圧と ナデ。 内面…指圧と ナデは外面に 比べ丁寧であ る。	イ類…石英・ 長石。 胎土は精選。 焼成は良く、 硬い。	外面…黄褐色 内面… “ 0.8 ~ 1.4 cm	I-35 第II層
第30図 87	手捏土 器	口径 8.4	(口縁の形態) 口唇は丸い。 内傾する。	外面…ナデ仕 上げ。 内面… “	ロ類…ガラス 質の鉱物・黒 色鉱物など。 胎土は精選。 焼成は堅緻。	外面…淡黄色 内面… “ 2 mm	出土地 点不明
第30図 88	手捏土 器	口径 5.8	(口縁の形態) 口唇は尖状。 外傾する。	外面…指圧と ナデ。 内面…指圧と ナデ。外面に 比べ丁寧であ る。	イ類…黒色鉱 物・ガラス質 の鉱物など。 胎土は精選。 焼成は良く、 硬い。	外面…黄褐色 内面… “ 3 ~ 4 mm	C-25 第III層
第30図 89	手捏土 器	口径 6.2	(口縁の形態) 口唇は丸い。 外傾する。	外面…篋削り で調整後ナデ で仕上げる。 内面…ナデ仕 上げ。	ロ類…ガラス 質の鉱物・黒 色鉱物など。 胎土は精選。 焼成は良く、 硬い。	外面…暗褐色 内面…黄褐色 3 ~ 4 mm	D-21 第II層

図版 土器番号	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	器面調整の 特徴	胎土・混入物	色調・器厚	出土 地点
第31図 90	不明土 器	口径 29.5	(口縁の形態) 口唇は平坦。 外反する。	外面…篋削り が主体。一部 にナデと指圧 内面…篋削り が一部ナデ消 されている。	ロ類…ガラス 質の鉍物・黒 色鉍物など。 胎土は精選。 焼成は堅緻。	外面…暗褐色 内面…灰白色 0.8～1.0 cm	第4土 壙
第31図 91	不明土 器		(口縁の形態) 口唇は丸い。 頸部の角は鈍 い。	外面…ナデ仕 上げ。 内面… ”	ロ類…黒色鉍 物・ガラス質 の鉍物など。 胎土は精選。 焼成は堅緻。	外面…黄褐色 内面…灰白色 4～5 mm	L-33 第Ⅲ層
第31図 92	不明土 器		(口縁の形態) 口唇は丸い。 頸部の角は鈍 い。	外面…篋削り が頸下部に施 される。口頸部 に指圧痕とナ デ。 内面…刷毛目 が主体。口縁 は指圧痕とナ デ。	ロ類…黒色鉍 物・ガラス質 の鉍物など。 胎土は精選。 焼成は堅緻。	外面…暗褐色 内面…黄褐色 5～6 mm	F-32 第Ⅰ層
第31図 93	不明土 器		(口縁の形態) 口唇は丸い。 頸部の角は鈍 い。きつく屈 曲する。	外面…篋削り が主体。口縁 はナデが施さ れている。 内面…ナデ仕 上げ。	イ類…黒色鉍 物・ガラス質 の鉍物など。 胎土は精選。 焼成は堅緻。	外面…淡黄色 内面… ” 4～6 mm	M-23 第Ⅲ層
第31図 94	不明土 器		(口縁の形態) 口唇は丸い。 頸部の角は純 いが、きつく 屈曲する。	外面…頸下部 は篋削り、口縁 にナデと指圧 が観察できる 内面…ナデ仕 上げ。	ロ類…ガラス 質の鉍物・黒 色鉍物など。 胎土は精選。 焼成は堅緻。	外面…暗褐色 内面…暗灰色 5～10 mm	出土地 点不明
第31図 95	不明土 器		(口縁の形態) 口唇は丸い。 頸部の角は鈍 い。貼付けに よる肥厚口縁。	外面…篋削り が頸下部、口 縁はナデ仕上 げ。 内面…ナデ仕 上げ。	ロ類…ガラス 質の鉍物・黒 色鉍物など。 胎土は精選。 焼成は堅緻。	外面…黄褐色 内面… ” 肥厚部 7 mm 胴部 5～8 mm	表 採
第31図 96	不明土 器		(口縁の形態) 口唇は丸い。 頸部の角は鈍 い。	外面…器面が 破損するため 不明。 内面…ナデ仕 上げ。	ハ類…石灰質 砂粒・ガラス 質の鉍物・黒 色鉍物。 胎土は粗い。 焼成は悪く、 脆い。	外面…淡黄色 内面…黄褐色 4～7 mm	C-34 第Ⅰ層



図版 土器番号	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	器面調整の 特徴	胎土・混入物	色調・器厚	出土 地点
第31図 97	不明土 器		(口縁の形態) 口唇は丸い。 頸部の角は鈍 い。	外面…器面の 保持が悪いた め不明。 内面…ナデ仕 上げ。	ハ類…石灰質 砂粒・ガラス 質の鉱物・黒 色鉱物など。 胎土は粗い。 焼成は悪く、 脆い。	外面…黄褐色 内面… “ 4～5 mm	J-31 第Ⅲ層
第31図 98	不明土 器		(口縁の形態) 口唇は尖状。 頸部の角は鈍 い。	外面…器面の 保持が悪いた め不明。 内面…頸下部 は刷毛目。口 縁はナデを施 す。	ハ類…石灰岩 質砂粒・長石・ ガラス質の鉱 物など。 胎土は細かい 焼成は良く、 硬い。	外面…暗褐色 内面… “ 4～7 mm	表 採
第31図 99	不明土 器		(口縁の形態) 口唇は丸い。 頸部の角はか なりゆるく平 坦に近い。	外面…磨耗の ため不明。 内面… “	ハ類…黒色鉱 物・長石。 胎土は精選。 焼成は良く、 硬い。	外面…黄褐色 内面… “ 5～6 mm	E-37 第Ⅲ層
第31図 100	不明土 器		(口縁の形態) 口唇は平坦。 頸部の角は鈍 い。	外面…篋削り が主体で、頸 部に指圧を加 える。 内面…篋削り が頸部にみら れる他はナデ 仕上げ。	ロ類…ガラス 質の鉱物・黒 色鉱物など。 胎土は精選。 焼成は堅緻。	外面…暗黄色 内面…淡黄色 4～5 mm	I-32 第Ⅰ層
第31図 101	不明土 器		(口縁の形態) 口唇は丸い。 頸部の角は鈍 い。	外面…篋削り で仕上げる。 内面…ナデ仕 上げ。	イ類…ガラス 質の鉱物・黒 色鉱物など。 胎土は精選。 焼成は堅緻。	外面…淡黄色 内面… “ 5 mm	I-31 第Ⅰ層
第31図 102	不明土 器		口縁部を欠損 するが、残存 部から頸部に 該当する。	外面…口縁付 近と頸部は横 位の篋削り、 頸下部も篋削 り。 内面…斜位方 向の刷毛目。	イ類…ガラス 質の鉱物・黒 色鉱物など。 胎土は精選。 焼成は良く、 硬い。	外面…黄褐色 内面…橙褐色 4～6 mm	N-32 第Ⅰ層
第31図 103	その他 の土器		(口縁の形態) 口唇は丸い。 頸部で僅かに くびれる。	外面…篋削り が主体で、一 部にナデが口 縁近くにみら れる。 内面…篋削り	ロ類…ガラス 質の鉱物・黒 色鉱物・石灰 質微砂粒など。 胎土は細い。 焼成は良く、 硬い。	外面…黄褐色 内面… “ 5～7 mm	表 採

図版 土器番号	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	器面調整の 特 徴	胎土・混入物	色調・器厚	出土 地点
第31図 104	その他 の土器		(口縁の形態) 口唇は平坦。 頸部のくびれ は103よりき つい。	外面…ナデと 指圧痕が観察 できる。 内面… "	イ類…黒色鉍 物・ガラス質 の鉍物など。 胎土は精選。 焼成は堅緻。	外面…暗褐色 内面… " 0.8 ~ 1.0 cm	H-32 第Ⅲ層
第31図 105	その他 の土器		(口縁の形態) 口唇は平坦。 口縁から胴部 まではほぼ平坦 に近い。直口 状の口縁。	外面…篋削り で調整後ナデ 仕上げている 内面…ナデ仕 上げ。	ロ類…ガラス 質の鉍物・黒 色鉍物など。 胎土は精選。 焼成は良く、 硬い。	外面…橙褐色 内面… " 内外面の一部 は暗褐色を呈 する。 6 mm	D-30 第Ⅲ層
第31図 106	その他 の土器	口径 8.7	(口縁の形態) 口唇は丸い。 きつく外反す る、壺形土器 である。	外面…全体的 に器面が剥落 するが残存部 からナデ仕上 げか研磨が推 定。 内面…ナデが 主体であるが 一部に刷毛目 の痕跡あり。	ニ類…微細な 石英。 胎土は精選。 焼成は堅緻。	外面…暗褐色 内面… " 3 ~ 4 mm	C-25 第Ⅰ層
第31図 107	滑石滑 入土器	口径 24.0	(口縁の形態) 口唇は平坦。 内傾する。鉢 形土器。	外面…篋削り がナデ消され る。 内面… "	ホ類…滑石粒・ 黒色鉍物・長 石。 胎土は細かい 焼成は良く、 硬い。	外面…暗褐色 内面… " 7 ~ 9 mm	D-22 第Ⅱ層
第31図 108	滑石混 入土器		(口縁の形態) 口唇は平坦。 内傾する鉢形 土器。	外面…篋削り で調整後ナデ 仕上げ。 内面… "	ホ類…滑石粒・ ガラス質の鉍 物・黒色鉍物。	外面…黄褐色 内面…淡褐色 7 ~ 9 mm	C-20 第Ⅱ層
第31図 109	滑石混 入土器	口径 15 cm	(口縁の形態) 口唇は丸い。 外傾する碗形 土器。	外面…篋削り で仕上げる。 内面…刷毛目 がナデ消され ている。	ホ類…滑石粒・ ガラス質の鉍 物・黒色鉍物。 胎土は細かい。 焼成は良く、 硬い。	外面…暗褐色 内面… " 4 ~ 5 mm	C-24 第Ⅲ層
第31図 110	滑石混 入土器		(口縁の形態) 口唇は平坦。 残存する破片 からはほぼ内傾 する鉢もしくは 碗になるもの と考えられる。	外面…篋削り がナデ消され る。 内面… "	ホ類…滑石粒 ガラス質の鉍 物・黒色鉍物 胎土は細かい。 焼成は良く、 硬い。	外面…暗褐色 内面… " 5 ~ 7 mm	C-25 第Ⅱ層

図版 土器番号	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	器面調整の 特徴	胎土・混入物	色調・器厚	出土 地点
第31図 111	滑石混 入土器		土鍋の胴部破 片で台形状の 鏝をめぐらす。	外面…刷毛目 がナデ消され ている。 内面…ナデ仕 上げ。	ホ類…滑石粒・ 黒色鉱物・ガ ラス質の鉱物。 胎土は細かい。 焼成は良く、 硬い。	外面…暗褐色 内面…灰褐色 把手部 2 cm 胴部 8 ~ 9 mm	C-24 第Ⅲ層
第32図 112	蓋		蓋の縁端から 3.5 cmの箇所 で屈曲がみら れる。	内外面 縁部は篋削り で仕上げる。 内面縁端部は 磨耗する。	ハ類…石灰質 微砂粒・長石。 胎土は細かい。 焼成は良く、 硬い。	外面…淡黄色 内面…橙褐色 5 ~ 8 mm	H-31 第Ⅲ層
第32図 113	把手		指状の先端が 押し潰された 感じを受ける	両側面と表裏 面の大半は篋 削り後にナデ で仕上げる。	イ類…ガラス 質の鉱物・黒 色鉱物。 胎土は精選。 焼成は良く、 硬い。	全体的に橙褐 色を呈する。 把手部の厚さ 0.8 ~ 1.2 cm、 幅 1.3 ~ 1.7 cm 把手の付け根 部 3 ~ 4 mm	第 1 礫 群
第32図 114	把手		付け根部はス プーンの受け 皿と柄が破損 した感じを受 ける。	面側面と表裏 面のナデで仕 上げるが一部 に篋削りの痕 跡あり。	イ類…ガラス 質の鉱物・黒 色鉱物など。 胎土は細かい。 焼成は良く、 硬い。	全体的に黄褐 色を呈する。 一部は暗褐色 把手欠損部分 の厚さ 2.7 cm 付け根部分 0.6 ~ 1.9 cm	K-36 第Ⅱ層

第1表 土器観察一覧（底部・土製品）

版 土器番号	器種	法量 (cm)	器面調整	混入物・ 胎土・焼成	色調・器厚	出土 地点
第32図 115	底部 I a	底径 14.6	外面…篋削で仕上げる。 内面…ナデ仕上げ。 底面…篋削りが部分的にみられる他はナデで仕上げる。 内面に比べ雑に仕上げている。	ハ類…石灰岩砂粒・石英・長石。 胎土は細かく。 焼成は良く硬い。	外面・内面とも茶褐色、底面淡茶色。 立ち上がりの厚さ 7～8 mm 底面の厚さ 4～8 mm	E-28 第Ⅲ層
第32図 116	底部 I a	底径 13.4	外面…篋削りで仕上げる。 内面…ナデ仕上げ。 底面…篋削りが一部に観察できるが、他はナデ仕上げである。器面の保持は内外面と比べかなり悪い。	ロ類…ガラス質の鉱物・黒色鉱物など。 胎土は精選される。 焼成は堅緻。	外面・底面淡黄色。 内面黄褐色 立ち上がりの厚さ 4～5 mm 底面の厚さ 1～1.2 cm	H-30 第Ⅲ層
第32図 117	底部 I a		外面…篋削りで仕上げる。 内面…ナデ仕上げ。 底面…ナデ仕上げ。	イ類…ガラス質の鉱物・黒色鉱物・長石など。 胎土は精選される。 焼成は堅緻。	外面・底面黄褐色、 内面灰褐色。 立ち上がりの厚さ 1.2～1.4 cm 底面の厚さ 1.3～1.5 cm	L-34 第Ⅲ層
第32図 118	底部 I a		外面…篋削りで仕上げる。 内面…ナデで仕上げているが、一部に擦痕がナデ消されている。 底面…篋削りによって生じたとみられるステップがみられる。ナデで仕上げる。	ロ類…ガラス質の鉱物・黒色鉱物など。 胎土は細かい。 焼成は良く硬い。	外面・黄褐色、底面淡黄色、内面暗灰色。 立ち上がりの厚さ 0.9～1.2 cm 底面の厚さ 1.2～1.5 cm	14 Pit 第Ⅲ層
第32図 119	底部 I a	底径 13.2	外面…篋削りで仕上げる。 内面…擦痕が消えきっていない。 底部…全体的に器面の保持は悪いがナデかと推定される。	ロ類…ガラス質の鉱物・黒色鉱物など。 胎土は細かい。 焼成は良く硬い。	外面・底面は暗褐色で部分的に黄褐色を呈する。内面は灰色。 立ち上がりの厚さ 4～8 mm 底面の厚さ 0.7～1.0 cm	L-34 第Ⅲ層
第32図 120	底部 I a	底径 20.6	外面…篋削りで仕上げる。 内面…ナデ仕上げ。 底面…篋削りがナデ消されている。	ロ類…ガラス質の鉱物・黒色鉱物など。 胎土は細かい。 焼成は良く硬い。	外面・底面は黄褐色、内面淡黄色 立ち上がりの厚さ 1.3～1.5 cm 底面の厚さ 1.0～1.6 cm	K-39 第Ⅱ層



図版 土器番号	器種	法量 (cm)	器面調整	混入物・ 胎土・焼成	色調・器厚	出土 地点
第32図 121	底部 I a	底径 7 cm	外面…篋削りで仕 上げる。 内面…ナデ仕上げ。 底面…刷毛目およ び篋削りが消えき っていない。	ロ類…黒色鉱物 ・ガラス質の鉱物 など。 胎土は精選。 焼成は堅緻。	外面・底面は黄褐 色であるが、一部 は暗褐色を呈する。 内面は淡黄色。 立ち上がりの厚さ 5～7 mm 底面の厚さ 6～8 mm	C-24 第II層
第32図 122	底部 I a		外面…篋削りで仕 上げる。 内面…ナデ仕上げ。 底面…ナデ仕上げ。	イ類…ガラス質 の鉱物・黒色鉱 物など。 胎土は細かい。 焼成は良く硬い。	外面・底面は赤褐 色、内面は黄褐色 立ち上がりの厚さ 7～9 mm 底面の厚さ 1.2～1.3 cm	J-32 第III層
第32図 123	底部 I a		外面…ナデ仕上げ である。指圧痕あり。 内面…ナデ仕上げ。 底面…内面より丁 寧にナデで仕上げ る。	ロ類…長石・ガ ラス質の鉱物な ど。 胎土は細かい。 焼成は良く硬い。	外面茶褐色、底面 黄褐色、内面灰褐色 立ち上がり部の厚 さ 6～9 mm 底面の厚さ 7～9 mm	表採
第32図 124	底部 I b	底径 6.6	外面…ナデ仕上げで 指圧痕もみられる。 内面…ナデ仕上げ。 底面…ナデ仕上げ であるが、二条の 沈線がみられる。	ロ類…長石・ガ ラス質の鉱物な ど。 胎土は細かい。 焼成は良く硬い。	内外面・底面は黄 褐色。 立ち上がり部の厚 さ 5～7 mm 底面の厚さ 7～8 mm	第4 土坑
第32図 125	底部 I b (手捏土器)	底径 2.8	外面…篋削りがナ デ消されている。 内面…ナデ仕上げ。 底面…篋削りがナ デ消される。	ロ類…長石・ガ ラス質の鉱物な ど。 胎土は細かい。 焼成は良く硬い。	内外面・底面は暗 褐色。 立ち上がりの厚さ 3～8 mm 底面の厚さ 7～8 mm	E-29 第III層
第32図 126	底部 I b (手捏土器)		外面…篋削りがナ デ消されている。 内面…ナデ仕上げ。 底面…ナデ仕上げ。	ロ類…黒色鉱物 ・ガラス質の鉱 物など。 胎土は細かい。 焼成は良く硬い。	内外面黄褐色、底 面暗褐色。 立ち上がりの厚さ 3～6 mm 底面の厚さ 5～8 mm	表採
第32図 127	底部 I b	底径 12.2	外面…ナデ仕上げ。 内面…ナデ仕上げ。 底面…内面より丁 寧なナデで仕上げ る。	ロ類…ガラス質 の鉱物・長石な ど。 胎土は精選。 焼成は良く硬い。	外面・底面は橙色 底面灰白色 立ち上がりの厚さ 0.7～1.5 cm 底面の厚さ 1.0～1.2 cm	D-31 第I層

図版 土器番号	器種	法量 (cm)	器面調整	混入物・ 胎土・焼成	色調・器厚	出土 地点
第33図 128	底部Ⅱa	底径 11.8	外面…ナデで仕上げ るが、一部に篋 削りがみられる。 内面…ナデ仕上げ。 底面…篋削りがナ デ消されている。	ハ類…石英・長 石。 胎土は細かい。 焼成は良く硬い。	外面灰色、内面黄 褐色、底面淡黄色  立ち上がりの厚さ 5～9mm 底面の厚さ 3～7mm	E-24 第Ⅰ層
第33図 129	底部Ⅱa		外面…篋削り。 内面…ナデ仕上げ。 底面…器面の保持 が悪いが、残存 部よりナデが推定 される。	ロ類…黒色鉱物 ・ガラス質の鉱 物など。 胎土は細かい。 焼成は良く硬い。	外面黄褐色、内面 ・底面淡黄色 立ち上がりの厚さ 0.8～1.0cm 底面の厚さ 0.8～1.1cm	L-39 第Ⅲ層
第33図 130	底部Ⅱb	底径 8.4	外面…篋削りがナ デ消されている。 内面…ナデ仕上げ。 底面…篋削りがナ デ消されている。	ロ類…ガラス質 の鉱物・黒色鉱 物など。 胎土は精選。 焼成は堅緻。	内外面・底面とも 淡黄色 立ち上がりの厚さ 4～6mm 底面の厚さ 4～7mm	表採
第33図 131	底部Ⅱb		外面…篋削りを主 体とし、一部にナ デがみられる。 内面…ナデ仕上げ。 底面…ナデ仕上げ。	ロ類…ガラス質 の鉱物・黒色鉱 物など。 胎土は精選。 焼成は良く硬い。	内外面灰褐色、底 面淡黄色 立ち上がりの厚さ 3～8mm 底面の厚さ 4～9mm	I-30 第Ⅰ層
第33図 132	底部Ⅱb		外面・底面は器面 の保持が悪く、不 明。内面も器面 の保持が悪いが 残存部に篋削りの 痕跡あり。	ロ類…ガラス質 の鉱物・黒色鉱 物など。 胎土は細かい。 焼成は悪く、脆 い。	内外面・底面とも 黄褐色 立ち上がりの厚さ 4～8mm 底面の厚さ 5～7mm	B-24 第Ⅲ層
第33図 133	底部Ⅱb		外面…篋削りがナ デ消されている。 内面…ナデ仕上げ。 底面…篋削りがナ デ消されている。	ロ類…ガラス質 の鉱物・黒色鉱 物など。 胎土は精選。 焼成は良く硬い。	内外面・底面とも 淡黄色 立ち上がりの厚さ 0.7～1.1cm 底面の厚さ 7～9mm	第2 礫群
第33図 134	底部Ⅱb (手捏土器)	底径 2.4	内外面・底面とも ナデ仕上げ。	ロ類…黒色鉱物 ・ガラス質の鉱 物など。 胎土は細かい。 焼成は悪く、脆 い。	内外面・底面とも 暗褐色。 立ち上がりの厚さ 7～8mm 底面の厚さ 5～6mm	M-37 第Ⅱ層



図版 土器番号	器種	法量 (cm)	器面調整	混入物・ 胎土・焼成	色調・器厚	出土 地点
第33図 135	底部Ⅱb (手捏土器)	底径 3.0	内外面・ナデ仕上げ。 底面…ナデによって仕上げている。 沈線が二条みられるが、その中の短い線は篋削りによって生じたステップ状のものである。	イ類…石英・長石。 胎土は細かい。 焼成は良く硬い。	内外面・底面とも黄褐色 立ち上がりの厚さ 6～9mm 底面の厚さ 4～8mm	表採
第33図 136	底部Ⅲa		外面…篋削りで仕上げるが、特に底面からの立ち上がり部を篋削りで強調する。 内面…篋削りがナデ消されている。 底面…刷毛目は篋削りで消えていない。	ロ類…ガラス質の鉱物・黒色鉱物など。 胎土は細かい。 焼成は良く硬い。	内外面淡黄色、底面黄褐色 立ち上がりの厚さ 0.8～1.5cm 底面の厚さ 0.8～1.5cm	D-23 第I層
第33図 137	底部Ⅲa	底径 12.6	外面…ナデ仕上げ。 底面からの立ち上がり部に指圧痕を残す。 内面…ナデ仕上げ。 底面…ナデ仕上げ。	ハ類…ガラス質・黒色鉱物など。 胎土は細かい。 焼成は良く硬い。	内外面・底面とも黄褐色 立ち上がりの厚さ 0.4～1.0cm 底面の厚さ 0.8～1.1cm	第1 礫群
第33図 138	底部Ⅲa		内外面・底面とも器面の保持が悪いため不明。	ハ類…石英・長石。 胎土は細かい。 焼成は悪く脆い。	内外面・底面とも黄褐色。 立ち上がりの厚さ 3～7mm 底面の厚さ 0.7～1.0cm	K-39 第I層
第33図 139	底部Ⅲa		内外面・底面とも器面の保持が悪く不明である。	ロ類…ガラス質の鉱物・長石、黒色鉱物 胎土は細かい。 焼成は悪く脆い。	内外面・底面とも黄褐色 立ち上がりの厚さ 0.4～0.9cm 底面の厚さ 0.8～1.0cm	出土地 点不明 第Ⅲ層
第33図 140	底部Ⅲa		外面…ナデ仕上げであるが、底面からの立ち上がり部に指圧痕を残す。 内面…ナデ仕上げ。 底面…ナデ仕上げ。	ハ類…石英・長石。 胎土は細かい。 焼成は良く硬い。	内外面・底面とも淡黄色 立ち上がりの厚さ 0.8～1.1cm 底面の厚さ 1.2～1.4cm	B-26 第Ⅲ層

図版 土器番号	器種	法量 (cm)	器面調整	混入物・ 胎土・焼成	色調・器厚	出土 地点
第33図 141	底部Ⅲa	底径 6.2	外面…篋削りで仕上げる。 内面…ナデによる磨きで滑沢を呈する。 底面…篋削りがナデ消されている。	イ類…ガラス質の鉍物・黒色鉍物など。 胎土は精選。 焼成は堅緻。	内外面・底面とも暗褐色  立ち上がりの厚さ 6～9mm 底面の厚さ 0.6～1.0cm	E-30 第Ⅲ層
第33図 142	底部Ⅲa		内外面・底面の仕上げは141と同じである。 141と同一個体の破片である。	イ類…ガラス質の鉍物・黒色鉍物など。 胎土は精選。 焼成は堅緻。	外面・底面とも暗褐色、内面灰褐色。 立ち上がりの厚さ 5～9mm 底面の厚さ 0.7～1.1cm	J-32 第Ⅲ層
第33図 143	底部Ⅲa		外面…ナデで仕上げである。底面からの立ち上がり部に指圧痕を残す。 内面…擦痕がナデ消されている。 底面…篋削りがナデ消されている。	ロ類…ガラス質の鉍物・黒色鉍物など。 胎土は精選。 焼成は良く硬い。	内外面・底面黄褐色  立ち上がりの厚さ 0.7～1.1cm 底面の厚さ 0.6～1.1cm	H-31 第Ⅲ層
第33図 144	底部Ⅲa		外面…ナデで仕上げる。底面からの立ち上がり部に指圧痕を残す。 内面…擦痕がナデ消されている。 底面…篋削りがナデ消されている。	ロ類…長石・ガラス質など。  胎土は細かい。 焼成は良く硬い。	外面暗褐色、内面灰白色、底面淡黄色。  立ち上がりの厚さ 7～9mm 底面の厚さ 6～9mm	N-39 第Ⅱ層
第33図 145	底部Ⅲa	底径 10.6	外面…篋削りで仕上げる。一部にナデあり。 内面…器面の保持がかなり悪いため不明。 底面…ナデ仕上げ一部に葉痕あり。	ロ類…ガラス質の鉍物・黒色鉍物など。 胎土は精選。 焼成は良く硬い。	外面・底面・暗褐色、内面灰色。  立ち上がりの厚さ 1.2～1.6cm 底面の厚さ 1.3～1.6cm	第1 礫群
第33図 146	底部Ⅲb	底径 13.2	外面…ナデ仕上げ。底面からの立ち上がり部に指圧痕を残す。 内面…ナデ仕上げ。 底面…器面の保持が悪いため不明。	ロ類…長石・ガラス質の鉍物・黒色鉍物など。 胎土は精選。 焼成は良く硬い。	外面暗褐色、内面淡黄色、底面黄褐色  立ち上がりの厚さ 0.5～1.2cm 底面の厚さ 1.0～1.3cm	C-24 第Ⅲ層



図版 土器番号	器種	法量 (cm)	器面調整	混入物・ 胎土・焼成	色調・器厚	出土 地点
第33図 147	底部Ⅲb		外面…篋削り。一部に指圧痕とナデがみられる。 内面…ナデ仕上げ。 底面…篋削りがナデ削されている。	ロ類…ガラス質の鉾物・黒色鉾物など。 胎土は精選。 焼成は良く硬い。	外面・底面淡黄色、 内面赤褐色。 立ち上がりの厚さ 7～9mm 底面の厚さ 0.8～1.1cm	K-33 第Ⅲ層
第33図 148	底部Ⅲb	底径 14.6	外面…篋削りが主体である。一部にナデがみられる。 内面…ナデ仕上げ。 底面…木葉圧痕	ロ類…長石など。 胎土は精選。 焼成は良く硬い。	外面暗褐色、底面 赤褐色、内面淡黄色 立ち上がりの厚さ 1.2～1.5cm 底面の厚さ 0.8～1.5cm	D-21 第Ⅱ層
第34図 149	底部Ⅲb	底径 8.0	外面…ナデ仕上げが、一部に篋削りの痕跡あり。 内面…ナデ仕上げ。 底面…ナデ仕上げ。	ロ類…長石など。 胎土は精選。 焼成は良く硬い。	内外面・底面とも 淡黄色 立ち上がりの厚さ 0.5～1.0cm 底面の厚さ 1.3～1.6cm	N-39 第Ⅲ層
第34図 150	底部Ⅳ	底径 10.8	内外面ともナデ仕上げ。 高台裏は篋削、畳付けは隅丸の三角形状を呈し、高台内側は5mm前後の半円形の溝がみられる。	ロ類…黒色鉾物・ガラス質の鉾物など。 胎土は精選。 焼成は良く硬い。	内外面・底面とも 黄褐色 立ち上がりの厚さ 5～8mm 底面の厚さ(溝を含む)1.0～1.2cm 高台部の厚さ (底面を含む) 1.3～1.5cm 高台部の幅 0.9～1.2cm	E-24 第Ⅲ層
第34図 151	底部Ⅳ	底径 7.6	外面は器面の保持が悪いため不明。 内面…ナデ仕上げ。 高台裏は篋削り、畳付けは篋削りがナデ消されている。	ロ類…黒色鉾物・ガラス質の鉾物など。 胎土は細かい。 焼成は良く硬い。	外面黄褐色。内面 底面淡黄色 立ち上がりの厚さ 0.6～1.0cm 底面の厚さ 0.7～1.2cm 高台部の厚さ 1.4～1.8cm 高台部の幅 0.8～1.2cm	I-32 第Ⅲ層
第34図 152	底部Ⅴ	底径 8.2	外面…器面の保持が悪いため不明。 内面…ナデ仕上げ。 底面…ナデ仕上げ。	ロ類…ガラス質の鉾物・黒色鉾物など。 胎土は細かい。 焼成は良く硬い。	内外面とも灰褐色 底面暗褐色 立ち上がりの厚さ 5～7mm 底面の厚さ 0.7～1.3cm	D-31 第Ⅲ層

図版 土器番号	器種	法量 (cm)	器面調整	混入物・ 胎土・焼成	色調・器厚	出土 地点
第34図 153	底部 V		内外面・底面とも ナデ仕上げ。	へ類…石英・長 石。 胎土は細かい。 焼成は良く硬い。	外面橙褐色、内面 暗褐色、底面淡黄 褐色。 立ち上がりの厚さ 0.5 ~ 1.2 mm 底面の厚さ 2.0 ~ 2.1 cm	表採
第34図 154	底部 VI		内外面・底面とも ナデ仕上げ。	ロ類…ガラス質 の鉱物・黒色鉱 物など。 胎土は精選。 焼成は良く硬い。	外面・底面は淡黄 色、内面暗灰色。 立ち上がりの厚さ 5 ~ 6 mm 底面の厚さ 2.2 ~ 2.7 cm	E-30 第III層
第34図 155	底部 VII		内面…篋削り後に ナデで仕上げる。 底面…木葉圧痕	ロ類…ガラス質 の鉱物・黒色鉱 物など。 胎土は精選。 焼成は良く硬い。	内面淡褐色、底面 黄褐色。 底面の厚さ 0.7 ~ 1.2 cm	I-33 第II層
第34図 156	底部 VII		内面…器面の保持 が悪いため不明。 底面…木葉圧痕	ハ類…ガラス質 の鉱物・黒色鉱 物など。 胎土は精選。 焼成は良く硬い。	内面・底面橙褐色。 底面の厚さ 0.4 ~ 0.8 cm	H-37 第III層
第34図 157	底部 VII		内面…器面がかな り磨耗するため不 明。 底面…木葉圧痕	ロ類…ガラス質 の鉱物など。 胎土は精選。 焼成は良く硬い。	内面淡黄色、底面 灰白色。 底面の厚さ 0.7 ~ 0.8 cm	C-22 第I層
第34層 158	底部 VII		内面…器面の保持 は悪いが、残存部 よりナデが考えら れる。 底面…幾可学様に 刷毛目で仕上げる。	ロ類…ガラス質 の鉱物・黒色鉱 物など。 胎土は細かい。 焼成は良く硬い。	内面暗褐色、底面 黒褐色。 底面の厚さ 5 ~ 7 mm	H-31 第III層
第34図 159	底部 VII		外面…ナデ仕上げ。 内面…刷毛目	ニ類…アズキ色の 円礫粒、長石など。 胎土瓦質。 焼成は堅緻。	内外面とも橙色 立ち上がりの厚さ 0.8 ~ 1.3 cm	表採
第34図 160	土製品		外面…三条の凸帯 を有し、ナデ仕上 げかと推定される。 内面…磨耗する。	ハ類…石英・長 石など。 胎土は精選。 焼成は良く硬い。	内外面とも灰褐色 器厚 1 ~ 9 mm	H-34 第III層




図版 土器番号	器種	法量 (cm)	器面調整	混入物・ 胎土・焼成	色調・器厚	出土地 地点
第34図 161	土製品		内外面…篋削りが ナデ消されている。	ロ類…ガラス質 の鉱物など。 胎土は細かい。 焼成は良く硬い。	外面暗褐色、内面 黄褐色。 器厚 5～8mm	第4 土壌
第34図 162	土製品		内外面とも器面の 保持が悪いため不 明。	ハ類…石灰質砂 粒・黒色鉱物・ ガラス質の鉱物 など。 胎土は細かい。 焼成は良く硬い。	外面黄褐色、内面 淡黄色。 器厚 7～9mm	D-24 第I層
第34図 163	土製品		内外面ともナデ仕 上げ。	ハ類…石灰質砂 粒・黒色鉱物など。 粒土は細かい。 焼成は良く硬い。	外面灰褐色、内面 淡黄色。 器厚 0.8～1.0cm	第1 礫群

第2表 各器種と出土地点との関係

器種	出土地点	第1 礫群	第2 礫群	第3 礫群	第1 土壌	第2 土壌	第3 土壌	第4 土壌	表採	遺物包 含層	計
	I II III	A B									
壺形	I			1					3	14	18
	II	1							1	8	10
	III									2	2
鉢形	I									3	3
	II									13	13
	III	2							2	16	20
碗形	A	2						1	3	11	17
	B							1			1
手捏土器										5	5
不明土器								1	2	10	13
その他の土器									1	3	4
滑石混入土器										5	5
計		5		1				3	12	90	111



第3表 鉢形土器 鉢Ⅲに付随するコブ状把手の形態と出土状況

コブ状の形態	出土地点	第1礫群	第2礫群	第3礫群	第1土壙	第2土壙	第3土壙	第4土壙	表採	遺物包含層	計
a 		2						1	6	14	23
b 		1						1	1	10	13
c 										1	1
不明 (注)								2	4	7	13
計		3						4	11	32	50

(注) 不明破片の残存する部位から推定するとほぼaタイプに属するものが10点、他は困難なもの。

※ a 縦位方向の貼付け      b 円形状の貼付け  
c 横位方向の貼付でいずれも口唇を水平になるものと想定して分類。

別表A 土器地点別出土状況

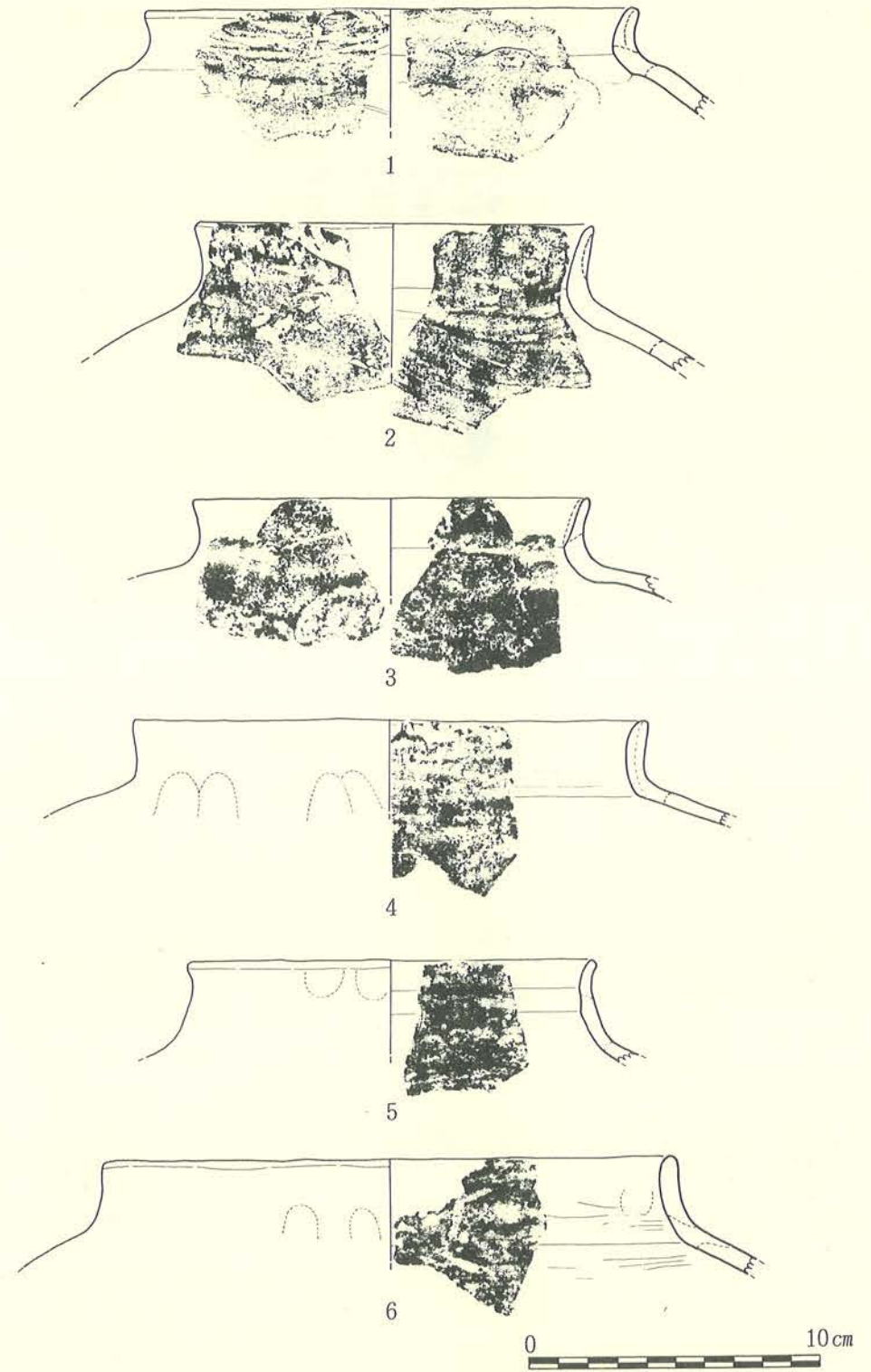
土器各部位	出土地点	第1礫群	第2礫群	第3礫群	第1土壙	第2土壙	第3土壙	第4土壙	表採	遺物包含層	計
口縁部		17	10	9		1	8	52	121	1,754	1,972
胴部		248	127	168	28	60	97	792	1,815	31,617	34,952
底部		14	6		2	3	3	8	65	911	1,012
計		279	143	177	30	64	108	852	2,001	34,282	37,936

別表B 碗形土器 碗A (肥厚口縁) の出土状況

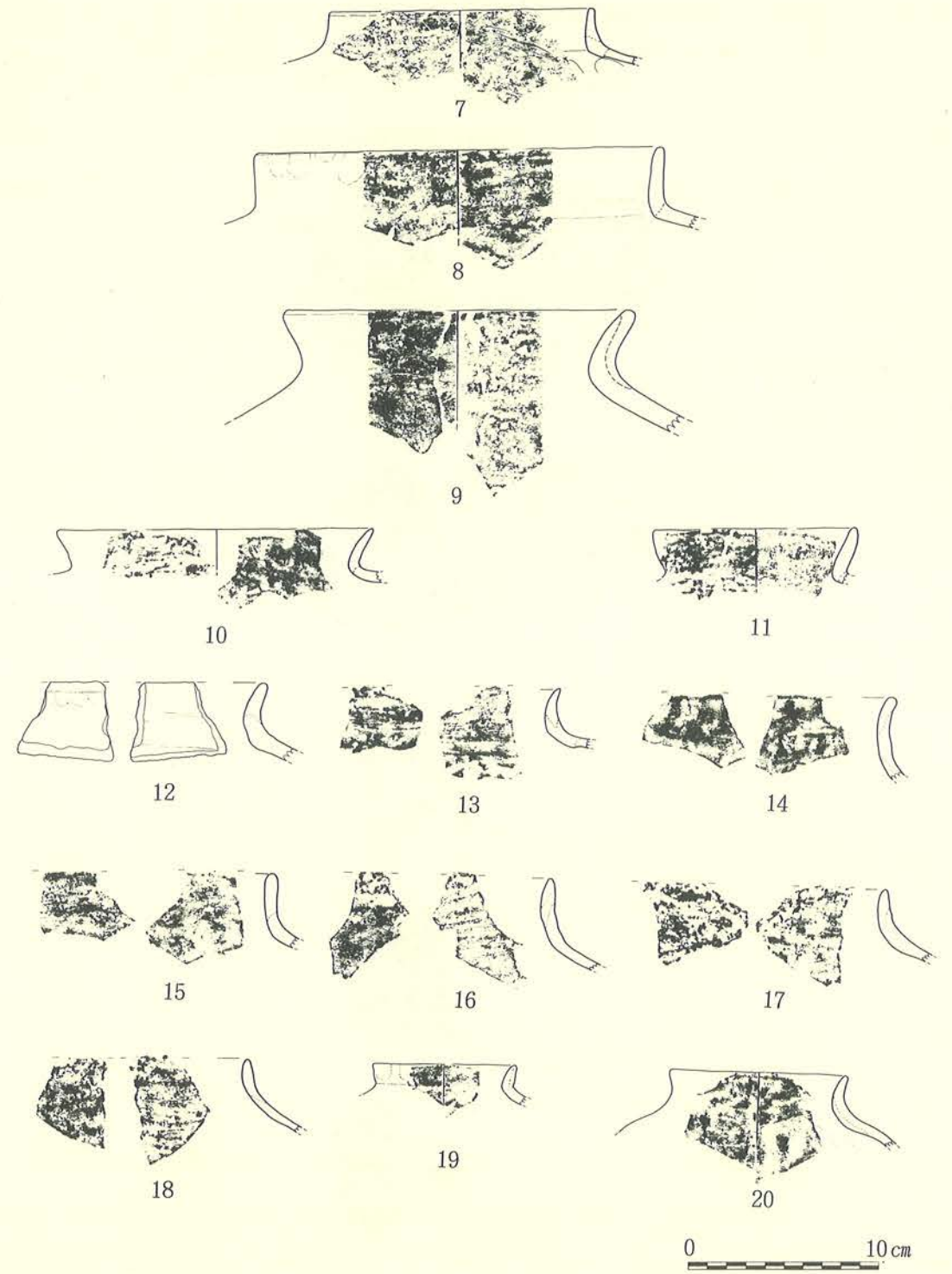
肥厚の形態	出土地点	第1礫群	第2礫群	第3礫群	第1土壙	第2土壙	第3土壙	第4土壙	表採	遺物包含層	計
丸味のあるもの		1						1	9	19	30
角っぽいもの		2						1	5	12	20
計		3						2	14	31	50

(金城亀信)

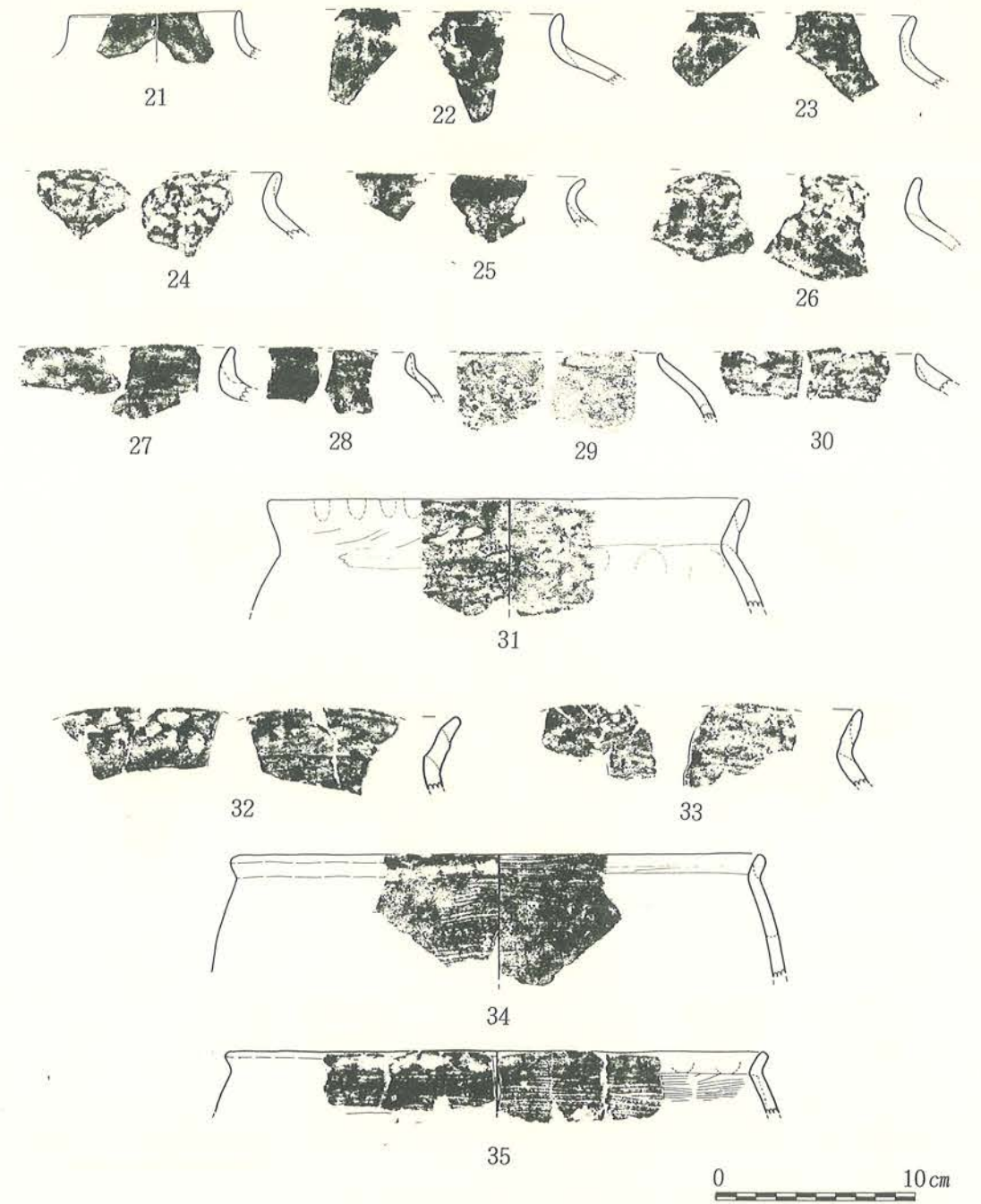




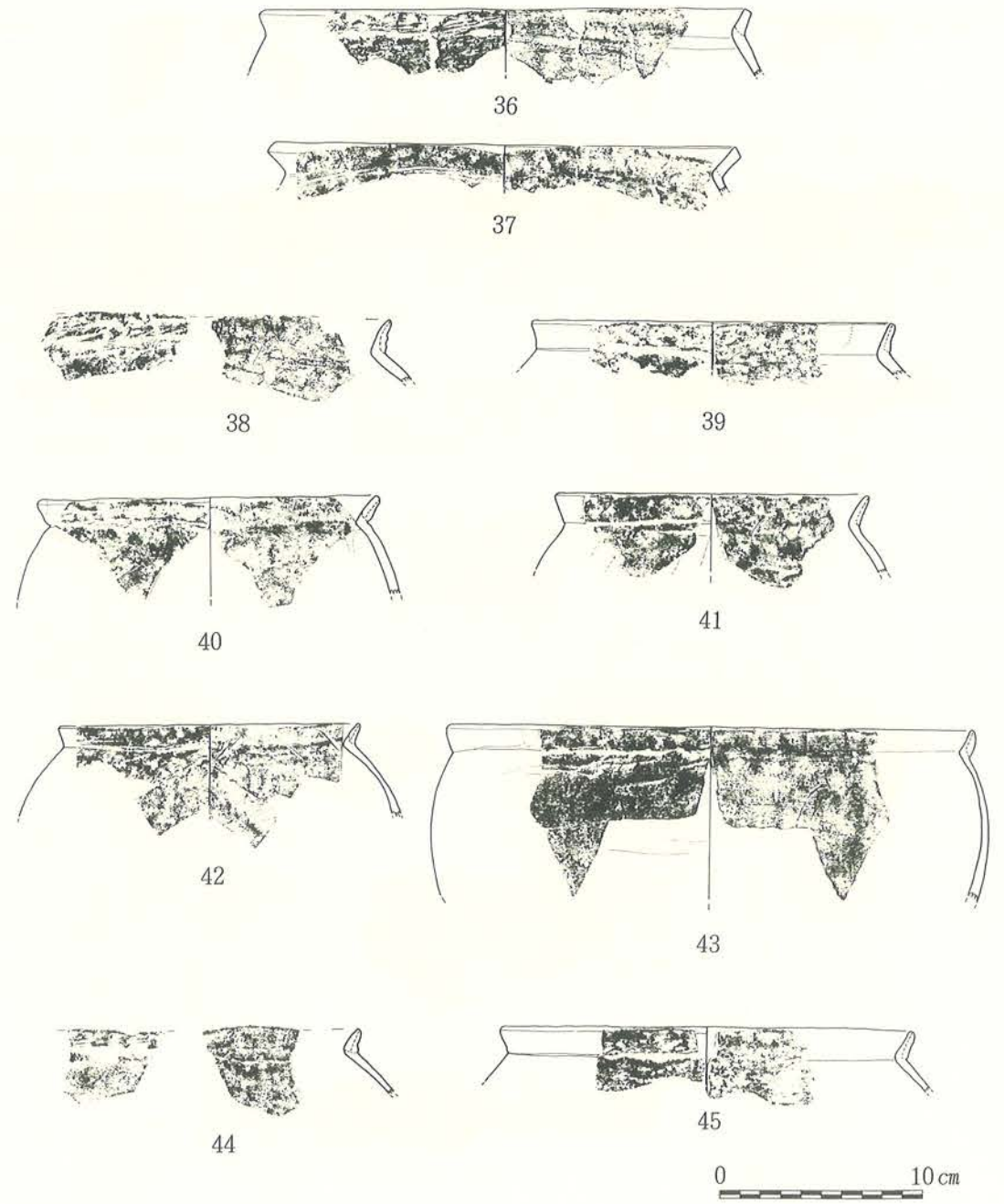
第 25 图 壺形土器



第 26 图 壺形土器

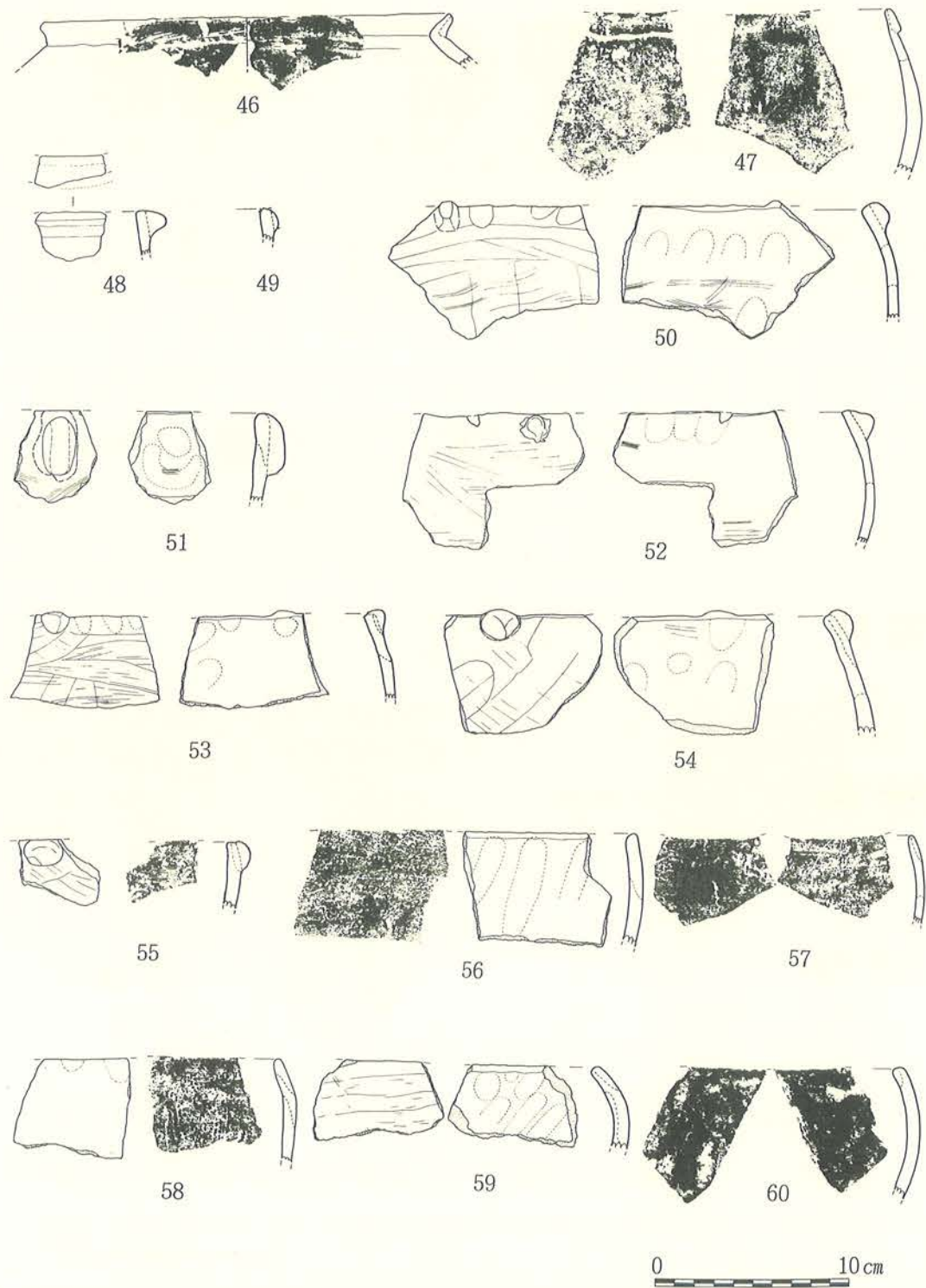


第 27 図 壺形土器・鉢形土器

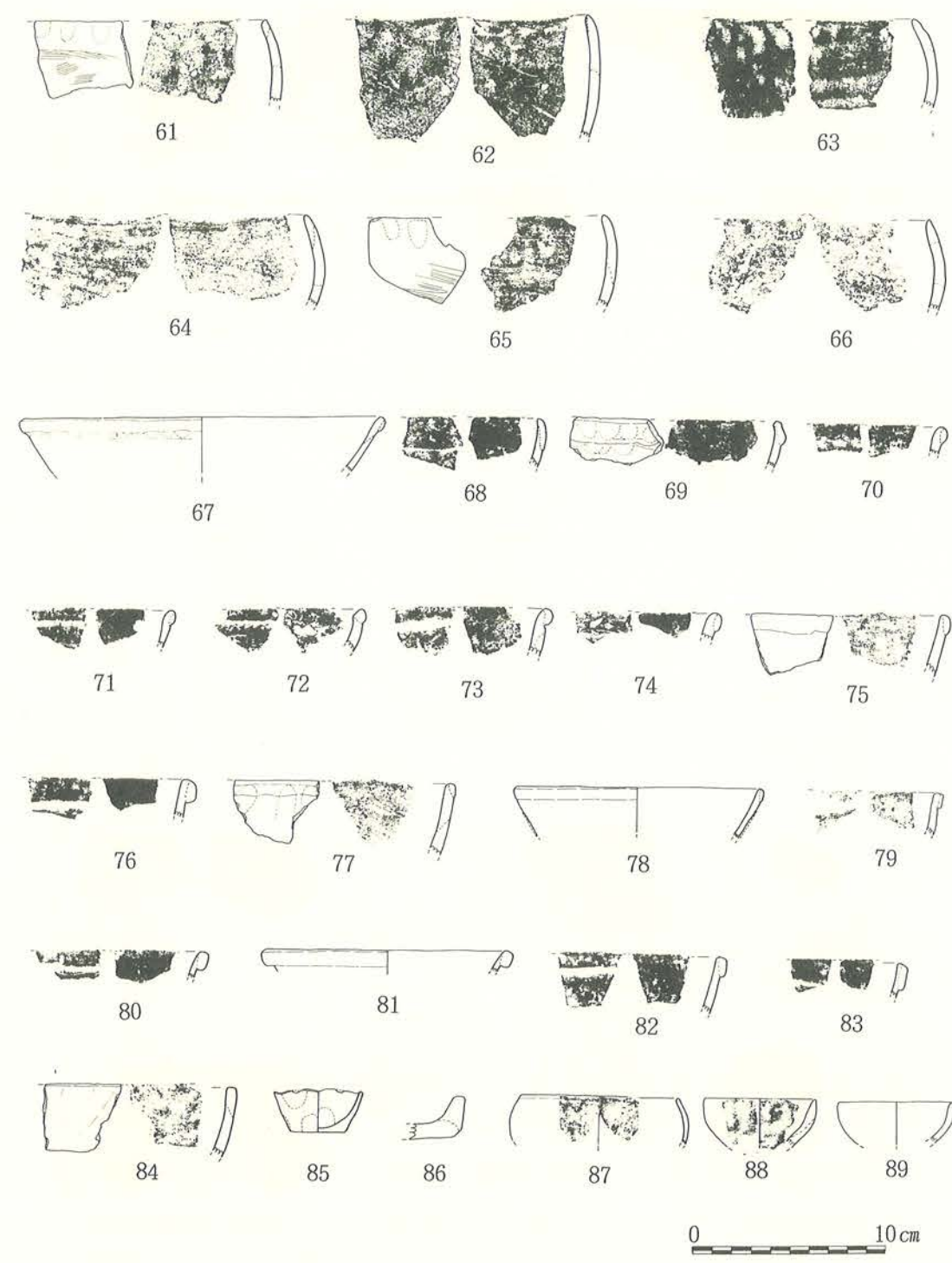


第 28 図 鉢形土器

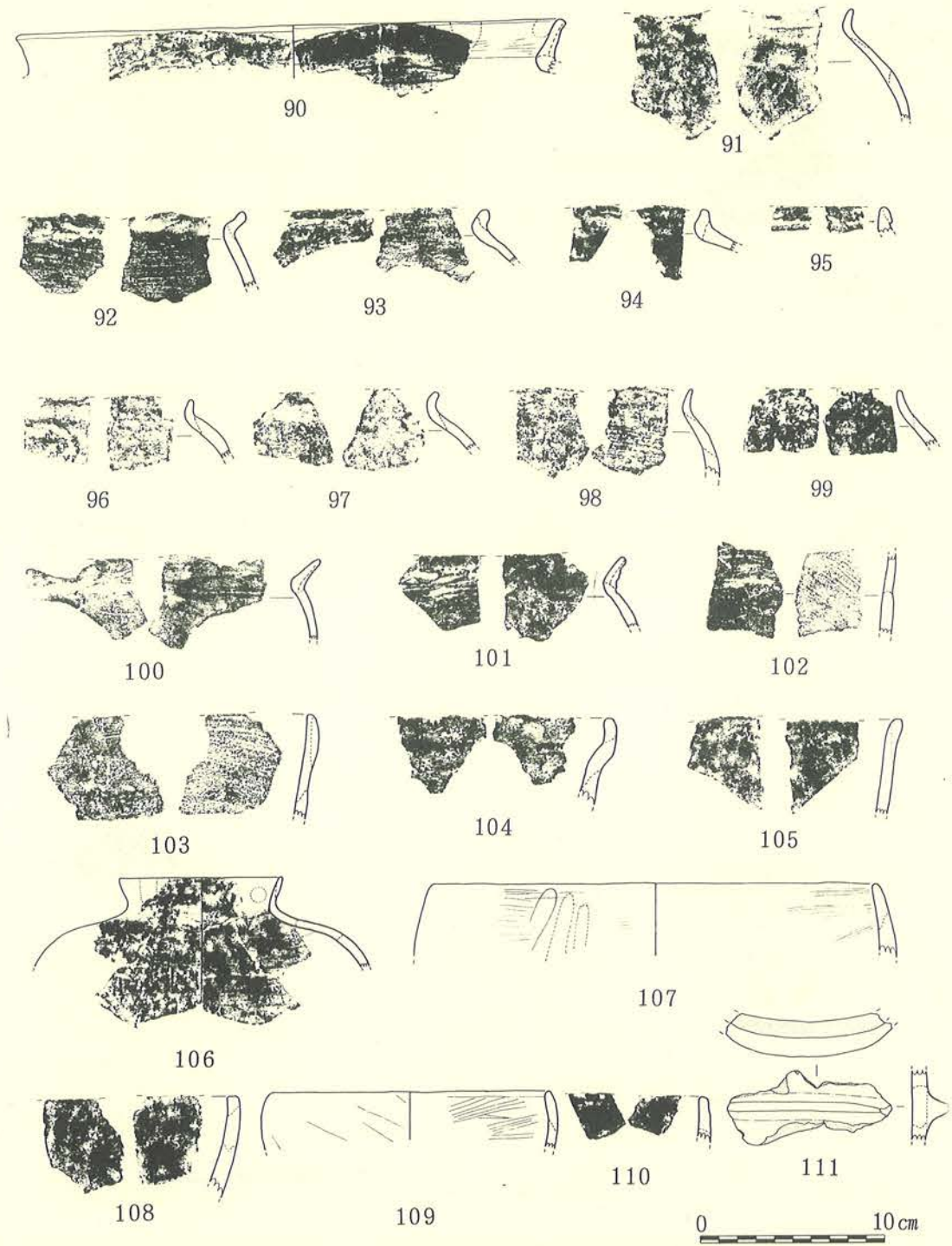




第 29 図 鉢形土器

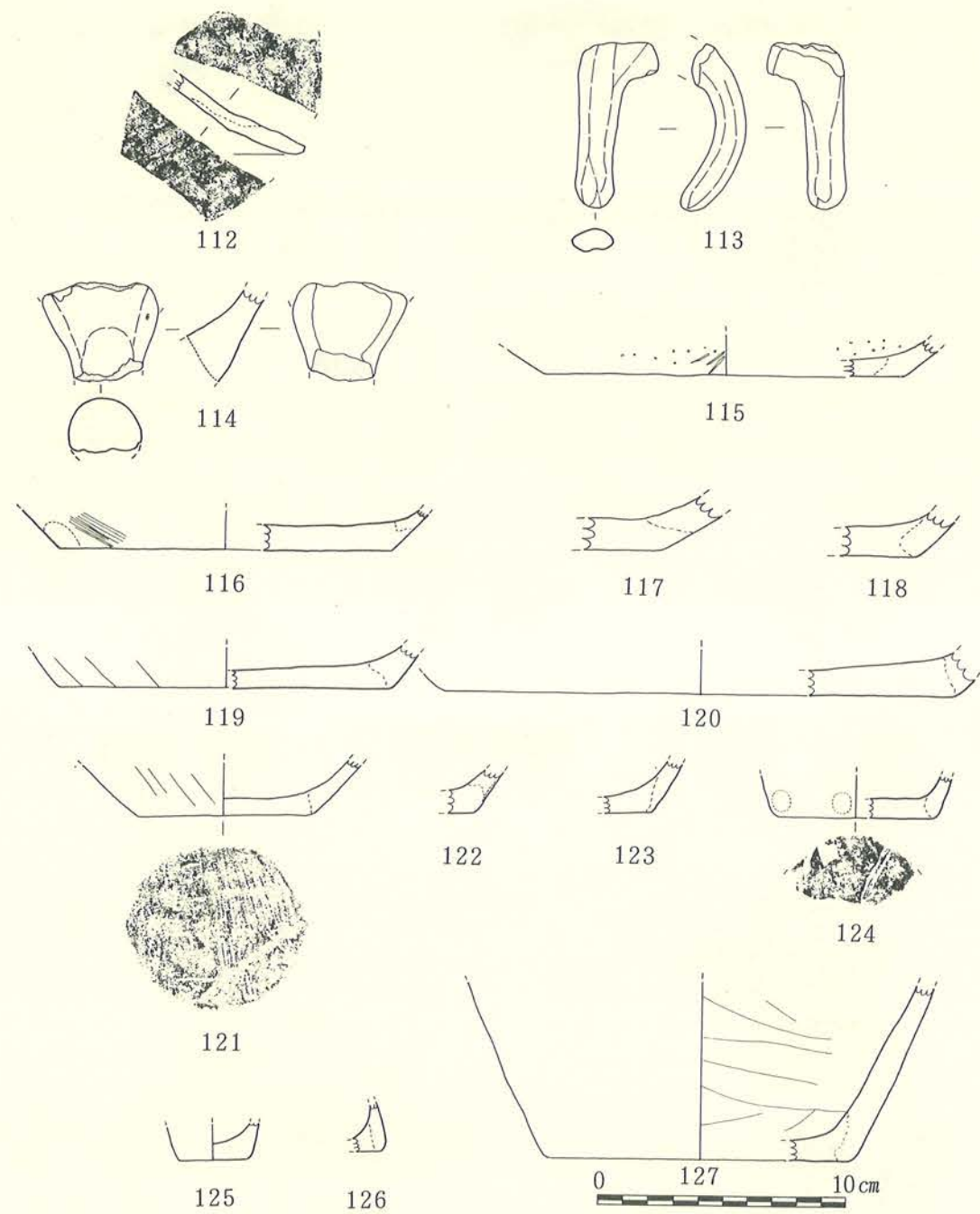


第30図 鉢形土器・碗形土器・手捏土器



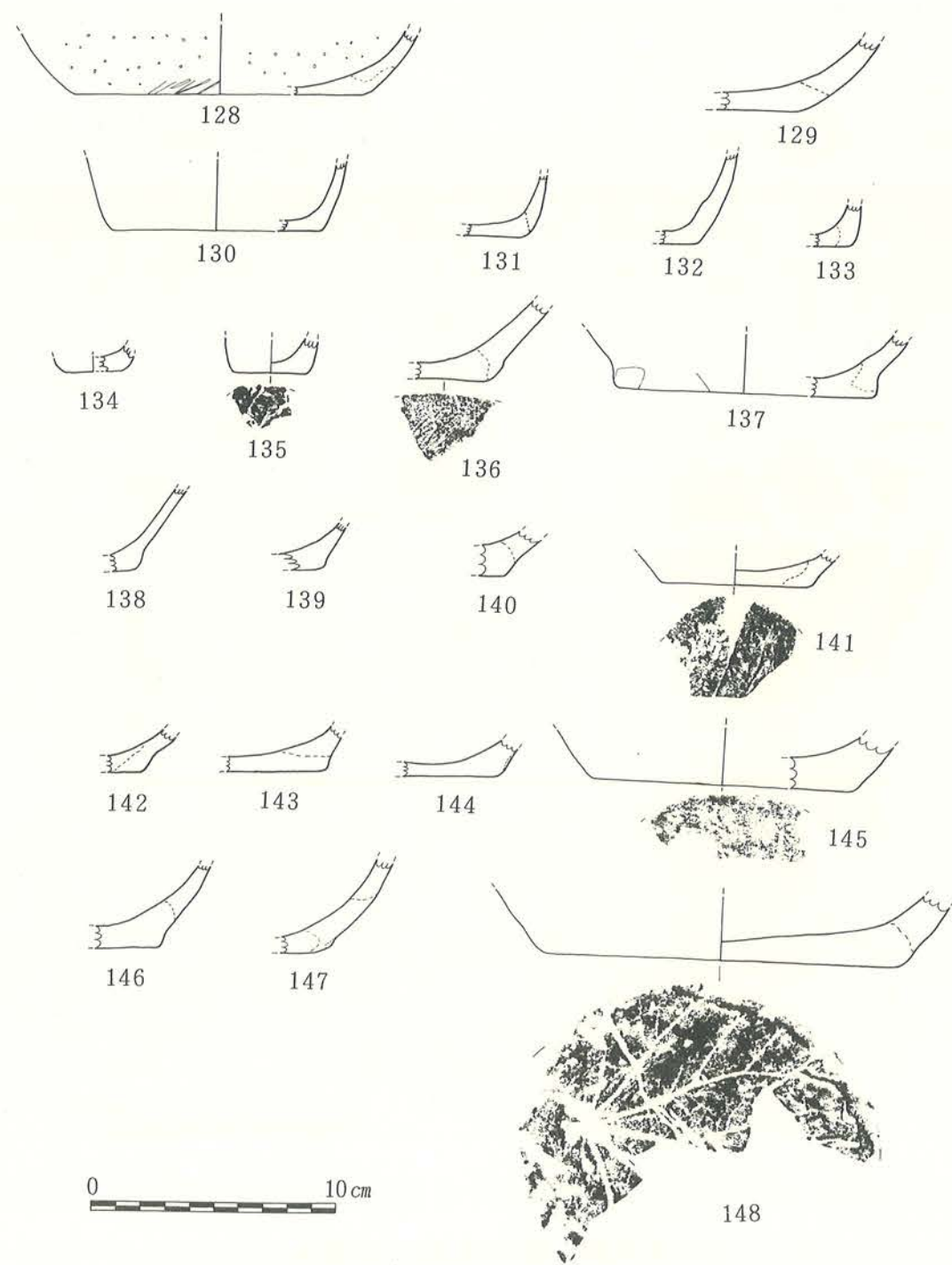
第31図 不明土器・その他の土器・滑石混入土器



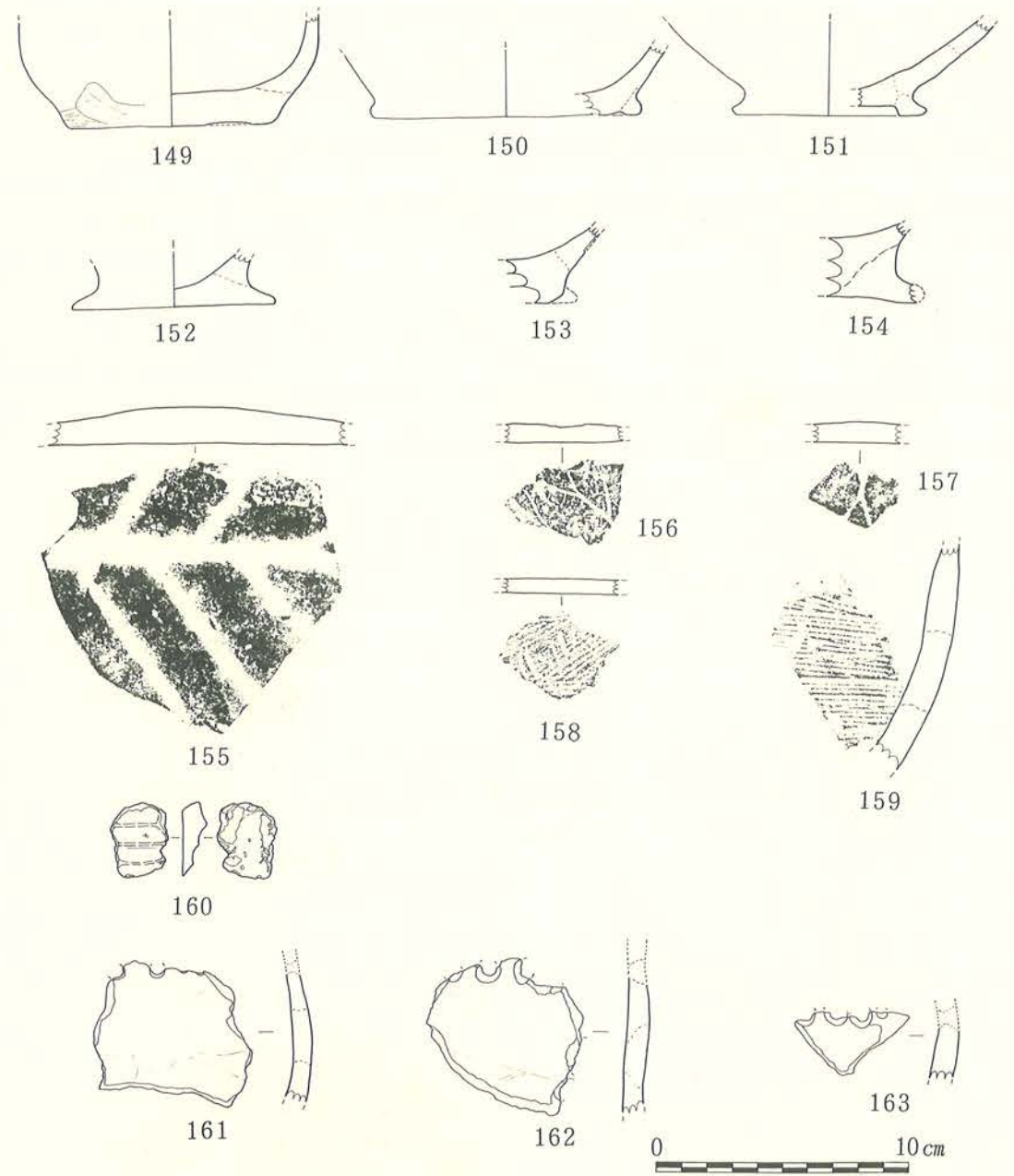


第 32 图 土器 (盖 · 把手 · 底部)

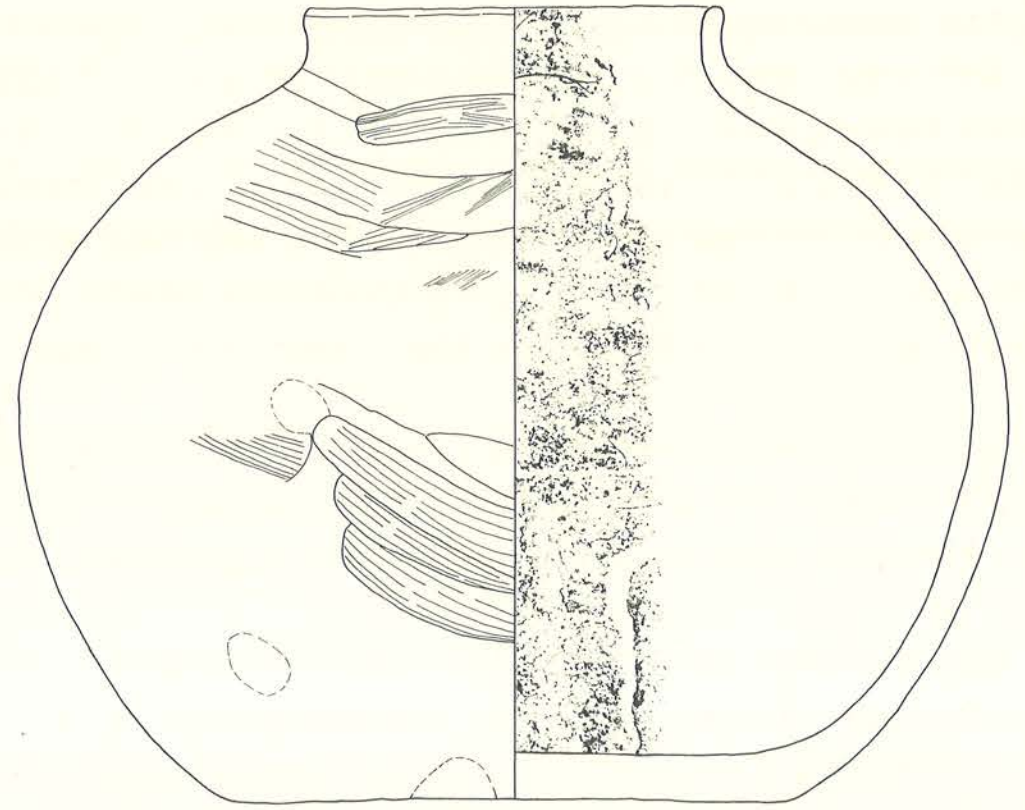




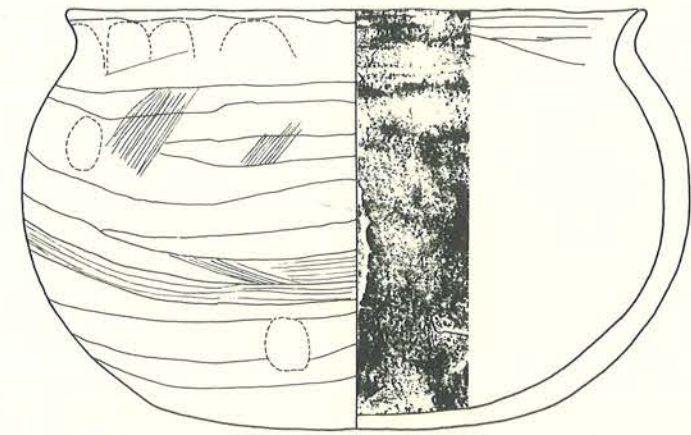
第 33 图 土器 (底部)



第34图 土器(底部)・土製品



1



2



第35図 参考資料 (久米島下地原洞穴遺跡採集の土器)

#### 10. 炭火米・炭化麦

本県での米作・麦作についての始原が何時の時代まで遡れるかということは近年弥生文化の波及の問題とも絡んでとくに学界で注目されてきている。グスク時代にもなるとすでに米作・麦作が定着し普及していたことはもはや周知の事実となっているが、今回の調査でも遺構や遺物包含層中から多量の炭化米及麦粒が検出されている。これらの炭化米・麦粒は、発掘の際遺構の埋土や黒褐色の遺物包含層の土を80袋（1袋の重量が7～9kg）程収納し、発掘終了後資料室で水洗法によって選別採取したものである（第1表）。

採取した炭化米及麦については、本県における農耕文化の歴史を知る基礎資料であることに鑑み、その一部を佐藤敏也氏にお願いして計測調査をしていただいた。本報告では氏が行なった計測表を掲載しその方面の研究資料に付することにした（第2～8表）。

前述の方法で採取した炭化米及麦粒は完形・破損を含め計581粒である。そのうち計測調査をしていただいた資料は、H-37第Ⅲ層炭化米28粒・麦2粒、H-32第Ⅲ層炭化米26粒・麦4粒、グリッドを定めず全遺物包含層炭化米30粒・麦7粒である（第4表）。なお、計測表における計測値の単位は耗に統一しゴチック体数値は平均値を示している。記載の順序は左から資料No、粒長、粒巾、粒厚、長巾比（長×巾）、備考の順となっている。

（ 当 真 嗣 一 ）



第 1 表 炭化米及麦粒集計表

出土地点	種類 残存状況	炭化米(粒)		炭化麦(粒)		計
		完形	破損	完形	破損	
第1号	土層	11	22	0	9	42
第2号	〃	8	17	1	5	31
第3号	〃	7	23	0	5	35
第4号	〃	1	2	0	0	3
No.26	柱穴	3	1	0	0	4
No.31	〃	1	3	0	0	4
D-29	第Ⅲ層	3	0	0	0	3
E-30	〃	2	2	1	3	8
F-30	〃	2	6	1	1	10
H-30	〃	20	19	0	2	41
E-31	〃	0	3	0	0	3
H-31	〃	11	17	1	6	35
H-32	〃	40	37	4	9	91
H-33	〃	1	8	0	0	9
H-37	〃	35	30	2	5	72
L-36	〃	3	0	0	0	3
グリッドを定めず 遺物包含層		81	90	7	10	188
合計		229	280	17	55	581
		509		72		581
米・麦の比率		88%		12%		100%

第 2 表 H-37 Grid 第三層検出の炭化米

No.	(粒長) L ㎜	(粒幅) B ㎜	(粒厚) Thi ㎜	L/B	L×B	remarks
1	4.70	2.60	1.70	1.80	12.22	
2	4.70	2.80 (3.50)	1.80	1.67	13.16	焼けぶくれ
3	4.60	2.50	1.90	1.84	11.50	疵 米
4	4.50	3.20	2.00	1.40	14.40	
5	4.50	2.60	2.10	1.73	11.70	
6	4.40	2.50	1.90	1.76	11.00	
7	4.30	2.20	1.40	1.95	9.46	未熟米
8	4.30	2.20	2.00	1.95	9.46	
9	4.20	3.00	2.00	1.40	12.60	
10	4.20	3.00	2.10	1.40	12.60	疵 米
小計	44.40	26.60	18.90	16.90	118.10	
11	4.20	2.70	1.80	1.55	11.34	
12	4.20	2.50	1.70	1.68	10.50	
13	4.20	2.50	1.70	1.68	10.50	疵 米
14	4.20	2.20	1.60	1.90	9.24	未熟米
15	4.10	2.50	1.90	1.64	10.25	
16	4.10	2.50	1.80	1.64	10.25	
17	4.10	2.40	1.90	1.70	9.84	
18	4.10	2.40	2.00	1.70	9.84	疵 米
19	4.00	2.60	2.30	1.53	10.40	厚さ焼け太り
20	4.00	2.40	1.60	1.66	9.60	
小計	41.20	24.70	18.30	16.68	101.76	
21	3.90	2.50	2.00	1.56	9.75	胴切れ
22	3.90	2.50	1.40	1.56	9.75	未熟疵米
23	3.80	2.50	1.50	1.52	9.50	疵 米
24	3.80	2.40	1.70	1.58	9.12	
25	3.80	2.30	1.60	1.65	8.74	
26	3.70	2.60	1.90	1.42	9.62	下端破損
27	3.60	2.40	1.60	1.50	8.64	疵 米
28	3.60	2.40	1.50	1.50	8.64	
小計	30.10	19.60	13.20	12.29	73.76	
合計	115.70	70.90	50.40	(1.64) 45.87	(10.49) 293.62	
平均	4.13	2.53	1.80	1.63	10.45	

第 3 表 H—32 Grid 第Ⅲ層検出の炭化米

No.	L	B	Thi	L/B	L × B	remarks
1	5.00	2.90	2.00	1.72	14.50	
2	4.70	2.70	2.00	1.74	12.69	疵 米
3	4.70	2.30	2.00	2.04	10.81	疵 米
4	4.50	2.80	1.70	1.60	12.60	
5	4.40	2.80	2.10	1.57	12.32	疵 米
6	4.30	2.80	2.10	1.53	12.04	
7	4.30	2.80	2.00	1.53	12.04	
8	4.30	2.70	1.70	1.59	11.61	
9	4.30	2.40	1.60	1.79	10.32	疵 米
10	4.20	3.00	2.00	1.40	12.60	焼けぶくれ
小計	44.70	27.20	19.20	16.51	121.53	
11	4.20	2.90	1.80	1.44	12.18	胴切れ
12	4.20	2.50	2.00	1.68	10.50	
13	4.10	2.90	1.60	1.41	11.89	
14	4.10	2.80	2.00	1.46	11.48	疵 米
15	4.10	2.60	1.80	1.57	10.66	
16	4.00	2.80 (3.00)	1.70	1.42	11.20	焼けぶくれ
17	4.00	2.90	2.10	1.37	11.60	焼け太り
18	4.00	2.60	1.40	1.53	10.40	未熟粒
19	4.00	2.40	2.20	1.66	9.60	焼け太り
20	4.00	2.40	2.00	1.66	9.60	胴割れ
小計	40.70	26.80	18.60	15.20	109.11	
21	4.00	2.40	2.10	1.66	9.60	焼け太り
22	3.90	2.40	1.80	1.62	9.36	
23	3.90	3.00	2.00	1.30	11.70	
24	3.80	2.80	2.10	1.35	10.64	焼けぶくれ
25	3.80	2.60	1.70	1.46	9.88	疵 米
26	3.80	2.50	1.70	1.52	9.50	
小計	23.20	15.70	11.40	8.91	60.68	
合計	108.60	69.70	49.20	(1.56) 40.62	(11.20) 291.32	
平均	4.18	2.68	1.89	1.56	11.20	

第 4 表 全 Grid 遺物包含層検出の炭化米

No.	L	B	Th	L/B	L×B	remarks
1	4.90	3.00	1.90	1.63	14.70	
2	4.80	3.00	1.50	1.60	14.40	未熟粒
3	4.70	3.00	2.00	1.56	14.10	
4	4.60	2.40	2.10	1.91	11.04	胴割れ
5	4.60	2.70	1.80	1.70	12.42	疵 米
6	4.50	3.00	1.80	1.50	13.50	
7	4.50	2.60	2.00	1.73	11.70	
8	4.50	2.30	1.60	1.95	10.35	未熟粒
9	4.40	3.20	2.00	1.37	14.08	
10	4.40	2.70	1.60	1.62	11.88	胴切れ
小計	45.90	27.90	18.30	16.57	128.17	
11	4.40	2.70	2.00	1.62	11.88	
12	4.40	2.60	2.10	1.69	11.44	疵 米
13	4.40	2.60	1.70	1.69	11.44	
14	4.40	2.60	1.50	1.69	11.44	未熟粒
15	4.30	3.10	2.00	1.38	13.33	
16	4.30	3.00	1.80	1.43	12.90	疵 米
17	4.30	2.60	2.00	1.65	11.18	
18	4.30	2.60	1.70	1.65	11.18	
19	4.30	2.40	1.70	1.79	10.32	
20	4.20	2.60	2.10	1.61	10.92	疵 米
小計	43.30	26.80	18.60	16.20	116.02	
21	4.20	2.50	1.80	1.68	10.50	
22	4.20	2.50	2.00	1.68	10.50	
23	4.10	3.00	2.00	1.36	12.30	
24	4.10	3.00	2.20	1.36	12.30	
25	4.10	2.60	2.10	1.57	10.66	疵 米
26	4.00	2.80	2.00	1.42	11.20	厚さ焼けぶくれ
27	4.00	2.60	2.00	1.53	10.40	
28	4.00	2.40	1.80	1.66	9.60	疵 米
29	3.90	2.50	2.10	1.56	9.75	厚さ焼け太り
30	3.60	2.10	1.70	1.71	7.56	
小計	40.20	26.00	19.70	15.53	104.77	
合計	129.40	80.70	56.60	(1.01) 48.30	(11.63) 348.97	
平均	4.31	2.69	1.89	1.60	11.59	



第 5 表 H-37 Grid 第Ⅲ層検出の炭化小麦

No.	L	B	Th	L/B	L×B	remarks
1	4.20	2.50	2.60	1.68	10.50	
2	3.70	2.40	2.10	1.54	8.88	
小計	7.90	4.90	4.70	3.22	19.38	
平均	3.95	2.45	2.35	1.61	9.69	

第 6 表 H-32 Grid 第Ⅲ層検出の炭化小麦

No.	L	B	Th	remarks
1	3.40	2.70	2.10	
2	3.30	2.70	2.30	
3	3.20	2.70	2.10	疵
小計	9.90	8.10	6.50	
平均	3.30	2.70	2.10	

第 7 表 全 Grid 遺物包含検出の炭化小麦

No.	L	B	Th	L/B	L×B	remarks
1	4.40	3.00	2.40	1.46	13.20	
2	3.60	2.80	2.00	1.28	10.08	
3	3.50	2.30	2.10	1.52	8.05	
4	3.20	2.70	2.40	1.18	8.64	焼けただれ
5	3.10	2.40	2.10	1.29	7.44	
6	3.00	2.40	2.00	1.25	7.20	焼けただれ
7	3.00	2.50	2.40	1.20	7.50	
小計	23.80	18.10	15.40	9.18	62.11	
平均	3.40	2.58	2.20	1.31	8.87	

第 8 表 H-32 Grid 第Ⅲ層検出の炭化小麦

粒	L	B	Th	L/B	L×B	remarks
大麦	5.10	3.40	2.30	1.50	17.34	疵粒

種類 Grid	炭化米粒		炭化小麦		炭化大麦		備 考
	資料粒数	計測数	資料粒数	計測数	資料粒数	計測数	
H-37 第Ⅲ層	56	定形0.3g 28粒 (80.00%)	2	2 (100%)	-	-	米粒0.017g
H-32 第Ⅲ層	40	定形0.3g 26粒 (62.50%)	3	3 (100%)	1	1 (100%)	米粒0.012g
全Grid 遺物包含層	81	定形0.3g 30粒 (37.04%)	7	7 (100%)	-	-	米粒0.01g
合 計	156	84粒 (53.85%)	12	12 (100%)	1	1 (100%)	計量にはMettlee PS 1200 使用

(佐藤敏也氏計測)

#### 自然遺物

自然遺物は魚骨、獣骨等が検出され、貝殻は微量であった。

魚骨は確認された魚は6科7種で最小個体数は46個である。(S.P.1~3は未同定である。)種別の出土頻度は第B表に示した。これによるとベラ科が最も多い。種は不明である。次にタイ科で、ヘダイ、クロダイ、チダイ等がみられた。ハタ科は種不明である。フェフキダイ科はハマフェフキ、ヨロシマクロダイ等が検出された。ブダイ科はナンヨウブダイが確認できた。全体として出土量は獣骨に比して少量である。

獣骨は本遺跡で最も多く、牛、馬、イノシシ等の陸獣が中心であるが、わずかに海ガメ、ジュゴン等の海獣も検出された。

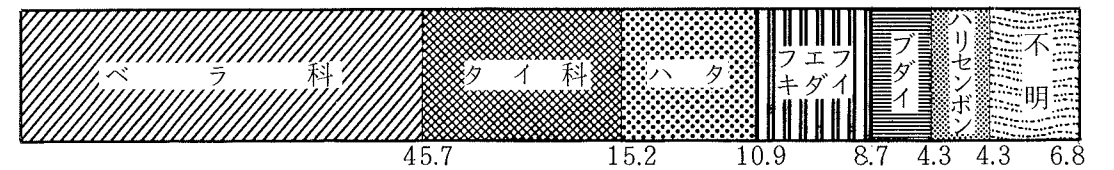
陸獣のうち、最小個体数の明確なものは牛—9個体、馬—3個体、である。イノシシは出土量は最も少なく、骨自体も小さい感を受ける。また、牛は中手骨、脛骨、上腕骨、脊椎、大腿骨、第6頸椎等に幅2~3mm、深さ2mm前後の傷痕が2~4カ所確認できる。鋭利な刃物による切痕と思われる。食用として用いたのであろうか。

なお、獣骨の同定は琉球大学教授、川島由次氏にお願いした。

第 A 表 魚骨出土一覽

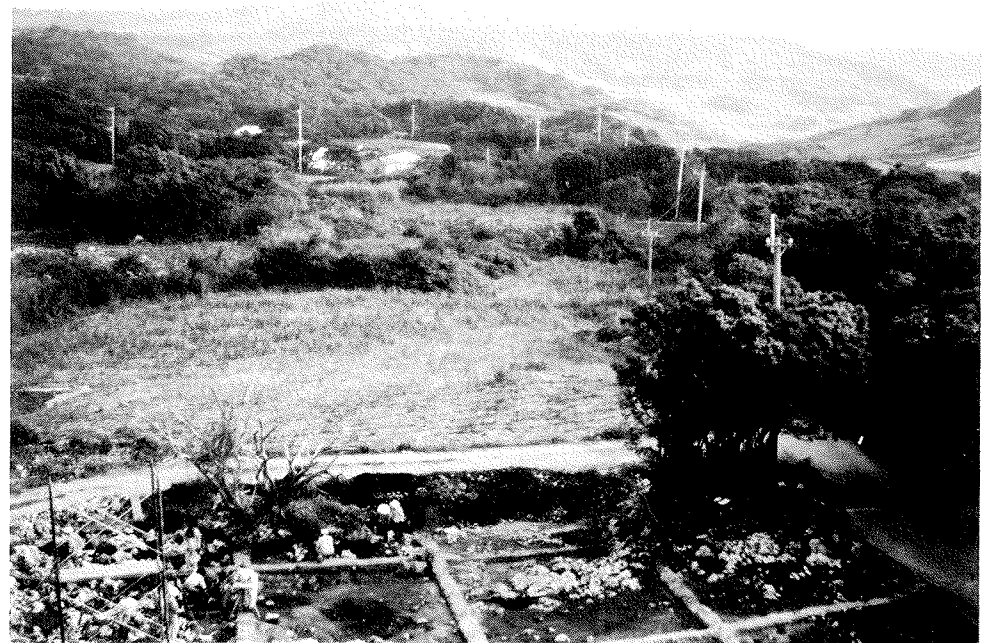
骨名	出土地				遺構		層不明	表採	合計	最少 個体数	
	I層	II層	III層	IV層	土壇	柱穴					
顎	ブダイ科	2		1   1 1   2				1	9	2	
	ベラ科		3   1	2   3 4		1		1	15	6	
	タイ科	1	2   2	2   2	1	1   1 1	1	1	15	7	
	フェフキ ダイ科		1   1 1	3   1					7	4	
	ハタ科	2		2   3 1		1   1			10	5	
	ハリセンボ ン科			2					2	2	
骨	S.P. 1					2			2	2	
	" 2			1 2				1	4	2	
	" 3			1					1	1	
	ブダイ科			1					1	1	
咽 頭 骨	ベラ科	2	1   1	1   2 8		2	1	2	1	26	21
	脊椎骨	1	4	11		5	1	2		24	—
その他	3	16	33		3		5	1	61	—	
合計	11	38	90	1	18	3	12	4	177	53	

第 B 表 魚種別出土頻度





発掘区（上御願地区）遠景



発掘区より上稲福をみる

図版 1 遺跡の遠景





発掘区近景（発掘前）



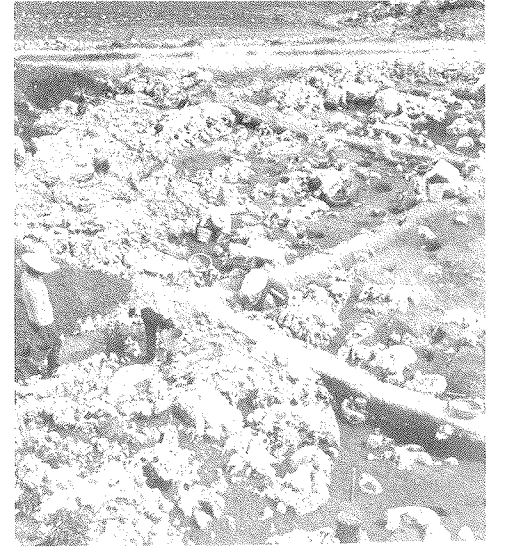
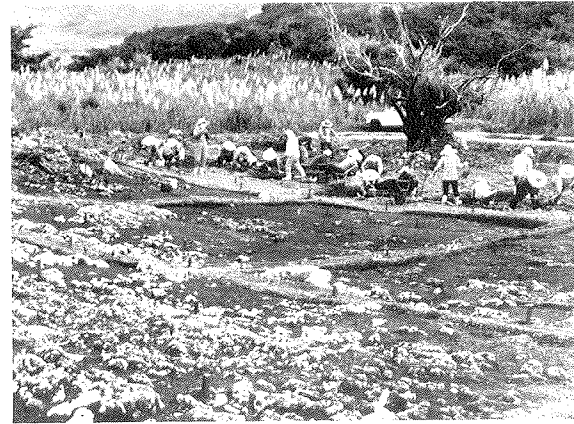
発掘終了後遺構を砂で保護



上御願（北から）



発掘地区内にある祠



图版 4 发掘风景





上御願（南から）



拝所（上御願）に伴う石列遺構



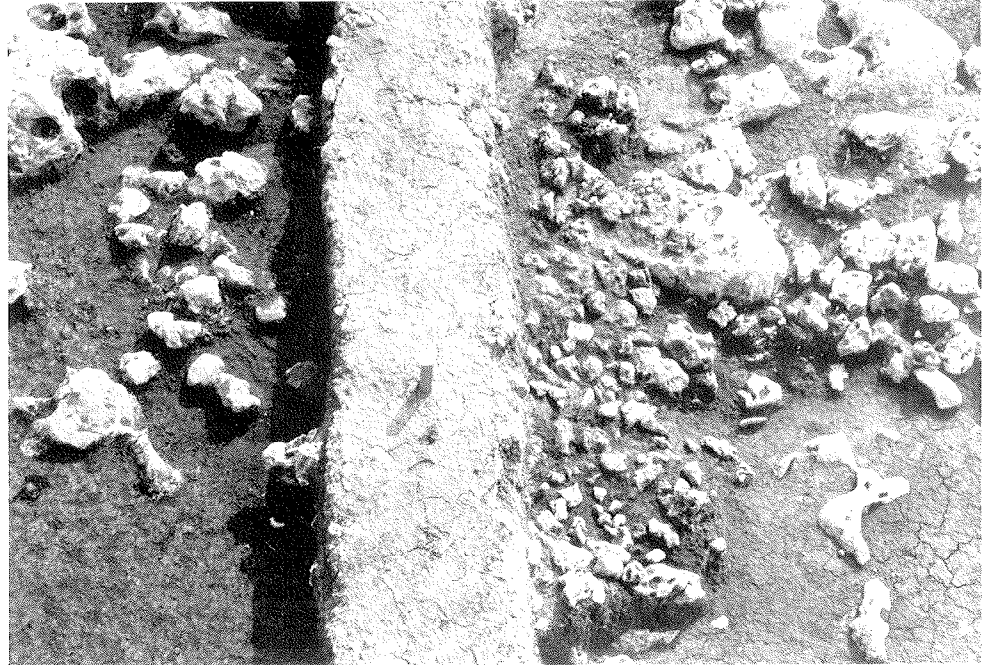


柱 穴 群

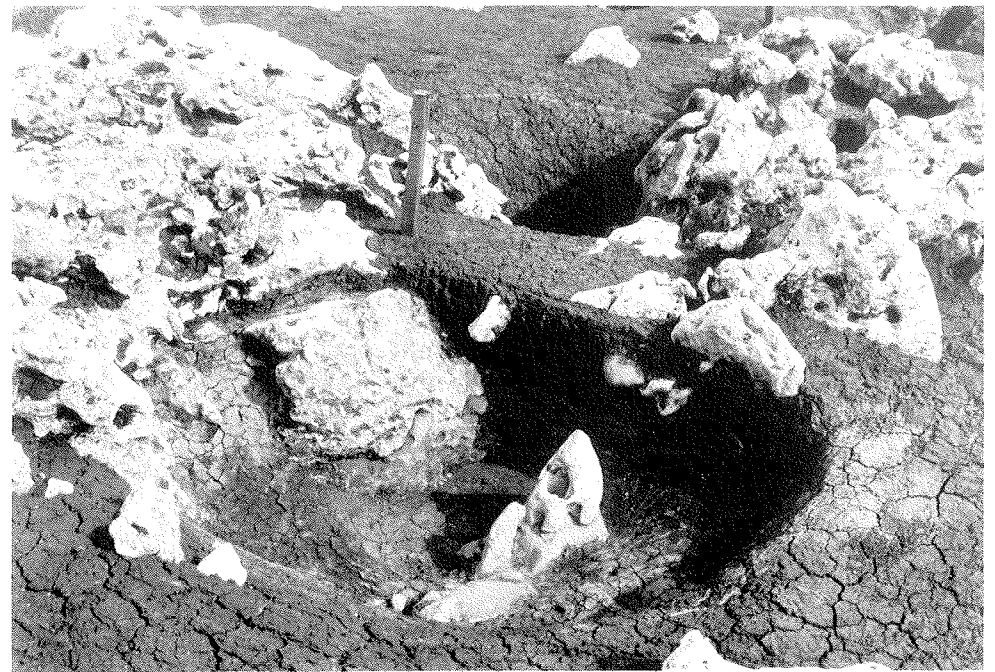


同 上

图 版 6 遗 构

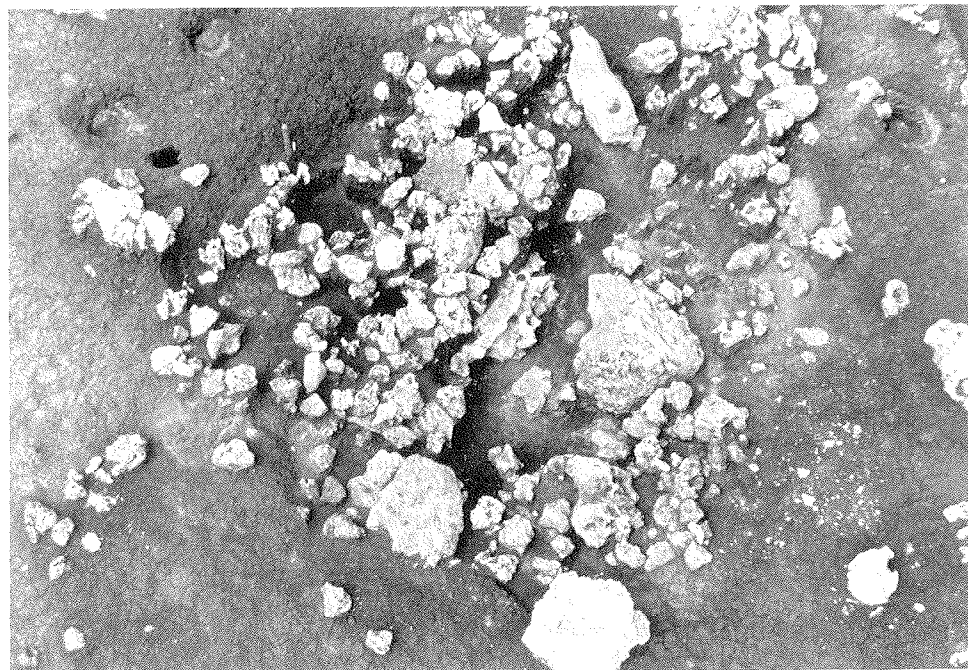


第 3 号 礫 群

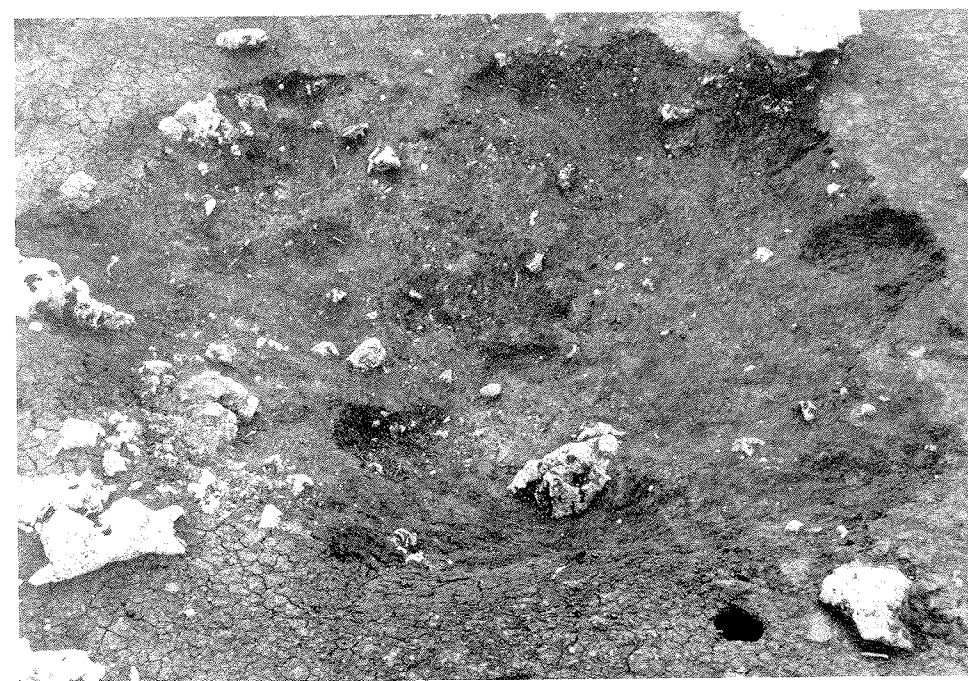


第 2 号 土 坑

图 版 7 遺 構

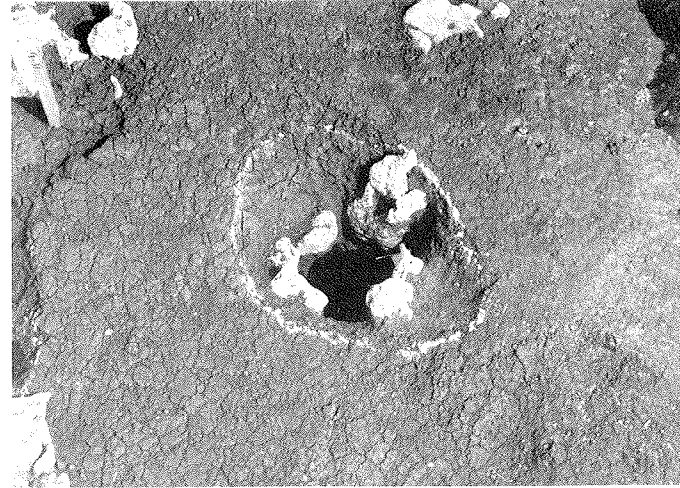


第 4 号 土 壤

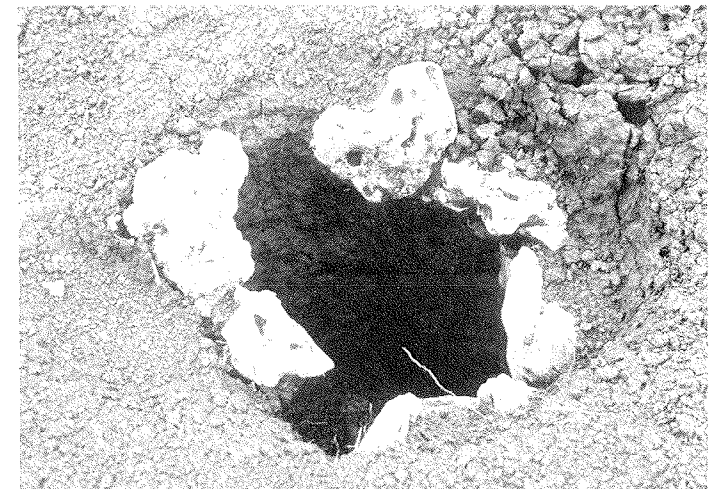


第 4 号 土 壤 ( 礫 群 を 除 去 し た 状 態 )

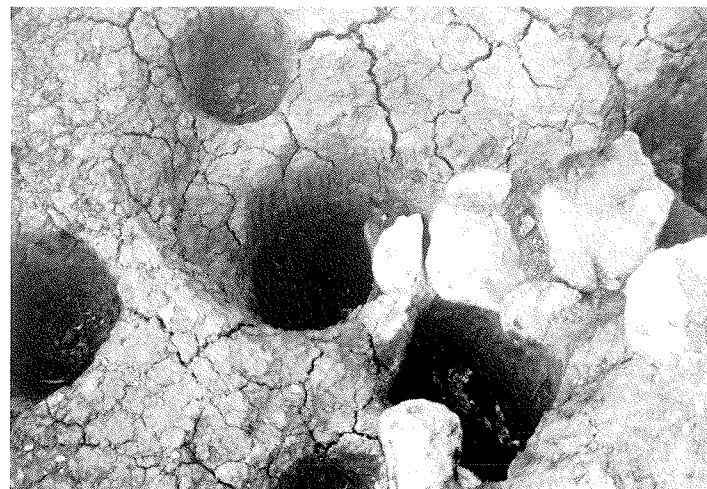




楔石のある柱穴

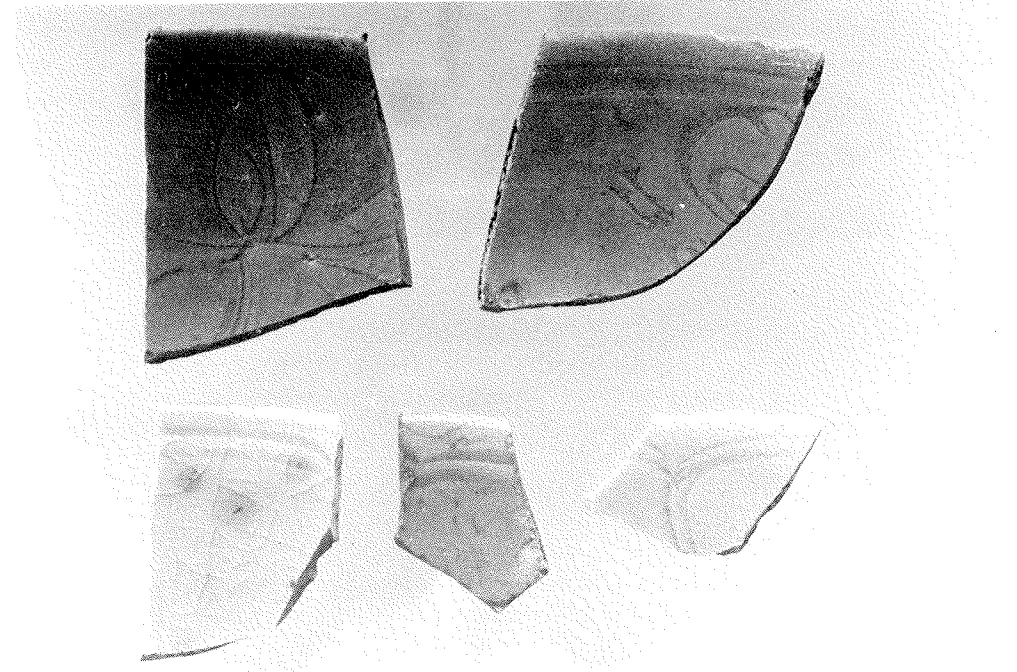


楔石のある柱穴

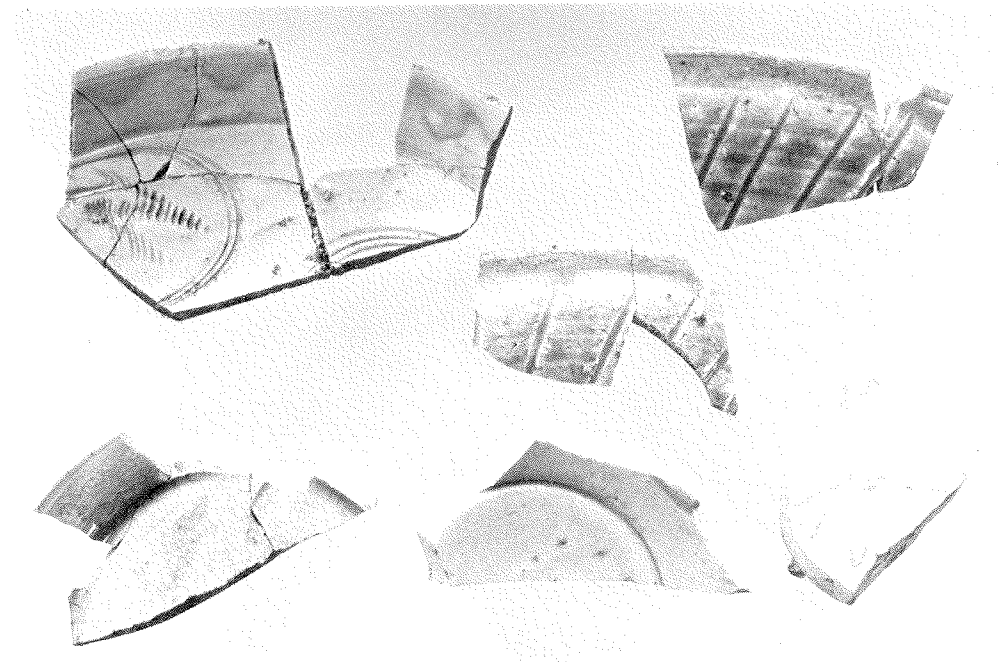


図版 9 遺 構





青磁（劃花文碗）

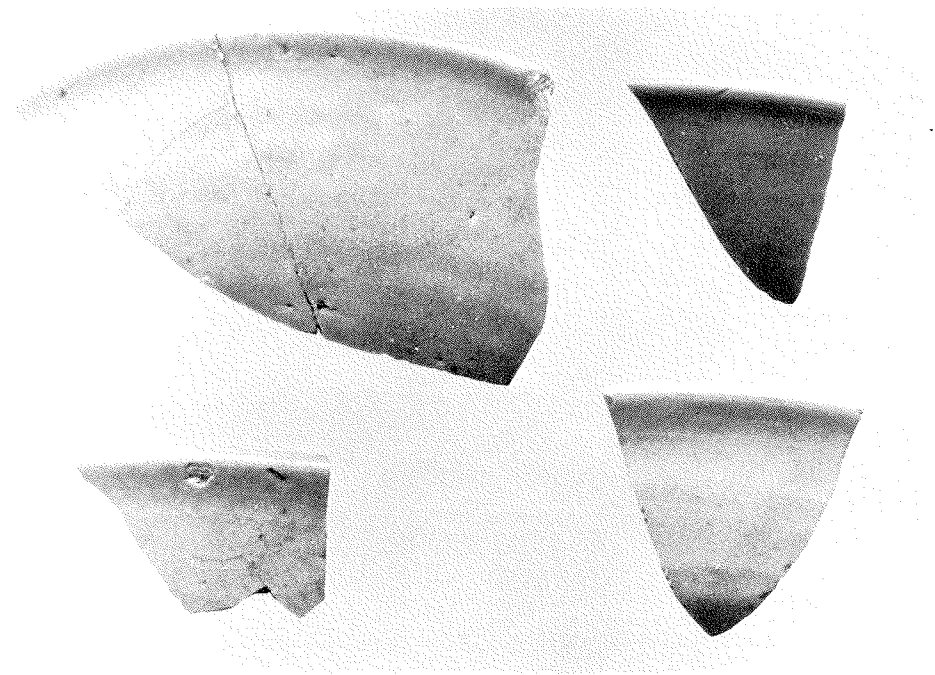


青磁櫛目劃花文碗及ひ皿

図版 10 青 磁

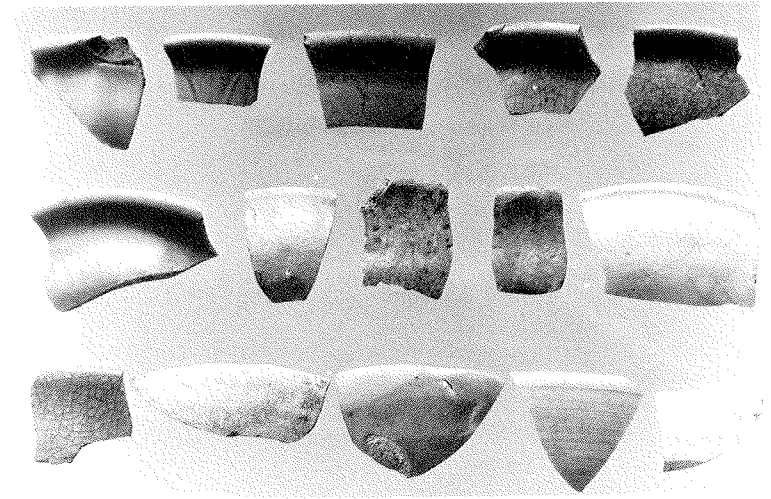


篋削鎬蓮弁文碗

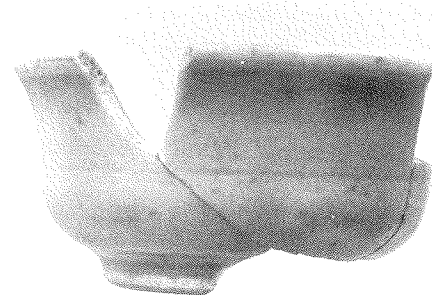


無文碗

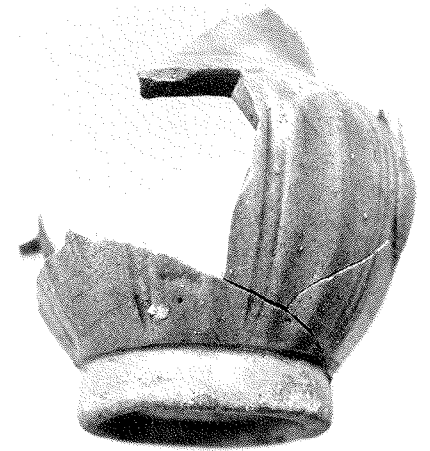
図版 11 青磁



青磁鉢・皿

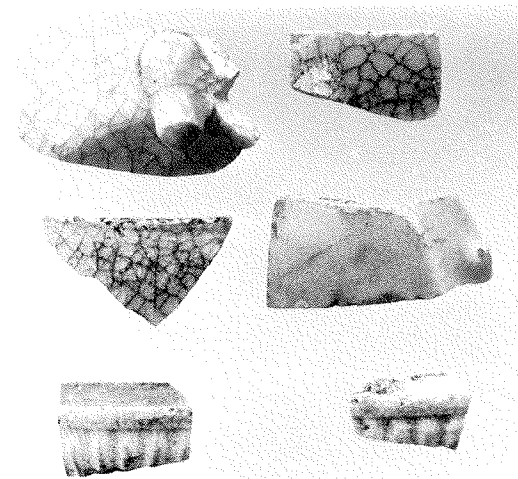


無文小碗（青磁）



水注

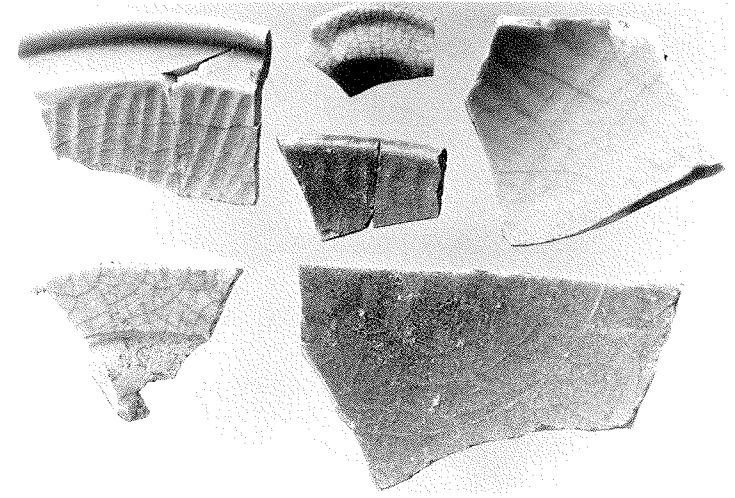
香炉



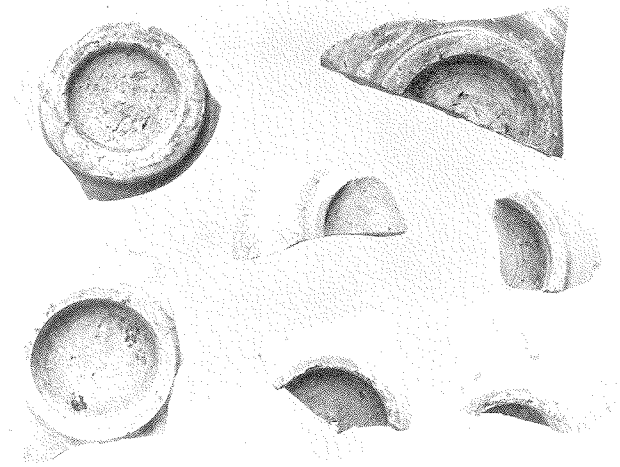
合子

图版 12 青磁

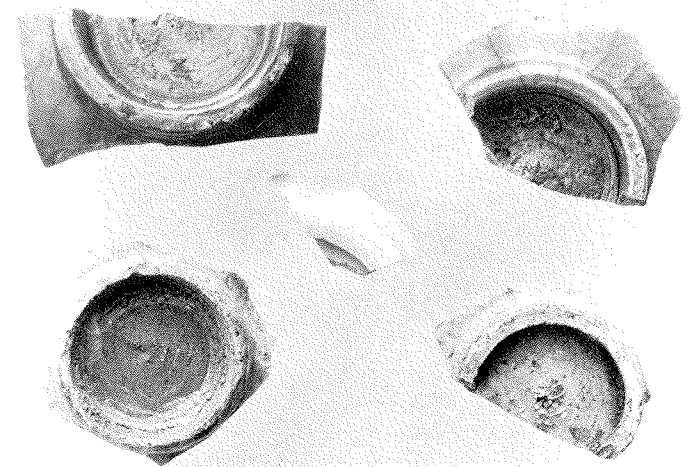
青磁盤



青磁底部

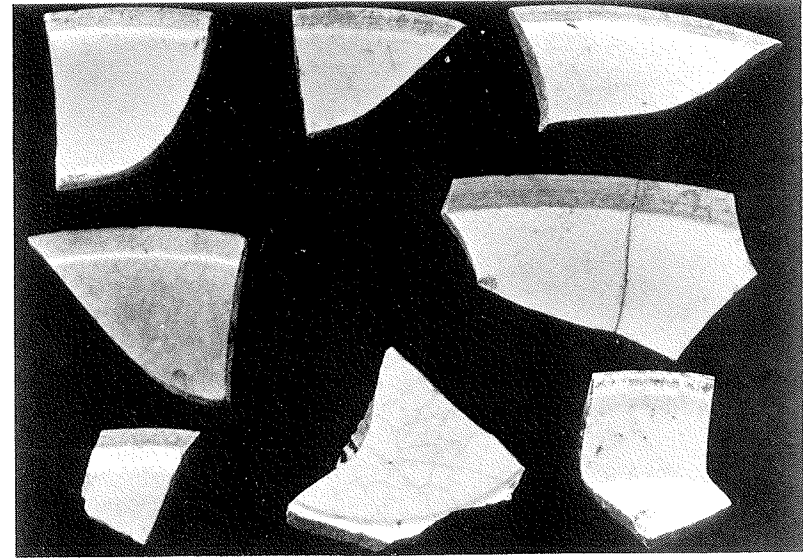


同上

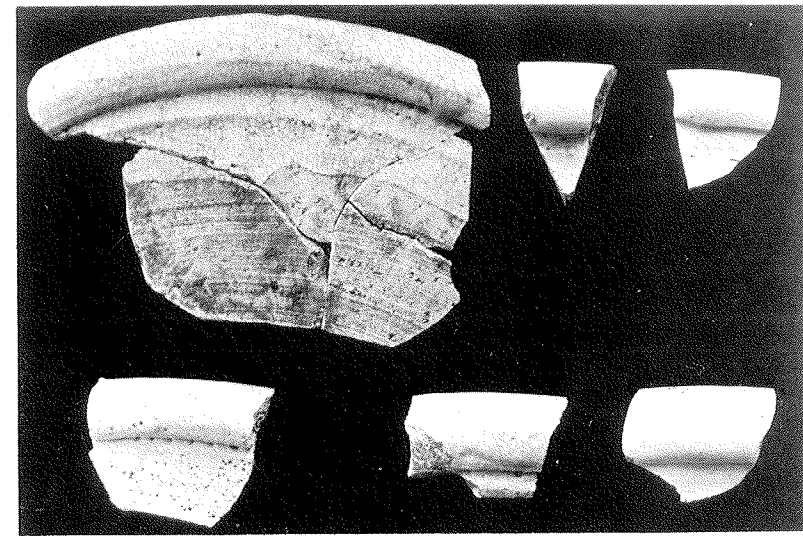


图版 13 青 磁





口禿白磁皿

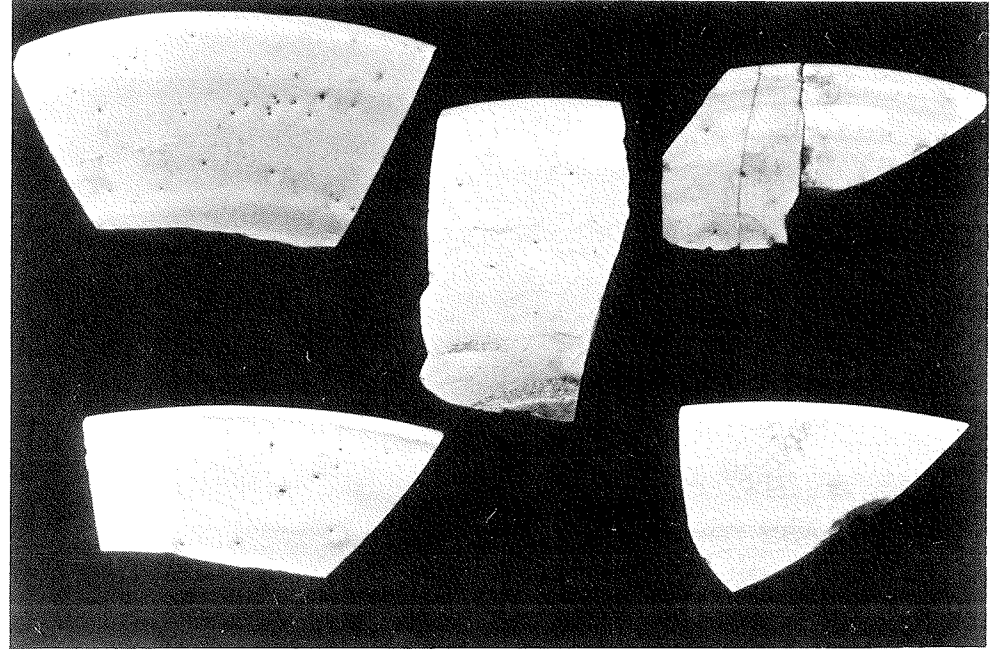


玉縁白磁皿

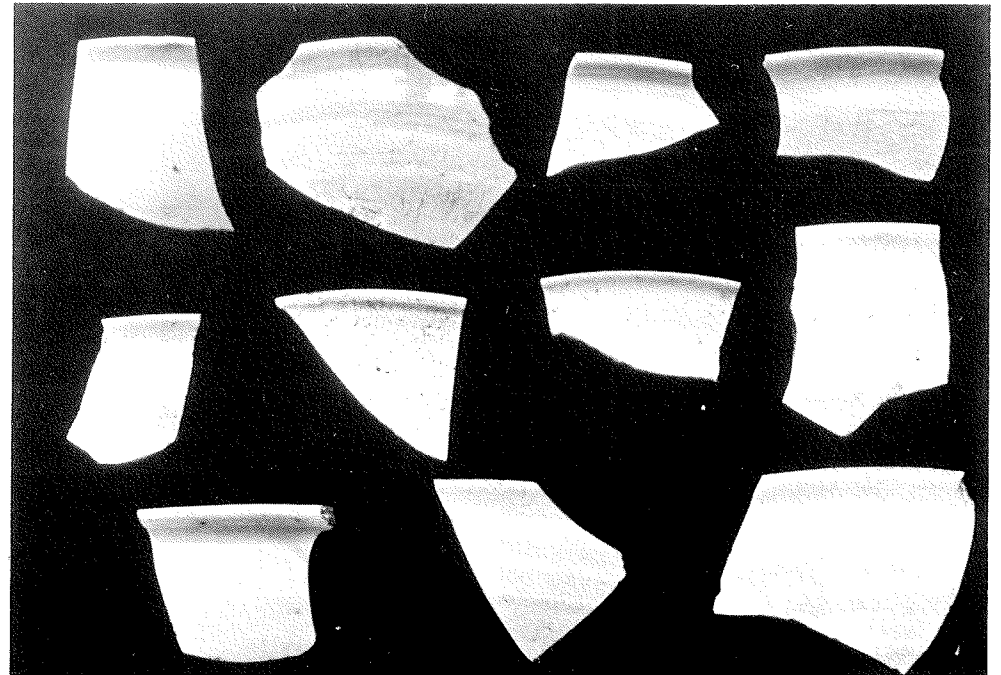


白磁皿

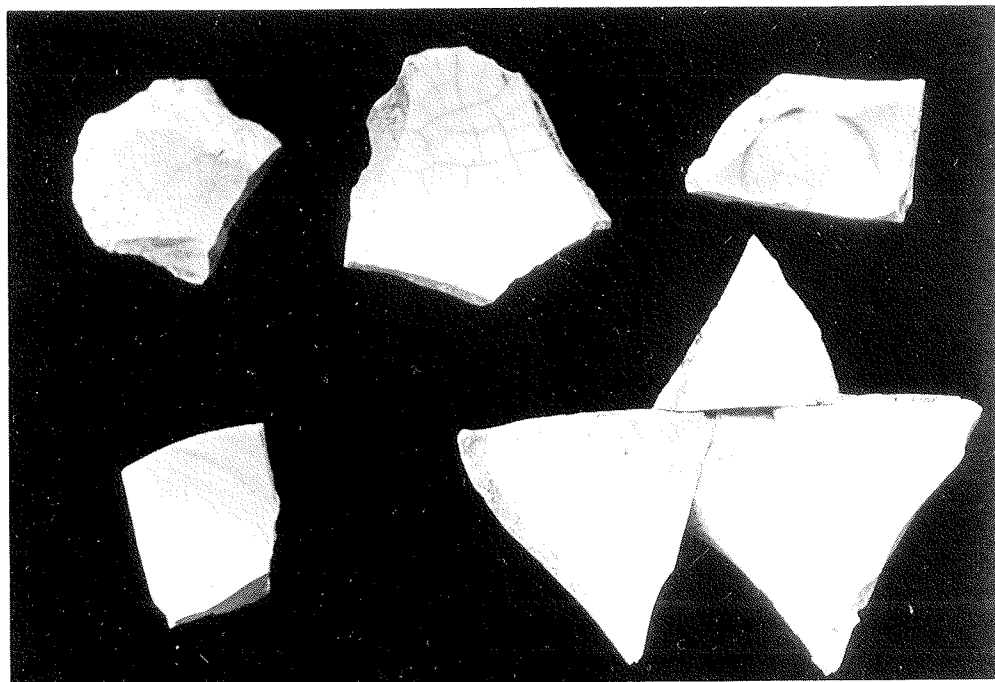
図版 14 白磁



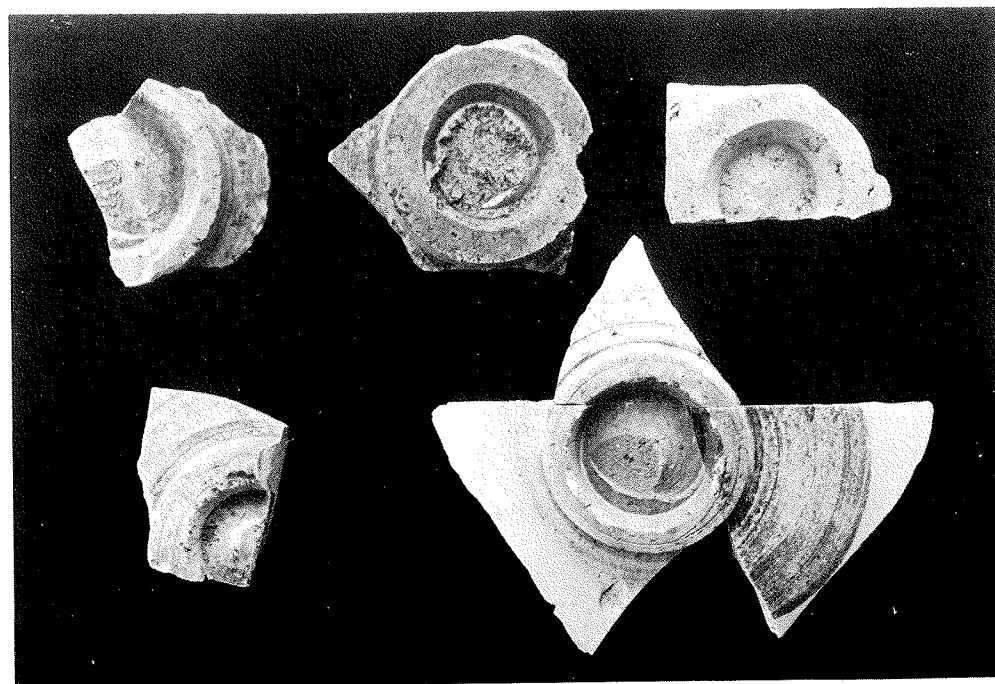
内彎タイプの白磁碗



外反タイプの白磁碗

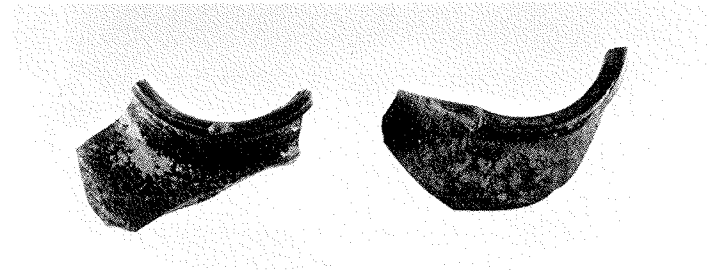


白磁底部



同上

图版 16 白磁

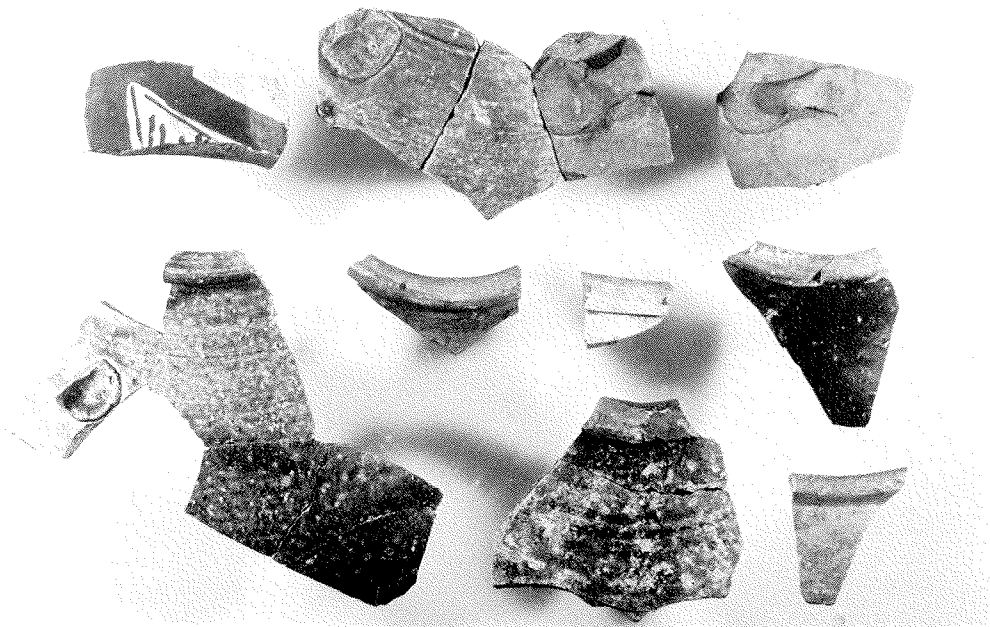


茶 入



黒釉陶器

白地鉄絵壺破片



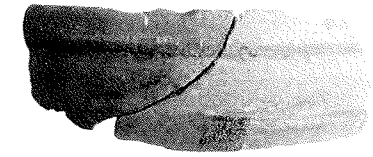
鉄 釉 陶 器

図版 17 陶 器

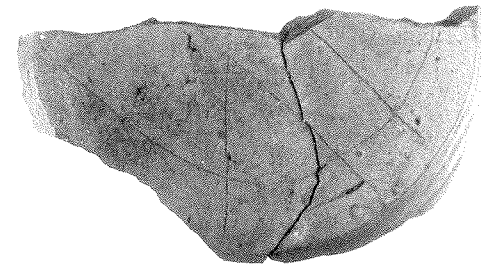




急須注口



碗



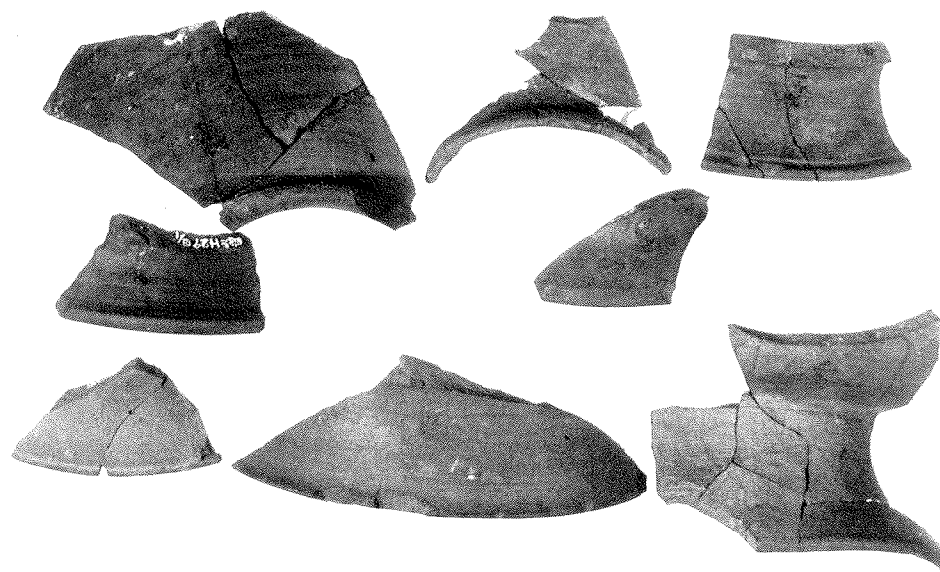
網代文様をもつ底部



壺



鉢



壺口縁破片



タタキ目、波状文のある中世須恵

図版 19 中世須恵

玉 類



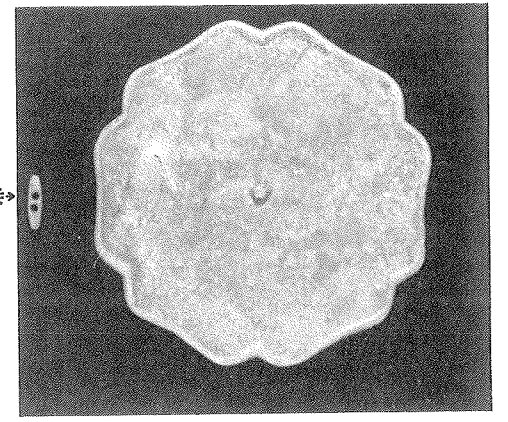
円形状土製品



土製勾玉及び  
土 錘

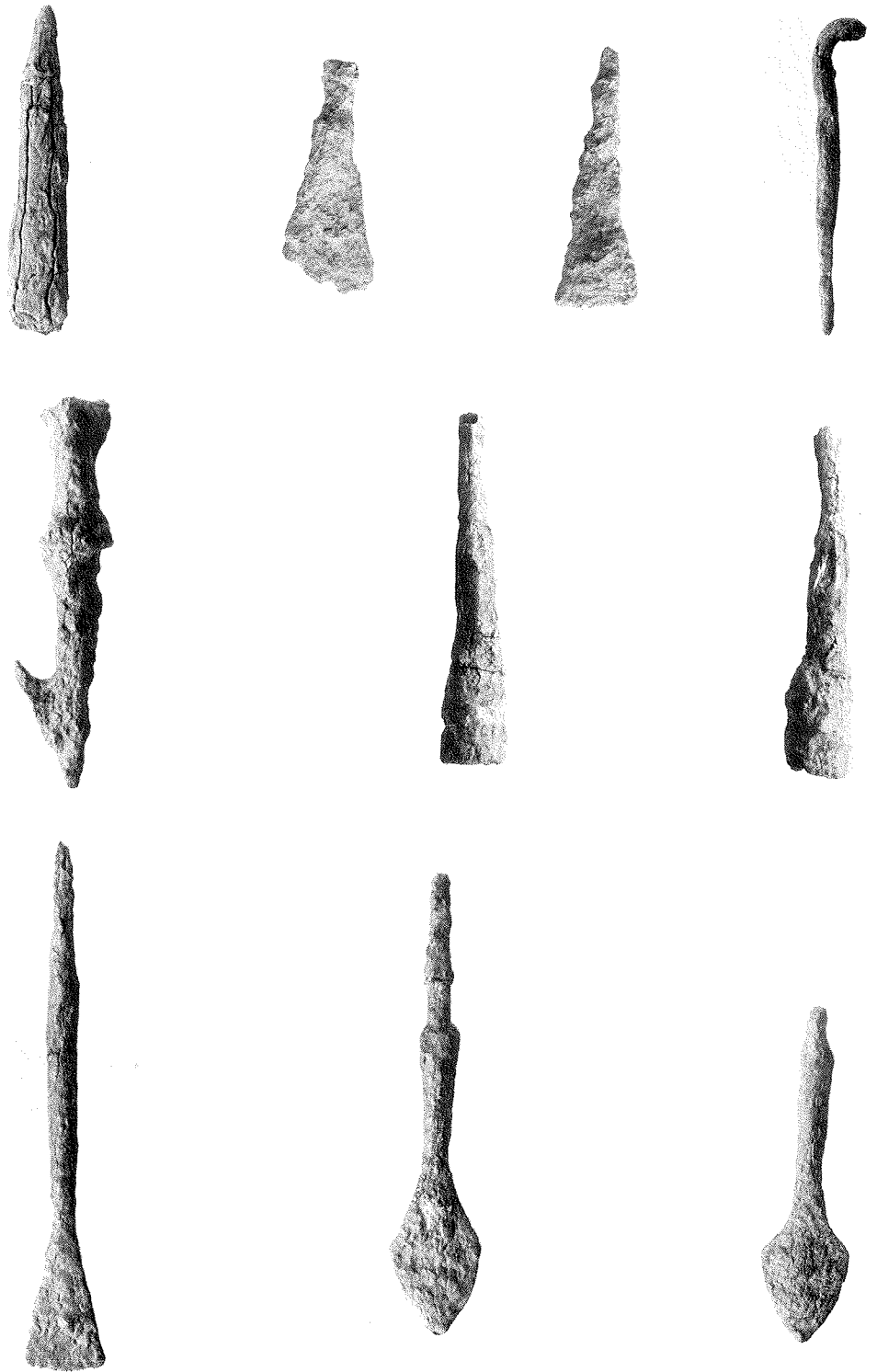


古鏡（銅鏡）



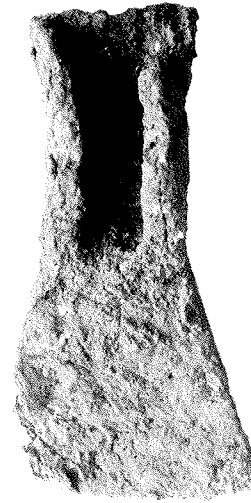
柱穴一括出土の玉

青銅製飾金具



图版 21 鉄製品





斧



刀子



刀子



ヤリガンナ

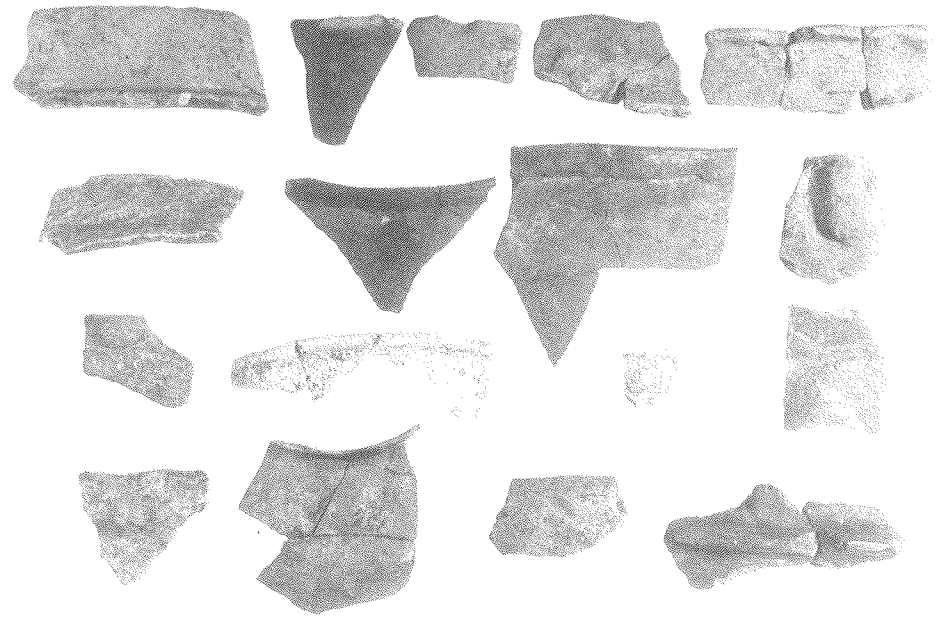


刀子

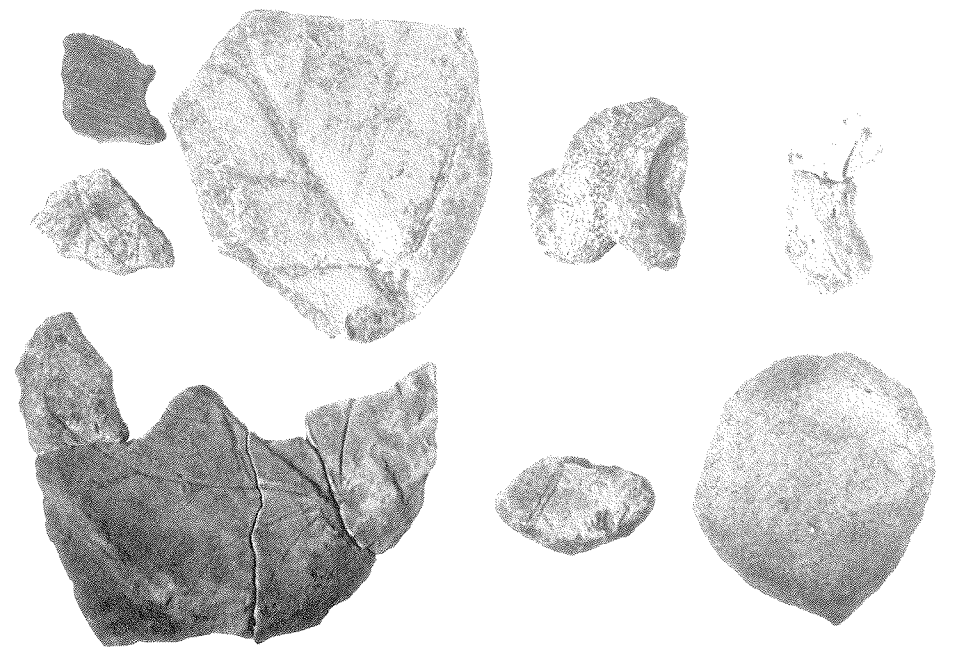


有孔製品・砥石・つぶて石

滑石

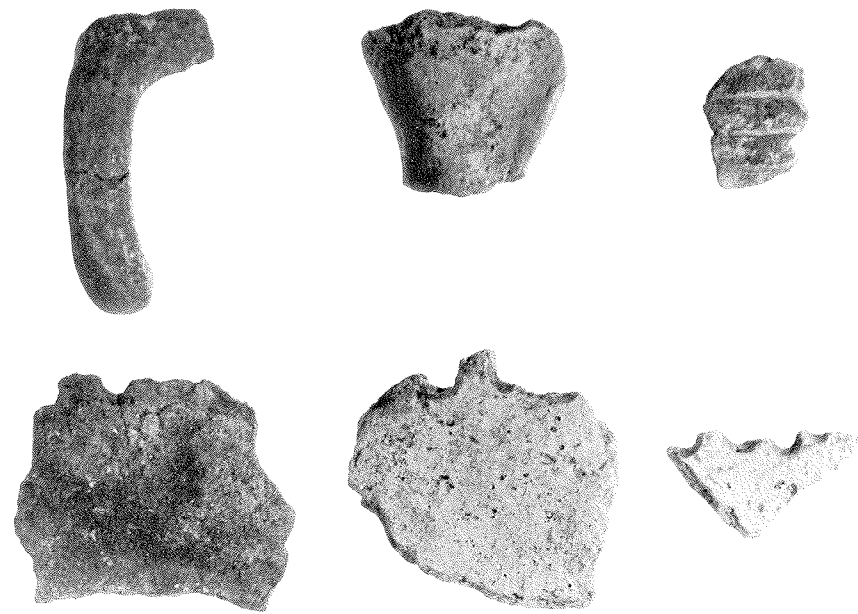


土器口縁部

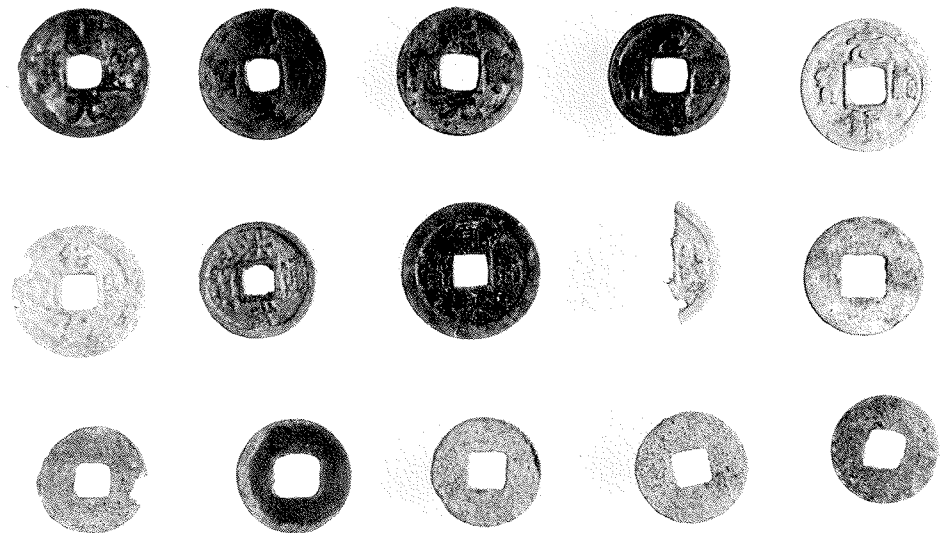


土器底部

図版 23



土 製 品



古 錢

圖 版 24





---

沖縄県文化財調査報告書第50集

稲福遺跡発掘調査報告書

(上御願地区)

印刷 昭和58年3月25日

発行 昭和58年3月31日

発行 沖縄県教育委員会

編集 沖縄県教育庁文化課

〒900 那覇市旭町1番地

(沖縄配電ビル6階)

TEL (0988) 66-2731~3

印刷 松本タイプ印刷所

那覇市久茂地2-24-11

TEL (0988) 62-8125・8126

---

